

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES CENTER

東北学院史資料センター年報

LIFE
LIGHT LOVE

Vol. **10**
2025.3.1



2023年度公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」から

「東北学院における夜間教育の歴史」

齋藤 誠

寄稿

「東北学院大学土樋キャンパスの建築遺構に関する調査報告」

崎山 俊雄

「史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告」

(Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析」

藤野 雄大

「戦前の東北学院専門部の朝鮮人留学生」

松谷 基和

「Our Trip to Japan and China(3) -外国伝道局からの来訪者(2)-」

日野 哲

「E・H・ゾーグがみた鈴木義男の姿

-ゾーグが残した写真・伝記を中心に-

奈良輪俊幸

2024年度行事紹介

2024年度公開シンポジウム「工学部のこれまでとこれから」開催報告



学校法人 東北学院

CONTENTS

あいさつ

『東北学院史資料センター年報』第10号発行にあたって

東北学院の構造物を記憶する

院長 大西 晴樹 1

2023年度公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」から

「東北学院における夜間教育の歴史」

齋藤 誠 2

寄稿

「東北学院大学土樋キャンパスの建築遺構に関する

調査報告」

崎山 俊雄 12

「史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告

(Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析」

藤野 雄大 28

「戦前の東北学院専門部の朝鮮人留学生」

松谷 基和 44

「Our Trip to Japan and China (3)

－外国伝道局からの来訪者(2)－」

日野 哲 53

「E・H・ゾーグがみた鈴木義男の姿

－ゾーグが残した写真・伝記を中心に－」

奈良輪 俊幸 66

2024年度行事紹介

2024年度公開シンポジウム「工学部のこれまでとこれから」開催報告 79

受贈資料一覧（2024年2月～2025年1月） 82

東北学院の沿革 83

『東北学院史資料センター年報』 第10号発行にあたって 東北学院の構造物を記憶する

院長 大西 晴樹



2023年の五橋新キャンパスの開設を契機に、東北学院の構造物は大きく変わりつつある。工学部のあった多賀城キャンパスは開発業者に売却したこともあって、男子寄宿舎旭ヶ岡寄宿舎の建物の解体工事から始まって、現在は旧多賀城キャンパスの全体の解体工事が終了しつつある。先日も幼稚園のクリスマス会の折に多賀城キャンパス跡地を一瞥したが、そこに工学部の構造物がいく重にも建ち並んでいたことはもはや想像できないほどである。泉キャンパスはどうか。広大な大学グラウンドは、ベガルタ仙台との包括連携協定により人工芝グラウンドが供用開始され、隣の天然芝グラウンドも芝が生育し、完成に近づいている。構造物の外見はそのままだが、ベガルタ仙台のクラブハウスとなる旧コミュニティセンターや2025年度から榴ヶ岡高校が移転する旧大学2号館は、工事関係者の車両の出入りからして、内装工事が相当進展していることを窺わせる。

土樋キャンパスでは先日まで轟音が鳴り響き、西側の2号館、3号館、4号館の解体工事が終了し、現在は整地作業が進んでいる。旧宣教師館であるデフォレスト館がぼつんと残された観があるが、広大な空間がキャンパス西側に出現しつつある。街路樹も伐採され、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスが一層鮮明になった。土樋キャンパス東側では、五橋キャンパスとの通路になっている駐車場を利用して、大学新棟建設構想が着手されつつある。過去と未来の構造

物が激しく交錯しているのが、東北学院の現状である。

さて、このような時、史資料センターの役割とは何であろうか。過去の構造物は解体と共に忘れられてはならない。それは教職員・同窓生にとって心の宝だからである。立体感、生活感のあるジオラマの作成やデジタルアーカイブを立ち上げて、創立150周年に向けて公開することにより、心の宝は共有・可視化されるであろう。また、あえて取り壊さないで保存している歴史的構造物の周年行事を開催し、東北学院の建学の精神と伝統を振り返ることは、東北学院の温故知新につながるであろう。東北学院本館と正門は来年2026年に100周年、重要文化財である旧宣教師館は再来年2027年に140周年、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂は2032年に100周年と目白押しである。

史資料センターを通じて、東北学院の歴史を振り返り、新しい東北学院を構想したいものである。



東北学院における夜間教育の歴史

東北学院史資料センター客員研究員

東北学院大学名誉教授

齋藤 誠

はじめに

本稿の目的は、東北学院の夜間教育の歴史を概観し、東北学院の歴史におけるその位置づけを考えることにある。東北学院は中等教育と高等教育に100年以上の伝統をもっているが、夜間教育はそれぞれにとって重要な一部であったことはさまざまな形ですでに指摘されている。しかし、これまで、夜間教育全体を概観する試みは十分にはなされてこなかった。本稿は、東北学院百五十年史編纂への準備の一つとして、夜間教育についてこれまで知られていることをまとめ、東北学院の夜間教育を概観するものである。

したがって、本稿では、一次資料による新しい事実の発掘というよりは、『東北学院百年史』や『東北学院の歴史』においてすでに指摘されている事実の再掲が中心となり、筆者が独自に調べた事実はずかである。その意味で、本稿は「研究」というより「報告」である。また、夜間教育の歴史といっても、本稿の記述の中心は夜間教育を担った教育組織の歴史であって、夜間教育の教育そのもの、すなわち教育目標や教育内容・方法の歴史ではない。これまで発表された文献の中には、東北学院における夜間教育の教育的特徴に関する記述は見当たらなかったからである。

なお、本稿は、2023（令和5）年12月に行われた東北学院史資料センター公開シンポジウム「東北学院の夜間教育を考える」における報告の原稿をもとに、いくつかの修正・補足を加えたものである。

1. 概観

次ページに東北学院の夜間教育に関する略年表を掲載した。ここでは、さしあたり3つのポイントを指摘しておく。

第一に、中等教育、高等教育とも東北学院における夜間教育の始まりは1942（昭和17）年であり、戦時下に同時に始まったという点である。それまでの50年以上の歴史のなかで夜間教育を行ってこなかった東北学院が、この年に学校全体で夜間教育の導入に踏み切るのである。後述のように、この決断は学校の経営危機への対応であり、その経営危機は当時の戦時体制の強化と密接に結びついていた。つまり、東北学院の夜間教育は、戦争を背景として生まれたということである。

第二に、戦時中の混乱をへて、戦後、東北学院の夜間教育は、社会から広く受け入れられ定着していくが、その過程は中等教育部門と高等教育部門とではかなり異なるという点である。中等教育では、戦後に新制の高等学校二部と名称こそ変わったが、実体的には発足時の中学部二部からの枠組みを維持していた。それに対して、高等教育では、終戦直後は専門学校二部、その後短期大学部をへて大学二部、さらには昼夜開講制における夜間主コースと形を変えていった。略年表においても、記事のほとんどが高等教育に関するものになっているのはそのためである。

第三に、東北学院が夜間教育を廃止する時期が、中等教育と高等教育とでは大きく異なる点である。高校二部が廃止されたのが1983年なのに対して、大学の夜間主コースは2015（平成27）年まで続く。のちに詳しくみるように、わが国における夜間教育への需要は、1950年代半ばから60年代前半がピークであり、70年代後半には社会的需要がかなり縮小していたにもかかわらず、大学の夜間教育がその後もかなり長く続いたことは、その理由とともに注目しなければならない。

＜東北学院の夜間教育に関する略年表＞

- 1942（昭和17）：高等学部商科（翌年「高等商業部」と改称）第二部を設置。
中学部（翌年「中学校」と改称）第二部を設置。
- 1946（昭和21）：高等商業部、同第二部を廃止。
 東北学院専門学校（英文科、経済科）
 および**同第二部を設置。**
- 1948（昭和23）：新制高等学校、同第二部を設置。
- 1949（昭和24）：新制大学（文経学部）を設立。
- 1950（昭和25）：専門学校第二部を短期大学部（英文科、経済科）に改組。
- 1951（昭和26）：短期大学部別科（英文科、商経科）を設置。
- 1952（昭和27）：短期大学部に法科を設置。
- 1959（昭和34）：短期大学部を大学文経学部二部（英文学科、経済学科）に改組。
- 1960（昭和35）：短期大学部を廃止。
- 1964（昭和39）：大学文経学部を文学部と経済学部
 に改組。文経学部二部は文学部二部（英文学科）と経済学部二部（経済学科）に改組。
- 1983（昭和58）：**高校第二部を廃止（募集停止は1980）。**
 大学「二部（夜間部）有職者特別入試」を導入。
- 2000（平成12）：大学文学部英文学科、経済学部経済学科および商学科に昼夜開講制を導入し、それぞれに昼間主コースと夜間主コースを設置。文学部二部と経済学部二部は募集停止。
- 2009（平成21）：大学経済学部昼夜開講制を廃止。夜間主コース募集停止。
- 2015（平成27）：大学文学部英文学科昼夜開講制を廃止。夜間主コース募集停止。

※太字は中等教育、それ以外は高等教育に関する部分

2. 導入とその後の困難

（1）導入

東北学院の夜間教育は、太平洋戦争開戦の翌年の1942（昭和17）年、当時の中等教育機関であった中学部に中学部二部（正式名称は第二中学部）、高等教育機関であった高等学部
 高等学部商科第二部という夜間部を設置したことによって始まる。ともに「二部」と通称され、これ以降、東北学院では夜間部＝二部という用法が一般的となる。修業年限は昼間部と同じで、中学部が5年、高等学部は3年、入学定員はともに100人であった。

夜間部設置の決断の背景にあったのは、学校財政

の危機であった。1930年代以降、東北学院は、アメリカの母教会からの財政支援の削減による財政難に苦しんでいたが、1941年には、日米関係の悪化のなかで、もはや米国ミッションボードからの財政支援をまったく期待できない状況となっていた〔百年史：872頁〕。自給自足を迫られた学校当局にとって、組織再編は不可欠であり、その中核となったのが、中学部と高等学部への夜間部の設置であった〔百年史：875－876頁〕。そのさい、高等学部については、入学者が集まっていない高等学部文科歴史科（定員45）と英文科（定員60）を廃止し、その定員を商科二部に充てることにした。それに対して、中学部二部の定員100は昼間部の定員削減を伴わない「純増」であった。

東北学院が夜間教育に学校経営上の新たな可能性を見出そうとすることには十分な理由があった。当時、上級学校への進学率が上昇するなか、夜間教育への社会的ニーズは高まっていたが、その受け皿は不十分であったからである。とくに中等教育についてはそれが深刻で、仙台市が夜間中学として設置していた図南中学では、入学定員100に対して1941（昭和16）度には392人の志願者が殺到していた〔百年史：877頁〕。東北学院中学部が夜間部を設置しても、定員を充足させるだけの入学者確保が期待できた。

それに対して、高等学部商科二部のほうは、仙台圏では高等教育を受けられる夜間部がないことから、定員充足は難しいとしても、廃止する文科の現状（入学者は歴史科、英文科あわせて30人程度であった）よりは多くの入学者が期待できた。しかも、夜間部は、すでに昼間部があることで、運営のための必要経費が少なく済み、授業料を低く設定しても十分に採算がとれることも魅力的であった〔百年史：876頁〕。

しかし、夜間部設置には、たんに経営上の思惑だけでなく、教育理念による正当化も必要である。とくに、学校で夜間教育に実際に携わる者にとっては、これがなければ単なる労働強化でしかない。そこで強調されたのが「労働会」の伝統であった〔百年史：877－878頁〕。

労働会とは、東北学院草創期の1892（明治25）年、押川方義がつくった組織であり、労働会に入った学生には、塾舎での共同生活のもと、学費を稼ぐための労働機会が提供された。最盛期にはいくつかの独自の事業を展開し、多くの学生の経済生活を支えた〔歴史：35－37頁〕が、その後は競争力が低下

し、1921（大正10）年には廃止されていた。このように、労働会は、夜間教育の組織ではなく、共同生活と労働機会提供の組織であった。しかし、「働きながら学ぶ」学生を支援するための組織であったことが強調され、労働会の伝統が、東北学院が夜間教育に関わる意義と結びつけられたのである。それ以降も、東北学院では、夜間教育の理念が論じられるとき「労働会の伝統」に言及されるのが常となる。

（２）その後の困難

1943（昭和18）年、中学部は中学校、高等学部商科は高等商業部と改称され、夜間部もそれぞれの中学校二部、高等商業部二部となった。また、修業年限がそれぞれ1年短縮され、中学校は4年、高等商業部は2年となった。この年度までは、中学校、高等商業部とも二部には期待どおりの入学者があり、まずは順調なスタートを切ったようである。入学定員100に対して高等商業部では70人以上の入学者があり、中学校二部では志願者は444、合格者227で入学定員を超える入学者を確保している〔時報：161号〕。中学校二部では入学者の年齢層も幅広く、20代や30代、なかには40代の者もいたという〔竹井：10頁〕。

しかし、この頃から顕著になる戦況の悪化は、学校生活に深刻な影響をもたらすようになる。昼間部では高等商業部、中学校とも、学生・生徒の勤労働員が組織的かつ大規模に行われ、通常の学校生活ができなくなっていった。もともと勤労者が通っていた二部には勤労働員はなく授業は続けられた〔竹井：10頁〕が、その代わり灯火管制下の授業では窓の遮蔽などの苦労があった。

さらに、高等商業部の学生は、1943年6月の学徒動員令によって徴兵猶予が停止され、応召、入営が相次ぐことになる。1944年のデータによると、高等商業部2年生では在籍者175人中、応召1、入営22、二部では在籍者71人中、応召5、入営25、3年生では在籍者111人中、応召2、入営67、二部では在籍者53人中、応召4、入営42となっている〔百年史：893頁〕。ここで注目すべきは、応召・入営の割合が昼間部学生で32%なのに対して二部学生では61%と倍近くも高いことである。

その後、中学校二部は戦中・戦後をなんとか生き延び、戦後の新制高校の夜間部につながる事ができた。1946年3月には第1回卒業生102名を出している〔竹井：10頁〕。それに対して、高等商業部は、1943年、国の文科系学校の整理統合方針をうけ

て、1944年度からの募集停止を余儀なくされる（廃止は在籍学生がいなくなる1946年）。その年、東北学院は、新たな高等教育機関として航空工業専門学校（航空工専）を設置するが、そこには夜間部は置かれなかった。東北学院における高等教育の夜間教育は、導入後わずか2年でいったん途切れることになる。

それが復活するのは、終戦の翌年、1946年に東北学院専門学校が設置され、そこに夜間部が置かれたことによる。専門学校とは、戦後、新制大学発足までの移行期において、戦前からある専門学校令に基づいて設置された高等教育機関（修業年限3年）である。東北学院は、英文科と経済科、それぞれの二部の4科からなる専門学校の設置を申請し認められた〔百年史：918頁〕。入学定員は英文科100、同二部50、経済科150、同二部100であった。戦後の高等教育の出発点となったこの専門学校に夜間部を置いたことは、新しい時代の教育において、東北学院が夜間教育を重視し続けることを宣言したものであった。

さらに、この専門学校を昼間部、夜間部とも男女共学としたことも重要である。これによって、女子が高等教育を受ける機会が大きく拡大されることになる。また、東北学院においては男女共学を導入する方向性が示され、後にふれるように、新制東北学院高校の夜間部を男女共学とすることにもつながったのである。

こうして出発した東北学院専門学校の夜間部は、戦後混乱期のなか、地域社会から歓迎された。設置初年度、1946年度の出願者は、英文科二部が入学定員の3.0倍、経済科二部は3.7倍に達し（百年史：919-920頁）、入学定員を確保するに十分な数であった。しかも注目すべきは、これらの倍率は、いずれも昼間部の倍率よりかなり高かったという点である。こうして、東北学院の高等教育にとって、夜間教育は不可欠の構成要素となっていったのである。

3. 高校の夜間教育

（１）発足

戦後の新学制によって、中等教育は、それぞれ3年の中学校と高等学校（高校）において行われることとなり、東北学院でも、旧制中学校を廃止し、1947（昭和22）年に新制東北学院中学校を、1948年に東北学院高校を設立する。もっとも、東北学院では、中学校と高校の連続性を保つため、両者を旧制中学校があった東二番丁校地に置き、中高一体の運

営を行った。

このさい、それまでの旧制中学校の夜間部は高校でも存続することとなった。東北学院高校二部である。修業年限は、夜間に確保できる授業数をもとに、昼間部より1年長い4年としたが、それは、これまでの旧制中学校の夜間部の修業年限と同じであったため、大きな制度変更とは受け止められなかった。入学定員もこれまでと変わらず100人であった。

高校二部となつてのいちばんの変更は、男女共学の導入であった。高校の昼間部は、宮城学院女子高校との共存という点から、これまでどおり男子校であったが、夜間部では、その問題がなかったため、男女共学が可能であった。上述のとおり、これまでの中学校二部でも多くの志願者を集めていたが、男女共学により、高校二部は志願者の幅をさらに広げるとともに、昼間部にはない新しい校風を生むことになる。

高校二部の初期の状況についての情報はあまり多くない。しかし、高校二部に1年生から4年生がそろった1951年4月のデータでは、入学者数112、生徒総数は441となっており、定員が充足されていることがわかる〔竹井：15頁〕。ちなみに、そのとき、東北学院中学校の生徒は491人、高校が473人である〔時報：166号〕から、当時の東北学院の中等教育において高校二部が占めていた割合の大きさがわかる。

その背景にあったのは、高校の夜間教育への社会需要の高まりであった。当時の時代状況のなかで、高校までは進学したいと考える者が増える一方、経済的にそれがかなわない者も多くいた。政府の調査によると、1950年における全日制高校への進学率は男子48.0%、女子36.7%、全体で42.5%である〔学校基本調査：統括表4 進学率〕。そうしたなか、昼働きながらも高校で学びたいと願う若者が増え、夜間高校の志願者が急増する。そうした者にとって、東北学院高校は、市内中心地に学校があり、仕事を終えてから通うにはひじょうに便利であった。じっさい、1953年度のデータとして、年間の授業出席率が80%弱という記録が残っている〔竹井：16頁〕。こうして、東北学院高校二部は、地域になくてはならない夜間高校になったのである。

（2）その後の推移

東北学院高校二部の入学定員の推移は、夜間高校への社会的ニーズの変化をよく反映している。というのも、私立高校の入学定員は県当局への申請に

よって比較的簡単に変更できたため、高校は、多くの志願者が見込めるときには入学定員の増員を、見込めないときには減員を迅速に決めることができたからである。1948（昭和23）年のスタート時に100だった高校二部の入学定員は、入学希望者の急増に対応するため1953年に150に増やされ、翌54年にはさらに180に増やされている。それが150に戻るのは1961年であり、1965年にはもとの100に戻る〔時報：各年度の入試要項掲載号〕。

こうしてみると、仙台圏において高校の夜間教育への社会的ニーズがとりわけ高かったのは、1950年代半ばから60年代前半だったということになる。それは、全日制高校への進学率が50～60%の時期とほぼ重なる。この時期、東北学院高校二部は、生徒数600～700の大規模夜間高校となったのである。高校二部の全盛期といってよい。

しかし、1960年代後半以降、高度経済成長により豊かになった日本人にとって、夜間高校を必要とする者がしだいに減っていく。じっさい、全日制高校への進学率は、1965年にようやく70%に達したがその後の10年間で20ポイント以上上昇し、1975年には90%を超える〔学校基本調査：統括表4 進学率〕。東北学院の高校二部は、定員100の入学者も確保も難しくなり、1971年には入学定員を50に減らすことを余儀なくされる。しかし、その翌年の1年生は27人にとどまり〔学校案内〕、50人の入学定員確保もすでに難しくなっていた。

70年代後半になると、入学者の確保はさらに難しくなる。1975年にはかろうじて22人の新入生があったが、その翌年からは10人前後まで減る〔百年史：1186頁〕。もっとも、当時は、入学者減少への対応として、一定の要件を満たす者には2年次編入を認め、3年間で卒業できる入試制度が準備されており、それを利用して2年生として入学する者がいたので、これが入学者の全数ではない。しかし、生徒数の減少は止まらず、募集停止直前の1979年度における在籍生徒数は114、収容定員200（50人×4学年）の6割以下であった〔竹井：21頁〕。

（3）学校生活

高校二部の学校生活がどのようなものであったかを知るための資料はあまり残っていないが、1972（昭和47）年の『二部学校案内』からは、この時期の二部の学校生活を垣間見ることができる。

まず、生徒数であるが、全体で174人、学年別では1年生27人、2年生48人、3年生53人、4年生46

人で、1年生はやや少ないが、2年生以上は各学年とも50人前後で、50人教室がいっぱいになっていたことがわかる。

男女別では男子97人、女子77人である。ここから、男女共学が実質的なものであったことがわかる。女子生徒の最大のグループは准看護婦だったという。当時の制度によれば、准看護婦となるための学校には中卒で入学できたが、准看護婦から看護婦になるには高卒の資格が必要であった。そのため、養成学校で准看護婦資格を取ろうとしている者、あるいは准看護婦としてすでに病院に勤務している者が、多く東北学院高校二部で学んだ。

授業は午後5時30分から8時30分まで行われ、毎日4時限であった。ただし、月曜日と木曜日には1時限終了後に20分の礼拝の時間があった。1時限は原則として40分であったが、礼拝があった月曜日と木曜日は35分に短縮されていた。午後5時まで働きながら通学する者にとって、5時30分の授業開始に間に合うには職場の理解と職場の近さが不可欠の条件であった。

授業以外には、学校行事として運動会、修学旅行、球技大会、文化祭、クリスマスがあり、クラブ活動も、体育部では卓球、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、陸上競技、山岳、野球の7団体、文化部では美術、演劇、経理、音楽、華道、宗教、文芸の7団体が活動していた。『時報』には、文化祭に校外からの多くの来場者があり賑わったことや、運動部が定時制高校の県大会を勝ち抜き全国大会に出場したことが掲載されている[時報：242号]。

授業料は月払いで月2500円、昼間部の東北学院高校の授業料5990円の半額以下である。そのような事情もあってか、二部の教育環境整備は後回しになりがちであった。上記のように、1960年代前半まで二部には多くの生徒が在籍していたが、二部の生徒のための学食が設置され、グラウンドに夜間照明設備が設置されたのは1969年のことである[時報：242号]。

高校二部を卒業して、さらに大学に進む者もいた。『二部学校案内』によると、二部を卒業し推薦制度によって東北学院大学に入学した者は、1968年から72年までの5年間で合計83人（そのうち大学二部入学者は56人）となっている。平均すると毎年15～16人ということになり、おそらく卒業生の2割を超えている。それは、当時の大学進学率の全国平均とほぼ同じである。

（4）廃止

高校二部は1980（昭和55）年度から募集が停止され、1983年に廃止される。『百年史』によると、高校二部の廃止の方針は、理事会レベルではすでに1971年には決議されていたが、実際にそのための学内論議が始まるのは1977年のことだという。そこから廃止まではさらに5年以上かかっている[百年史：1186～1187頁]。最大の要因は、教職員、卒業生・在校生の反対であった。上記のように、夜間高校への社会的ニーズは、1970年代後半にはきわめて縮小しており、学校経営的には、高校二部の廃止はやむを得ない状況にあった。しかし、高校二部に関わる者がそれを受け入れるには、それなりの長い時間が必要だったのである。

逆に言えば、関係者が廃止を容易には受け入れがたいと思うほど、高校二部は意義や魅力をもつ教育の場として受け止められていたのである。1983年3月に刊行された生徒会雑誌『星窓 閉校記念特集号』の寄稿文からは、そうした思いの一端を知ることができる。そこに満ちあふれているのは、東北学院の高校二部に入学して得られた多くの学びと出会いが、それぞれの人生にとってどれほど貴重で重要なものであったか、そしてそうした場を提供した学校にどれほどの感謝の念を抱いているかという思いである。

1942年の中学部二部設置から1983年の高校二部廃止までの41年間で、卒業生総数は2540人、入学したものの卒業に至らなかったのは約1500人だという[百年史：1187頁]。単純に平均すれば、毎年ほぼ100人が入学し、60人が卒業したことになる。卒業率60%という数字は、4年制の夜間高校としては決して低くない。これもまた、学校の教育力を示しているといえよう。

しかし、ともかくも、中等教育における東北学院の夜間教育は、ここにその歴史を閉じることになる。

4. 短大の夜間教育

（1）発足

東北学院大学は新制大学として1949（昭和24）年に設立されるが、設置が認められたのは昼間学部としての文経学部のみ、夜間学部の設置は認められなかった。校地、教員などが大学設置基準を満たしていなかったからである[百年史：976～984頁]。すでに専門学校として英語科、経済科の2科とその夜間部をもっていた東北学院としては、文学部と商経

学部2つの学部、およびそれぞれの夜間学部ができることを期待していたが、結果はそれとはかけ離れたものとなった。とくに、専門学校の夜間部を継承するものがないことは大きな問題であった。

それを解決するために、1950年、夜間教育のための東北学院短期大学部が設置されるのである〔百年史：986頁〕。短大は修業年限2年で、全国的には女子の高等教育を眼目とする女子短大として設置されることが多かったが、東北学院は短大を夜間教育機関とし、それまでの専門学校二部の英語科、経済科を受け継いだ英文科、経済科を置いた。入学定員は、英文科100、経済科150で専門学科二部のときと変わらなかった。こうして、専門学校二部の夜間教育は、修業年限が1年短くなった短大に受け継がれることになる。

当時の社会経済状況においては、働きながら夜間の高等教育を受けようとする者にとって、修業年限が1年短縮されたことは歓迎すべきことであった。結果として、夜間短大は、専門学校の夜間部よりも高い人気を博すことになり、高卒で就職した職場に勤めながらキャリアアップをめざす多くの若者が短大への入学を希望した。こうして、短大には、入学定員を確保するに十分な数だけでなく、意欲においても能力においても大学昼間部の学生と遜色のない志願者が集まった〔百年史：987頁〕。

(2) 拡充

夜学短大の人気を受けて、東北学院理事会は、短大設置翌年の1951（昭和26）年、短大別科を設置する〔百年史：987－988頁〕。これは、夜学で学びたい意志があるにもかかわらず、短大に入学できない者に、聴講生（現在の科目等履修生）制度を利用して学びの機会を与えるものであった。英語または商業経済を学びたい者を別科生として受け入れ、別科だけで授業を行ったうえ、1年間に所定の単位を履修した者には「卒業」が認定された。また、授業は昼夜開講で行われた。入学者は昼間組と夜間組のいずれかを選び、昼間組は昼間午後に授業を受けた。この昼間組の短大進級に配慮し、1953年には、短大経済科に昼間部が設置された〔時報：172号〕。

短大別科は、基本的には、授業を受けその単位を認めてもらうだけの制度である。しかし、そこで修得した単位は、短大あるいは大学に入学したさいには既修得単位として認められたから、これから短大や大学への入学を考えている者にとっては有益なものであった。また、大学への通学と授業体験は、短

大・大学生生活の予行演習としての意味ももっていた。『百年史』によると、この短大別科には、設置最初の年に243人の応募者があり、そのうち189人の入学を許可したという〔百年史：988頁〕。応募者の多さは、この制度が、高等教育へのアクセスを模索する勤労者のニーズに適合したものだったことを示している。

さらに、短大別科を設置した翌年の1952年、短大に英文科、経済科につぐ第三の学科として法科（入学定員100）が置かれる〔百年史：987頁〕。官庁や銀行など法律関係の業務が多いところを中心に上がった、夜間に法律を学べる場がほしいとの声に応えるためである。問題は教員の手配であった。当時の東北学院大学には十分な数の法学系教員がいなかったからである。東北学院は東北大学と裁判所に助けを求め、両者は、設置の社会的意義を理解しこれに応じた。これにより、法学という当時の東北学院大学にはなかった専門領域の学科が夜間短大にできたのである。

短大法科は、英文科や経済科と同様に、高卒で就職した者が、さらにキャリアアップするための学びと学歴取得の場であったが、同時に、仙台圏では数少ない、法律を専門的に学べる場でもあった。そのため、法科学生の中には、大学に法科がないので短大法科に入学し、夜は短大で学び、昼は仕事を持たず司法試験や公務員試験の勉強に時間を費やす者もいた。この短大法科が、後の大学法学部の前身となったことはいうまでもない。夜間部での設置が先行し、それを基礎に昼間部ができた例は、東北学院ではこれしかない。

法科が設置された1952年の短大3科には、合計で521人の入学者があった〔百年史：987頁〕。ちなみに、この年の大学の入学者は英文学科、経済学科あわせて605人であった。当時の東北学院において短大がいかに大きな部分を占めていたかがわかる数字である。さらに、短大別科への入学者が100人以上いたことを考えると、東北学院の夜間教育は、この短大時代に大きく拡充されたといつてよい。

(3) 廃止

短期大学部は、その後長く続くことなく1960（昭和35）年に廃止される。その前年に、大学文経学部が夜間部として文経学部二部の設置が認められていたからである〔百年史：988頁〕。もともと短大設置は、新制大学を設立するさい、大学の夜間学部が認められなかったことへの緊急対応策であったから、

文経学部二部が認められた以上、短大を残す理由はなかった。また、この頃には、職場でのキャリアアップには短大卒では不十分で、大学卒の学歴が必要な時代が来ていたからである。

問題は法科であった。大学には法学を学ぶ学部学科がないため、短大法科の廃止は、東北学院から法学を学ぶ場がなくなることを意味した。結局は、それもやむなしという判断となったが、これによって大学には法学部の設置という課題が残されることになる。それが実現したのは5年後の1965年のことである。

短大廃止とともに、短大別科も廃止された。こうして、東北学院の高等教育機関は大学に一本化され、夜間教育は大学昼間学部の二部において行うという体制ができるのである。

5. 大学の夜間教育

(1) 大学二部

1960年代は、全国の大学で規模拡大が行われる。戦後ベビーブーム世代が進学率を高めながら大学進学期を迎えることへの対応であった。東北学院大学も同じ対応をとる。1962（昭和37）年には工学部を新設し、1964年には新制大学の創設のさいにかなわなかった文学部と経済学部の独立を実現し、文学部には英文学科のほかに史学科と基督教学科という2学科が新設、経済学部には経済学科のほかに商学科が設置される。さらに翌年には法学部を新設する。これらの学部増設によって、東北学院大学の昼間学部の入学定員は750となる。文経学部しかなかった時期の3倍である。

こうしたなか夜間部は規模拡大の対象にはならなかった。文学部と経済学部の夜間部としてそれぞれ二部が設置されたが、文学部二部には英文学科、経済学部二部には経済学科だけが置かれ、新設された学科に夜間部はなかった。さらに、二部経済学科の入学定員は150とそれまでと変わらなかったが、二部英文学科の入学定員は半減され50となった。今後、大学における夜間教育への需要は減ることはあっても増えることはないという見通しに立つ判断であった。

同様の判断は、新設の法学部に夜間部をつくらなかったことの背景ともなっている。上述のように、法学部の前身は夜間短大の法科であり、法学部を設置したときから、夜間部を置くべきとの声は学内外にあった。初代法学部長も二部設置の抱負を持っていたという〔百年史：1074頁〕。しかし、結局それ

は実現しなかった。夜間部を設置運営するコストに見合うだけの社会的ニーズが見いだせなかったからであろう。

こうして、東北学院大学では、昼間学部は拡大の一途を辿るなか、夜間教育は戦後の専門学校二部から続いた英文と経済の二学科だけが担うことになった。そして、それは、2000（平成12）年に二部が募集停止となるまで36年間続くことになる。

(2) 機能変化

高校の夜間教育への社会的需要が大きかったのは1950年代半ばから60年代前半であり、そのため高校二部が70年代には入学者確保に苦勞したことはすでに述べた。しかし、大学の二部は高校にはない別の機能があり、それによって、大学では90年代前半まで比較的安定した入学者確保が可能であった。大学二部の募集停止が2000（平成12）年と高校二部のそれから20年も経ってからとなったのはそのためである。

その機能とは、受験競争のなかで昼間学部に入れなかった者の「受け皿」である。大学に入学し大卒の学歴を得たいが、昼間学部合格できなかった場合、昼間学部より合格しやすい夜間学部に入学者である。入学後、昼の空いた時間に働くために仕事につく場合も多いが、それは昼は働いて夜しか勉強できないために夜間部に通う、典型的な夜学部学生とは異なる。

こうしたタイプの学生は、大学の初期の頃からいなかったわけではない。じっさい、大学は、1960年代前半から、昼間学部の「滑り止め」として二部を受験しやすいような受験日程を組んでいる〔齋藤（2023）：32頁〕。とはいっても、全体としてみたとき、1960年代の夜間学部では典型的な勤労学生が多数派であった。国税庁、自衛隊、国の出先機関などに勤める国家公務員、仙台市や周辺自治体に勤める地方公務員、商工会議所、農協などの団体職員、銀行やデパートなどの大企業職員は、毎年かなりの数が二部で学んでいた。

しかし、1970年代に入ると、「滑り止め」による入学者が増えていく。そして、大学は、そうした学生を念頭に、転学部転学科制度を整備していく。この制度は、基本的には、2年生から3年生に進級するさい、1・2年次の成績と転学部転学科試験の結果をもとに、在籍学部学科の変更を認めるという学内編入学試験である。経済学部の学生が法学部に移ることもできるし、極端な例では工学部の学生が文

学部に移ることもできる。もちろん、同じ学部内の別の学科に移ることもできる。合格率はおおむね5割程度であった。

この制度を利用したのは、圧倒的に二部の学生であった。そのほとんどが二部から一部への転籍、とくに二部経済学科から一部経済学科への転籍希望であった。合格すれば、もともと不本意であった夜学生生活を脱し、晴れて昼間学部学生となり、そこを卒業できるからである。大学からすれば、この転学部転学科制度は、不本意で二部に入学した学生に勉学意欲を与え、従来型の勤労学生が減るなか二部志願者数を維持するのに役立つものであった。とくに二部経済学科は、1975（昭和50）年、入学定員を150から300に倍増させるが、それを満たす入学者を確保するには、転学部転学科制度のアピールが最も有効であった。

じっさい、1970年代後半には、この制度があることをふまえて二部に入学する者が入学者の過半数を占めるようになり、1980年代初めには、二部学生の6割以上が転学部転学科試験を受験し、100人以上が昼間学部へ転籍した〔歴史：136頁〕。この傾向は1990年代前半まで続く。とくに、いわゆる戦後ベビーブーム世代の第二世代が大学受験期を迎え、大学入学倍率が急速に高まった、1980年代末から90年代始めにかけては、二部には昼間学部の「滑り止め」受験者が殺到し、入学実質倍率は3倍を超えた。

しかし、こうした昼間学部不合格による二部入学者の増加は、二部が本来想定していた典型的な勤労学生が、入学を希望しても二部に入学できないという問題を生み出す。二部志願者は、もともと昼間学部を目指した者に入試の成績では負けてしまうからである。そこで、大学では、1983年に「二部（夜間部）有職者特別入試」を導入する。これは、有職者あるいはその予定者のために入学定員上の特別枠を設け、学力試験ではなく小論文と面接で合否を判定するというものである〔齋藤（2024）：49頁〕。これにより、この枠で受験した者は、ほとんどが入学できるようになった。

（3）夜間主コース

1990年代後半になると、二部の志願者は大きく減りはじめる。

二部（夜間部）有職者特別入試はそれなりに機能していたが、これによる入学者はせいぜい数十名であり、その数も減少傾向に転じる。そこで、1996（平成8）年には、名称を二部（夜間部）社会人特別入

試と変え、対象を専業主婦などの無職者まで拡大した〔齋藤（2024）：54頁〕。しかし、その効果は限定的であった。

その背景には、仕事をしながら大学卒業の資格を取ろうとする人それ自体が減ったこともあるが、そうした人が大卒の資格を取る方法は夜間大学に通うだけではなくなくなったという時代の変化がある。1980年代以降、放送大学をはじめとするさまざま通信教育制度が整備されていく。それらを利用すれば、自分の好きな時間に授業を受け、自分に合ったペースで単位を修得できる。もちろん、実際に教室で教員と向き合うことによるメリットは大きい。しかし、決められた時間に教室まで出向かなければならないという負担から解放されることは、仕事を持つ者にとってはきわめて魅力的であった。

もっとも、二部の志願者減少の根本原因は、大学が入りやすくなったことである。1990年代後半から、大学志願者数が減少するかたわら大学新設も相次いだため、大学の普通の昼間学部へ入学することが容易になり、わざわざ二部に入る必要がなくなったのである。1990年代末には、一般入試における二部の実質倍率は1倍をやや上回る程度で、受験者はほぼ全員が合格できた〔歴史：148頁〕。

こうした状況をふまえ、大学は、2000年、二部の募集を停止し、それに代わるものとして昼夜開講制を導入する。昼夜開講制とは、授業を昼間と夜間の両方で行い、学生は、どちらの授業を履修してもよいというもので、学生の多様な生活様式に対応しようとしたものである。とはいえ、昼夜開講制では、主に昼間の授業を履修する昼間主コースと夜間の授業を履修する夜間主コースが分けられ、それぞれに入学定員があり、志願者はどちらかをコースで受験しなければならない。こうして、大学の夜間教育組織は、二部という夜間学部から昼夜開講制における夜間主コースへと姿を変えるのである。夜間教育の灯火を消さないための決断であった。

昼夜開講制を導入したのは文学部英文学科と経済学部経済学科および商学科である。それまで二部がなかった商学科にも夜間主コースができた。入学定員は英文学科はそれまでの二部と同じ50であったが、経済学科は120、商学科は60で、それまでの二部経済学科の入学定員300から大きく減った。

二部から昼夜開講制の夜間主コースへの移行によって、卒業学部はそれまでの文学部二部、経済学部二部から文学部、経済学部となり、昼間の授業履修を大幅に増やせるようになるが、それまでの制度

にいくつかの変更が生じる。

まず、授業時間が変わる。二部の授業は午後5時30分に始まり9時10分まで、1コマ70分で1日3コマ行われていた。それが、夜間主コースでは午後6時から9時10分まで、1コマ90分で1日2コマとなった。大学の授業では1コマ90分が普通であるのに二部で70分授業が認められたのは、夜間学部への特別の配慮であった。しかし、昼夜開講制では、昼夜どちらの授業も同じであるという原則から、夜間の授業時間を特別扱いをすることはなかった。

さらに、授業料においても夜学生への特別扱いはなくなる。募集停止前年の二部の授業料は年間37万円で、昼間学部の63万円の約6割であった。それが、昼夜開講制では、昼間主コース、夜間主コースとも63万円になる。経済的な困難を抱える学生への支援は、授業料という形ではなく、学内奨学金の充実という形で個別に対応するようになったのである。

また、夜間主コースから昼間主コースへの転籍は難しくなった。コース間の転籍は転学部でも転学科でもないため、転学部転学科制度の対象にならないからである。そのため、3年次に昼間主コースに移ることを念頭にとりあえず夜間主コースに入学することはできなくなった。

(4) 廃止

昼夜開講制は、経済学部では2009（平成21）年、文学部では2015年に廃止され、夜間主コースも募集停止となる。経済学部での廃止は学部改組の一環であり、経営学科（商学科が2001年に改称）が経営学部として独立し、新たに共生社会経済学科を設置すると同時に昼夜開講制も廃止した。このとき、文学部でも足並みをそろえて昼夜開講制の廃止することも検討されたが、けっきょく2015年まで続いた。しかし、存続にとくに積極的な理由があったわけではない。

昼夜開講制が続かなかったのは、夜間主コースが新たな入学層の獲得につながらなかったからである。夜間主コースは、当初、主婦、退職者などの学びの場となることが期待されていた。夜間主コースへの社会人入学を優遇するために、二部（夜間部）社会人特別入試は夜間主コース社会人特別入試と改称されて存続された。しかし、社会人の学びの場は大学以外にもさまざまに整備されており、高い授業料を必要とする大学でなければならない理由はなかった。結果として、夜間主コースは、発足直後から志願者数が低迷し、入学定員を確保するのがやっ

とという状態が続いた。

こうして、大学の昼夜開講制廃止に伴って夜間主コースがなくなり、1941（昭和16）年に始まった東北学院における夜間高等教育は、その長い歴史に幕を閉じることになる。

もっとも、それはあくまで学部教育（学士課程）に関してである。働きながら学位を取得したいというニーズは、学部から大学院に移ってきている。東北学院大学でも、学部の昼夜開講制が廃止された頃から、社会人の大学院入学者が増えるようになり、大学は、そのニーズに応じて、夜間授業を行うことが求められた。学部と違って学生数が少ないため、対応は制度的というより個別状況的に行われるが、現在では、社会人学生のための夜間授業が大学院ではふつうに行われている。

6. まとめ

以上、東北学院における夜間教育の歴史を概観してきたが、これをふまえて、つぎの4点を確認し、これらのことは、東北学院の歴史を語るうえで正當に扱われなければならないことを指摘して本稿のまとめとしたい。

第一に、東北学院の歴史、とくに戦後の歴史において、夜間教育は、教育組織上および学校財政上、重要な役割を果たしたことを確認しておきたい。もともと、東北学院が夜間部を設置したのは、学校財政の逼迫のなかでの財政的貢献を期待したからであり、入学定員数もそれに応えうる規模で設定された。こうして、夜間部は、当初から、東北学院の存立に不可欠の存在と考えられていたが、そうした位置づけは、戦後においても長年にわたって維持された。戦後の東北学院は、中等教育においても高等教育においても夜間教育機関を積極的に整備し、多くの生徒・学生を受け入れた。こうして、夜間教育は戦後東北学院の教育のあり方を特徴づけるものとなった。

第二に、東北学院は、そのときどきの社会的ニーズに対応しながら、夜間教育を進めていったことを確認しておきたい。1941（昭和16）年に夜間部を新設したことは、財政逼迫のなかでの窮余の策という面はあったにせよ、当時の社会的ニーズを的確にとらえた決断だったといっていよい。また、戦後の男女共学化、とくに昼間部の高校は男子校だったにもかかわらず高校二部を男女共学でスタートしたことも社会的ニーズに即した決断であった。その後、高校二部では志願者数の増減に対応した入学定員管理が

行われ、大学では、夜間短大、大学二部、昼夜開講制と社会的ニーズに対応した組織改編が行われた。そして、夜間教育の廃止も社会的ニーズの縮小に対応した結果であった。

第三に、夜間教育の制度を適切に提供したことで、東北学院は、制度を利用した人びとはもちろん、地域社会にも大きな貢献をしたことを確認しておきたい。

中等教育についていえば、仙台圏には公立の定時制高校が2校あったが、東北学院高校の夜間部はそれらを上回る人気があった。市内中心部にあるという立地の良さだけでなく、建学の精神に基づく教育的使命感をもって夜間教育に情熱を注ぐ教員が、転勤で異動することなく教育現場を支えるという公立高校にはない教育力も高い評価を得ていた。高等教育についていえば、そもそも仙台圏で夜学があったのは東北学院だけである。戦中の高等学部二部にはじまり、戦後の専門学校二部、夜間短大、大学二部そして夜間主コースと、東北学院は、働きながら高等教育を受ける場を70年以上にわたって提供してきた。少なくとも仙台圏において、おそらくはもっと広く宮城県内外において、東北学院に夜学があったことで、そしてそこで学ぶことができたことで人生が大きく変わった人は数知れないはずである。

最後に、東北学院には夜間教育を導入・維持できたのは、それに不可欠の精神的基盤があったことを確認しておきたい。

本稿では、夜間教育の歴史を社会的ニーズや経営的メリットという観点からみてきたが、夜間教育の継続にはそれらに加えて教職員の理解と協力を得ることが不可欠である。そして、東北学院ではそれができたのである。大学が二部の廃止を余儀なくされたときも、二部をもっていた文学部や経済学部の教授会は、夜間主コースという形で夜間教育を続けること模索し、全学の教職員はそれに協力した。東北学院の教職員には、夜間教育によって地域に貢献することへの思いが広く共有されていたからである。

その理由としては、上述のように、東北学院労働会の理念の継承が強調されてきたが、それだけではなさそうである。というのも、1892（明治25）年に、東北学院の教師と学生が、昼働いている者に夜学びの場を提供する組織として東北学院夜学会を結成し、実際に生徒を募集しているのである〔仁昌寺：283-284頁〕。そもそも東北学院では、建学当初から社会的弱者に手を差し伸べる愛の精神とその実践が重視され、その一つとして夜間教育の試みがなさ

れたということらしい。この活動については、記録もほとんど残されていないが、東北学院の建学直後にそうした実践があったことは注目に値する。本稿が扱った東北学院における夜間教育は、この建学当初の東北学院夜学会の精神を受け継いだものと考えられることもできる。

【参考文献】

『東北学院時報』東北学院、1916年創刊

『東北学院百年史』東北学院学院百年史編集委員会編、東北学院、1989年

『東北学院の歴史』学校法人東北学院、河北新報出版センター、2017年

『東北学院高校二部学校案内（昭和48年度）』東北学院高校、1972年

「学校基本調査」年次統計 総括表4 進学率（1948年～）

<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>

齋藤誠「東北学院大学入試の歴史(1)1949-1983」:

『東北学院史資料センター年報』Vol.8 (2023)

齋藤誠「東北学院大学入試の歴史(2)1984-2020」:

『東北学院史資料センター年報』Vol.9 (2024)

竹井一夫「東北学院高等学校第二部沿革史」:東北学院高等学校第二部T G会閉校記念事業実行委員会編集委員『星窓 閉校記念特集号』東北学院高等学校第二部T G会閉校記念事業実行委員会、1983年

仁昌寺正一「新聞記事で見る草創期の東北学院(1)」:『創設者の事績を通してみる東北学院の建学の精神』(平成21年度教育・学習方法等改善支援事業報告書)、2010年

齋藤 誠プロフィール

SAITO, Makoto

1954年宮城県生まれ。1981年東北大学大学院法学研究科（政治学専攻）満期退学。同年東北学院大学法学部講師（1991年教授）。1993年仙台市史編さん調査分析委員、2008年同専門委員。

東北学院大学土樋キャンパスの建築遺構に関する調査報告

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学工学部環境建設工学科准教授

崎山 俊雄

1. はじめに

本稿は、キャンパス整備工事の過程で2024年に解体された2件の建築遺構について、解体前に実施した調査の結果を示し、もってキャンパスの歴史の一端を記録しようとする試みである。

東北学院大学土樋キャンパスには、先人の営みを今に伝える歴史的な建造物が複数ある。現存する我が国最古級の宣教師住宅として国の重要文化財に指定される「東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）」と、第2代院長・シュネーダーのキャンパス構想から生まれた3棟1基の登録有形文化財群（東北学院大学本館・ラーハウザー記念東北学院礼拝堂・東北学院大学大学院棟・東北学院大学正門）は、特によく知られている。

一方、広い敷地に多数の建物が集合して一群を成し、時間と共に形姿を変化させる大学キャンパスの

歴史は、個々の建物にとどまらず、それらを有機的に繋ぐ外構や付属的な建造物、土地の形状、あるいは空間の性能を支える設備などの中にもしばしば記憶される。本稿で取り上げるのは、そのような役割を果たした2つの遺構である。1つは「渡り廊下」、いま1つは地下共同溝内の「煉瓦壁」¹⁾。いずれもラーハウザー記念東北学院礼拝堂（以下「礼拝堂」と略記する。）に関連する施設・設備で、歴史的な遺構であることが確認されたが、保存するには技術的・法律的な制約が大きく、2024年中に解体された²⁾。

2. 遺構の概要

2つの遺構のキャンパス内での位置を図1に、それぞれの旧状を次頁の写真1～写真3に示す。図1において黄色に着色した部分（地上）が「渡り廊下」

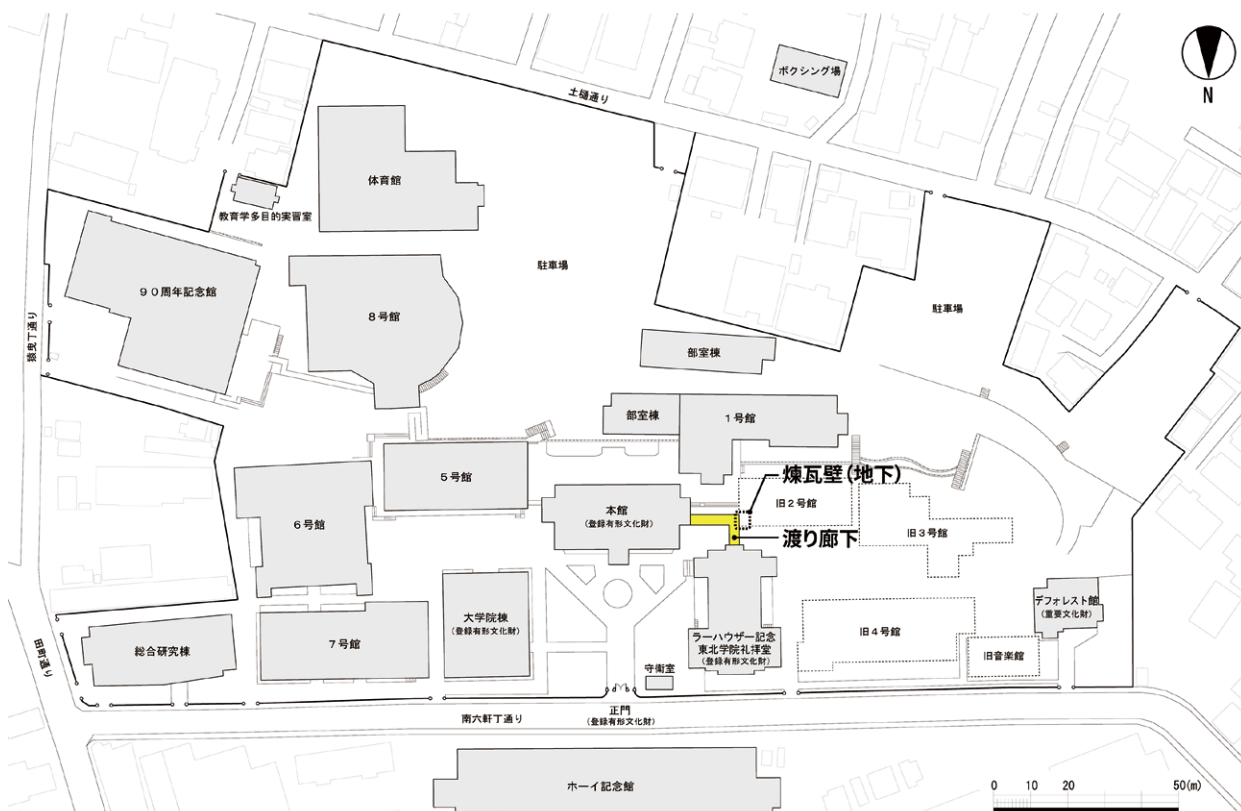


図1 東北学院大学土樋キャンパス配置図



写真1 解体前の「渡り廊下」(南より写す)



写真2 解体前の「渡り廊下」(西より写す)



写真3 解体前の「煉瓦壁」(共同溝内)

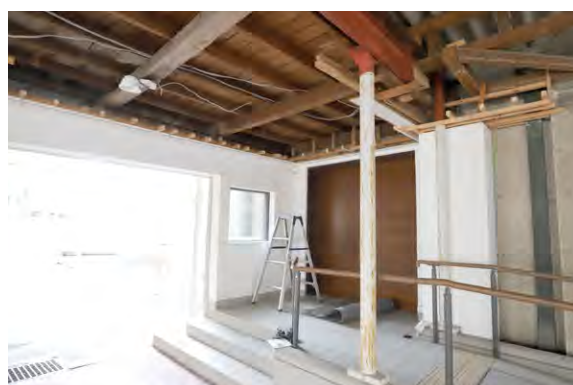


写真4 天井解体後の「渡り廊下」

で、そのほぼ真下（地下）に設備配管用の共同溝が通っている。「煉瓦壁」（写真3）は、その共同溝の、旧2号館側の端部（点線で囲んだ位置）に遺っていたものである。なお、解体前の「渡り廊下」は屋根の架かった屋外通路の体裁を有しており、屋根の上面は鉄板（折板屋根）で覆われ、下面には天井が張られていた（写真1・写真2）。竣工時からの増改築も著しく、歴史的遺構を望見することはまったく不可能で、存置状態からも、期せずして残ったと判断される状況であった。一方、一連のキャンパス整備工事で旧2号館が解体されるに際し、その屋根の一部が旧2号館の外壁によって支えられていた「渡り廊下」も解体されざるを得なかった。歴史的遺構が今になって再発見された背景には、そうした事情が重なっている。

写真4は、天井（下地とも）を撤去した時点での、「渡り廊下」の天井裏（小屋組）の様子である。写真の中央に写る扉は礼拝堂の南側の出入口で、頭上に見える木造の架構と屋根の下地（野地板）の一部が「渡り廊下」を建設した当初の部材と見做される。詳しくは後述するが、頭上に見える赤褐色の鋼材、下部を白色に塗装した鋼管柱、および右側に僅かに写る折板屋根は、後に増改築された部分である。

3. 設計図に見る「渡り廊下」と「煉瓦壁」

3-1 キャンパス計画の中での位置付け

東北学院史資料センターには、礼拝堂の当初の設計図が保存されている³⁾。その中に、2つの遺構に関係する図面がある。それらと遺構の実況とを比較すれば、遺構中の最古の部分は礼拝堂と同じ1932年（昭和7年）まで遡り得ることを確認できる。そこでまず、礼拝堂の当初設計図に基づいて、これらが竣工時（設計時）にどのような姿であったのかを確認しておきたい。

次頁の図2に、礼拝堂設計時の配置計画図（1930.10.27付）を、図2aにその部分拡大図を示す。これを見ると、礼拝堂の計画当初から、「MAIN BUILDING」（現在の本館）、「OLD CHAPEL」、および「NEW CHAPEL」の3棟をつなぐように「渡り廊下」が計画されていたことを読み取れる。また「MAIN BUILDING」の南側（図面上方）にある「BOILER HOUSE」から本館を経由して礼拝堂へ「隧道／TUNNEL」が伸びている様子を見れば、現在の共同溝が、もともと「BOILER HOUSE」で発生させた暖房用蒸気を本館と礼拝堂に届けるための配管用隧道（トンネル）として計画されたものであることも分かる。なお、これらを設計したのは、シュ

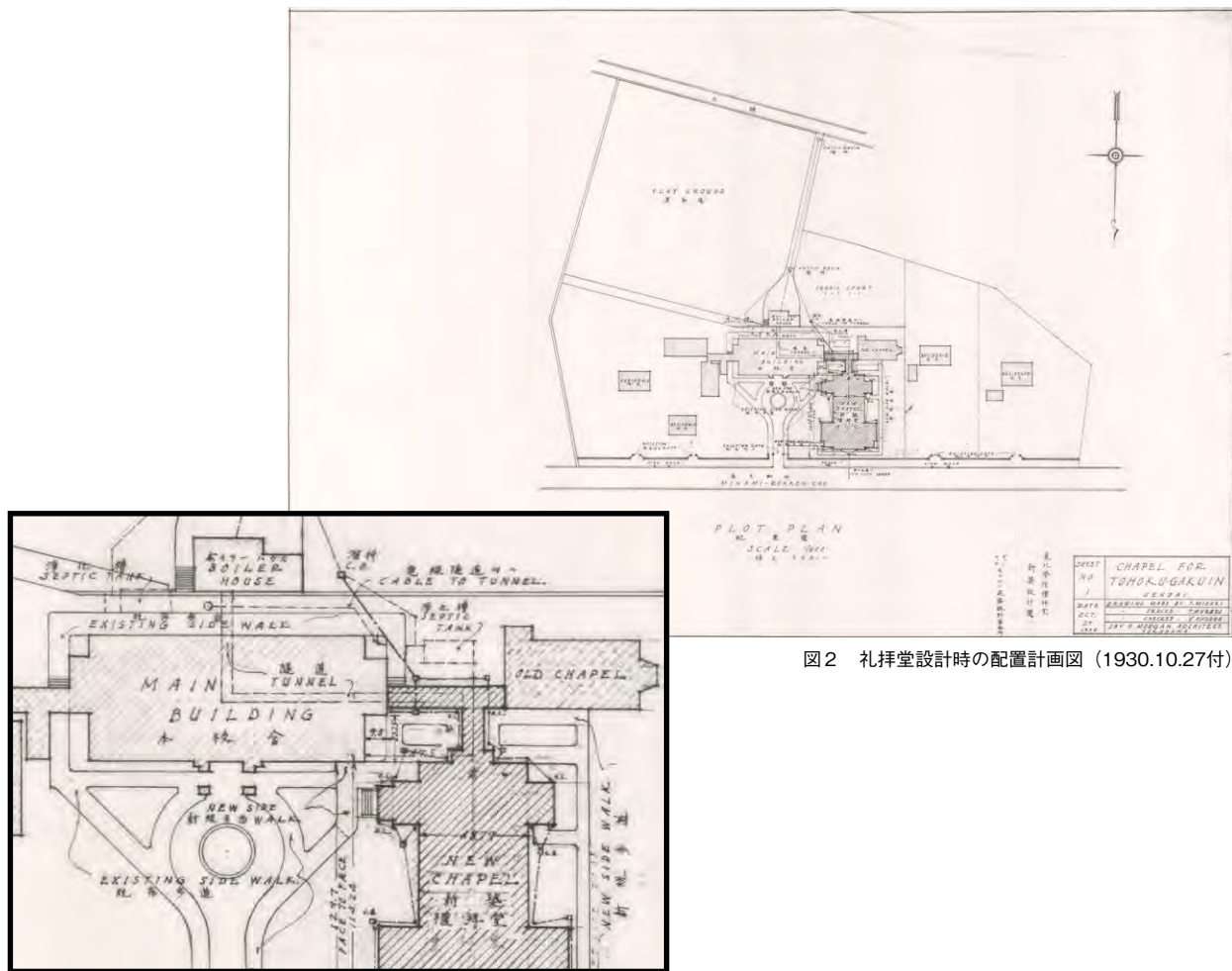


図2 礼拝堂設計時の配置計画図（1930.10.27付）

図2a 部分拡大図

ネーダーの構想を具体化し、現存する2棟1基の登録有形文化財（本館・礼拝堂・正門）を成したJay H.モーガン⁴⁾（米）である。また、モーガンからの依頼に応え、地下隧道を利用した当時として先進的な蒸気暖房設備の仕組みと配管経路を設計したのは、1914年（大正3年）に来日して日本で活躍した

ドイツ人設備技術者・A.P.テーテンス⁵⁾であった⁶⁾。

ところで、現在の地下共同溝は建設当初のままでなく、もとより通常望見できる場所でもない。しかし今回あわせて調査を行った結果、その内部に、部分的に古いコンクリートを目視できる箇所や（写真5）、かつて煉瓦壁があったと推定される痕跡を



写真5 共同溝内部に残る古いコンクリート



写真6 共同溝内部に残る煉瓦の痕跡



写真7 部室棟の裏に残る煉瓦壁の様子

確認することができた（写真6）。また、当初の図面に「BOILER HOUSE」とある本館南側（現在の部室棟周辺）には、昭和初期の建設と思われる擁壁遺構が存在し、その一部にも、表面にモルタルが塗られず煉瓦壁⁷⁾が露出している部分があることを把握した（写真7）。「BOILER HOUSE」が計画通りに実現したのかは詳らかではないが⁸⁾、これらもまた、土樋キャンパス草創期の施設計画の中で造られた遺構と考えられる。

3-2「渡り廊下」の設計概要

では、当初の「渡り廊下」はどのような姿をしていたのだろうか。これを確認するため、関連する主要な設計図を少し詳しく見てみることにしたい。

図3に礼拝堂の平面図（1930.9.15付）を示す。左側に接地階・地階の平面図が記され、その下方に描かれた南側の出入口（図面には「学生入口／STUDENT'S ENTRANCE」と記載されている）から伸びているのが「渡り廊下」である。とりわけ注目されるのは、当初の姿は解体前（写真1・写真2参照）のような半屋外空間ではなく、規則的に凸形の柱が並び、その間に壁（一部に窓や扉を付す）を立てて廊下を囲った内部空間であった点である。図

面中の説明からは、床はコンクリートの上に色付きセメントを塗って仕上げ、壁は木材で下地を組んだ上に人造石仕上げ⁹⁾を施す計画であったことを確認できる。

次いで次頁の図4に礼拝堂の東立面図（1930.9.9付）を、図5に同じ向きの断面図（1930.9.9付）を、そして図6に「渡り廊下」の詳細図（1930.11.10付）を示す。これらを見ると、「渡り廊下」の外観や、窓・扉の形式、および雨仕舞いなどの細部がどのような意匠で設計されていたのかを、さらに詳しく知ることができる。

まず外観では（図4・図6参照）、同時に設計された礼拝堂との連続性が強く意識されていたことが分かる。例えば平面図上で凸型を示す柱は、幅600mm程度の壁に付け柱を施した造形で、とりわけ尖頭状の頂部意匠をもつゴシック様式の付け柱は、礼拝堂の低部に繰り返し見られるものとほぼ同形である。人造石の目地割は礼拝堂（秋保石）に揃え、銅板を成形して造られた樋もまた、現存する礼拝堂のものと意匠的に一致する。窓や扉の上部に台形型（放射状）に入る目地は本館や礼拝堂の地階（1階）の窓と相関し、屋根上部の立ち上がり（パラペット）に施される線形（モールディング）もまた、本館・

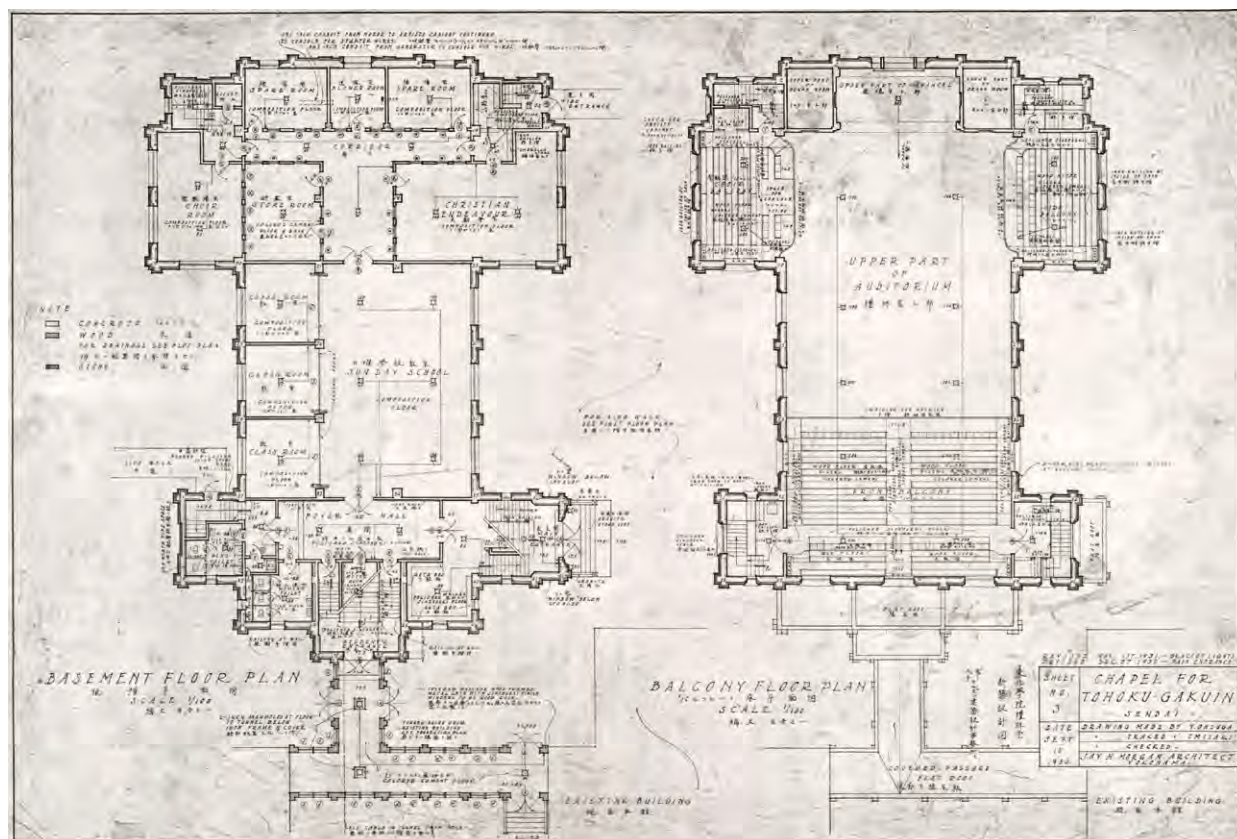


図3 礼拝堂平面図

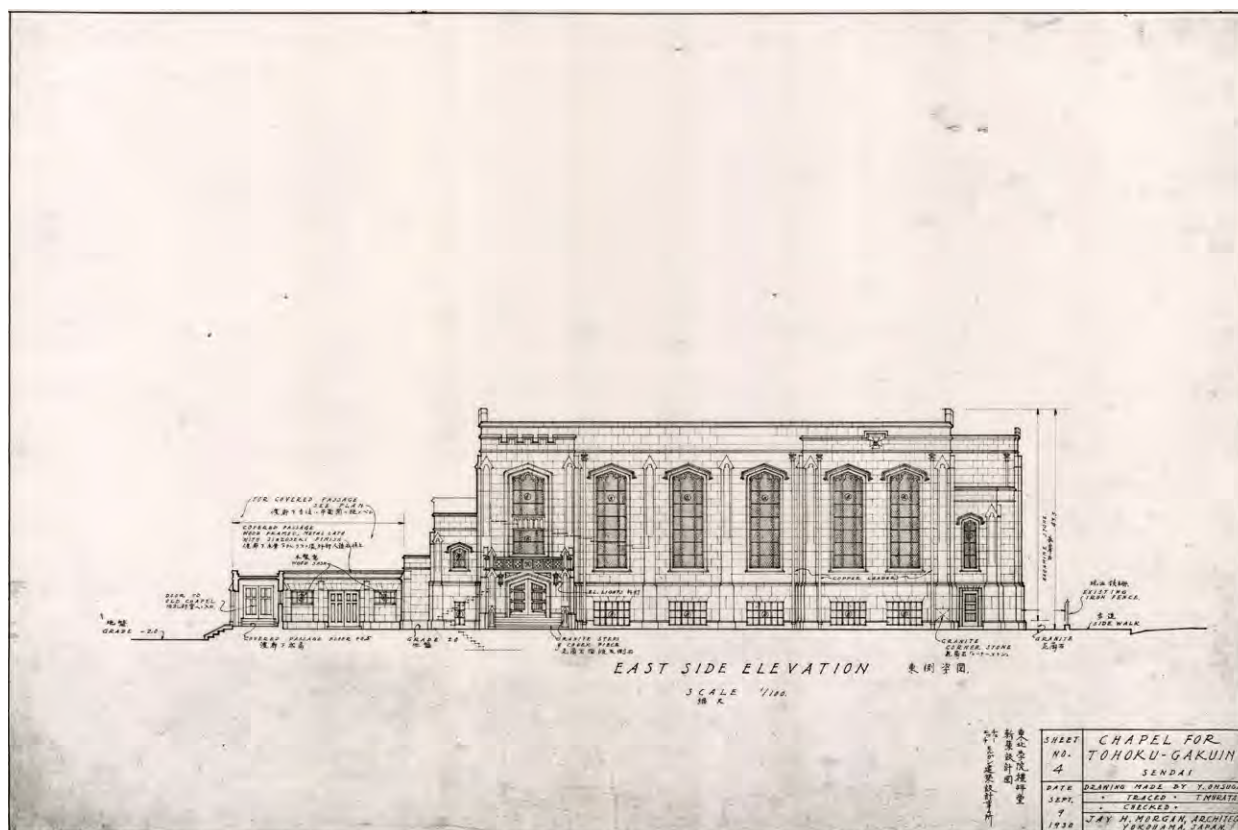


图4 礼拝堂東立面図

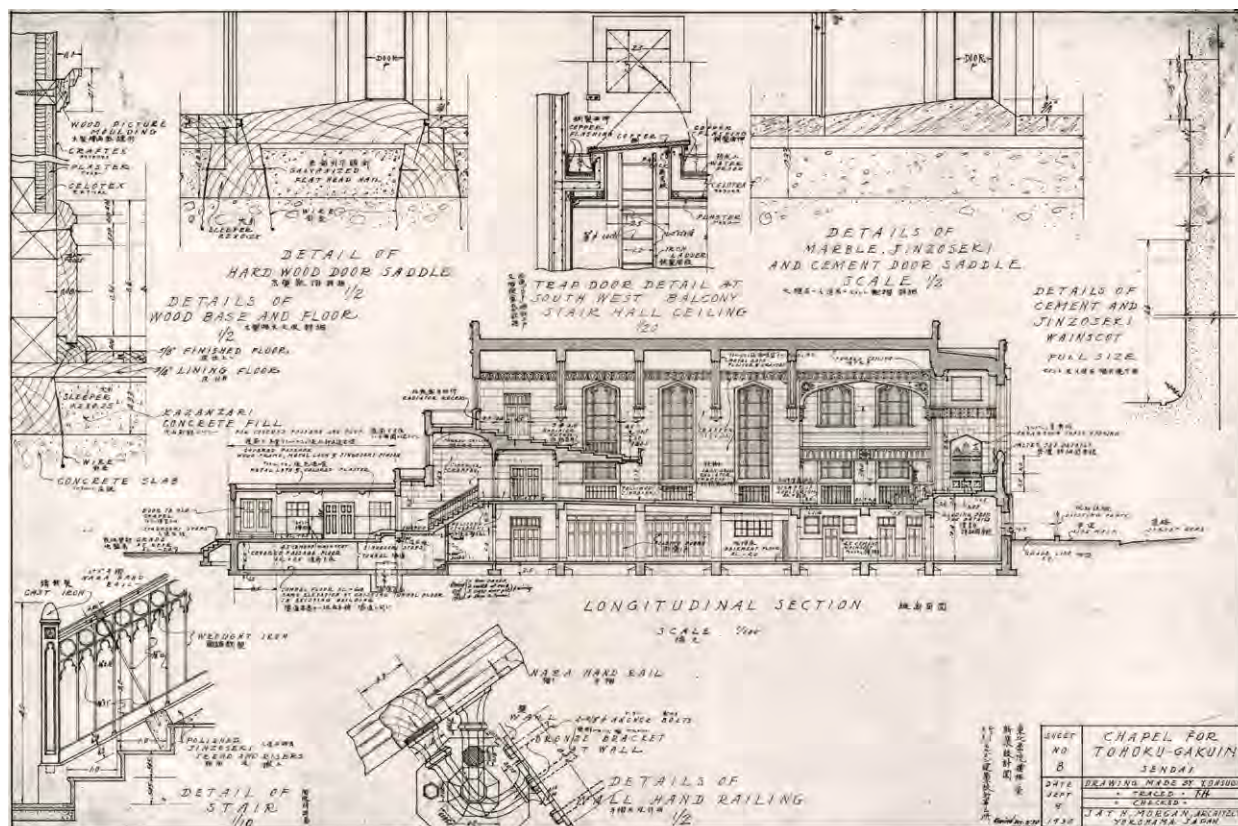


图5 礼拝堂断面図

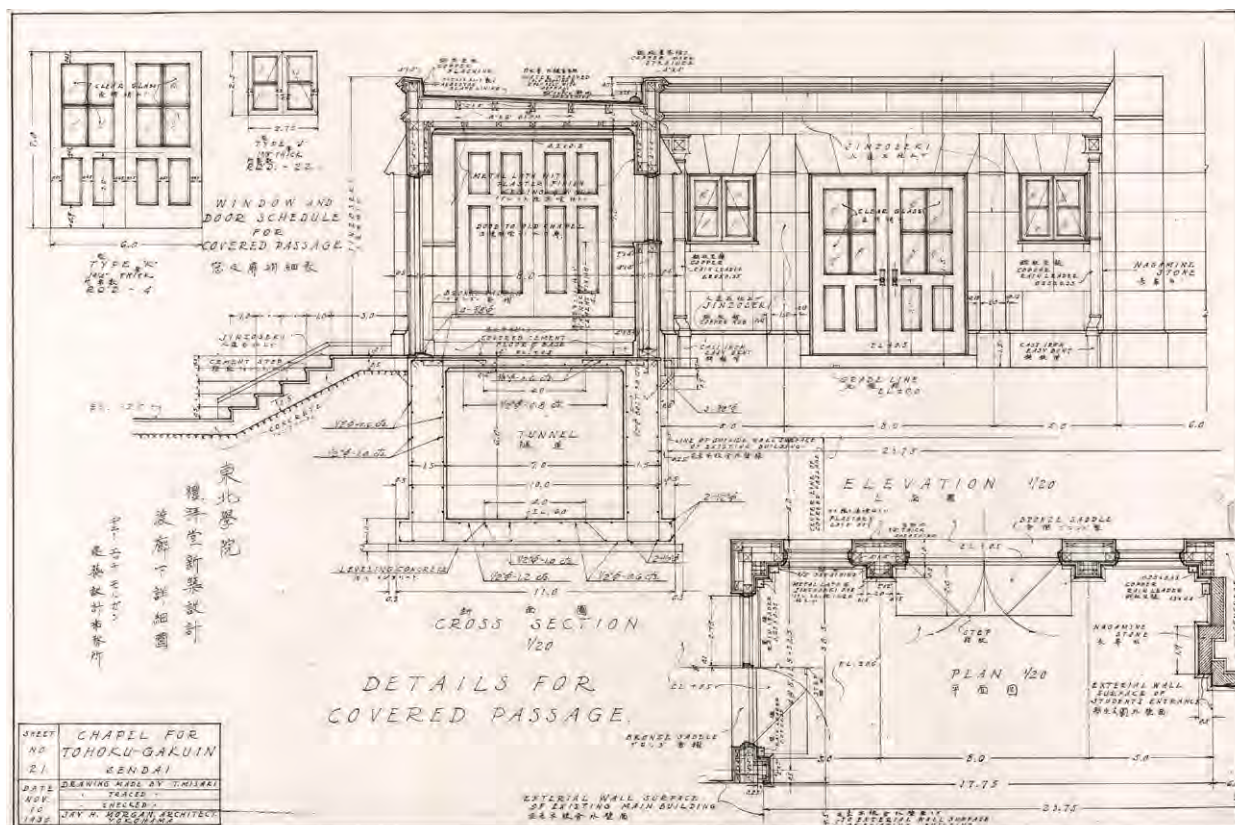


図6 「渡り廊下」詳細図

礼拝堂の笠石（外壁頂部の装飾的な石材あるいは成形銅板）や、正門上部のモールディングとの相関性を読み取れる。内壁と天井は漆喰塗り、窓は下部を外側に押し開ける突き出し窓とし、扉にもモールディングが施された。これらもまた、礼拝堂内部との共通点を認め得るものである。なお、廊下の下に設けられた設備配管用の隧道（トンネル）へは、現在もそうであるように礼拝堂の地階から入るように計画された。また、その床の高さは既設（1926年）の「本館ノ隧道ト同じ」になるように注意深く計算されて設計・施工されている（図5）。隧道（トンネル）は鉄筋コンクリート造で、内部の広さは幅7

尺（約2.1m）×高さ6尺（約1.8m）。「渡り廊下」と隧道（トンネル）の幅は同寸で（図6参照）、廊下の床上には鉄製の点検口が2箇所計画されていた。

3-3 古写真に見る「渡り廊下」竣工時の姿

建造物の設計過程では、図面の完成後にも（あるいは施工中にも）しばしば変更が行われる。そのため、特に歴史的な建造物では、設計図と竣工時の姿が異なる場合も起こり得る。したがって、建設当初の姿をより正確に理解するには、図面だけでなく文書や古写真等を加えて複眼的に検証することが望まれる。そのような中で、今回、史資料センターに遺



写真8 古写真（正門前での記念撮影）

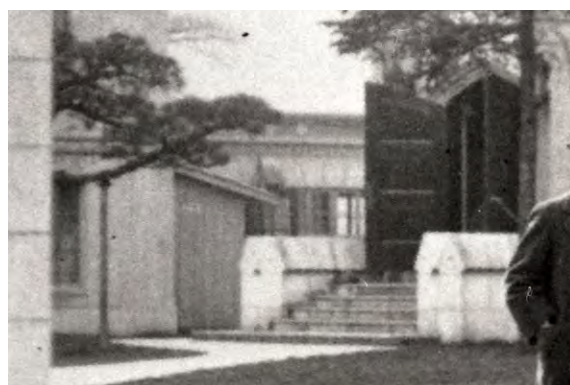


写真8a 部分（中央部）拡大図



写真9 古写真（グラウンドより校舎群を見る）



写真9a 部分（左端）拡大図

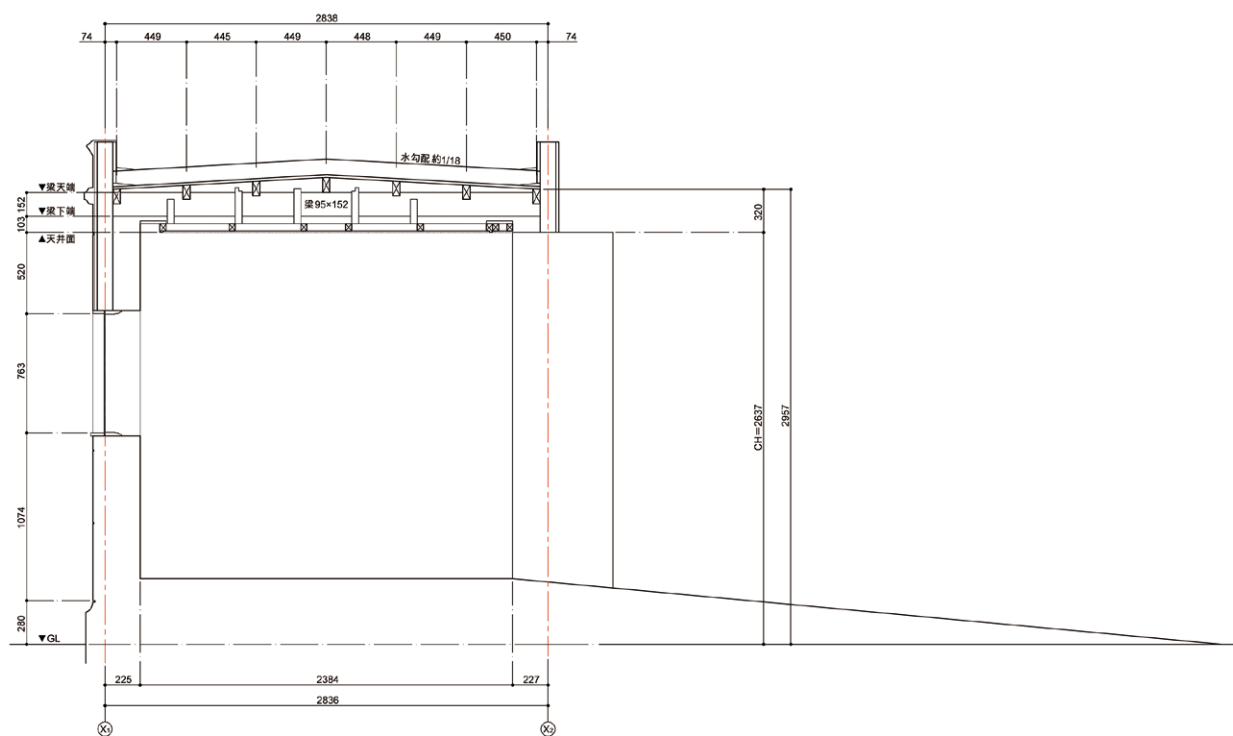


図7a 「渡り廊下」 実測断面図

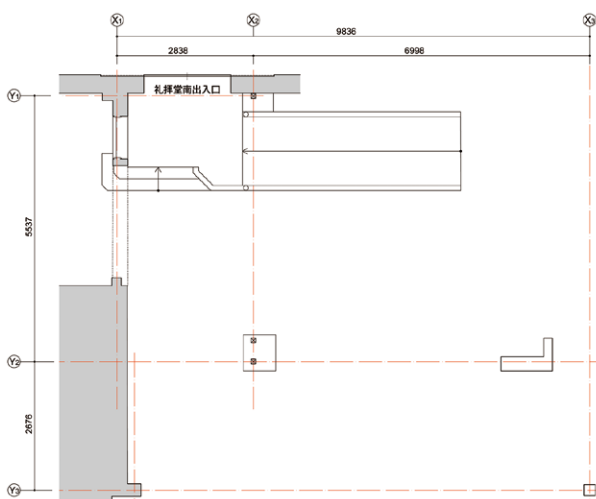


図7b 「渡り廊下」 実測平面図

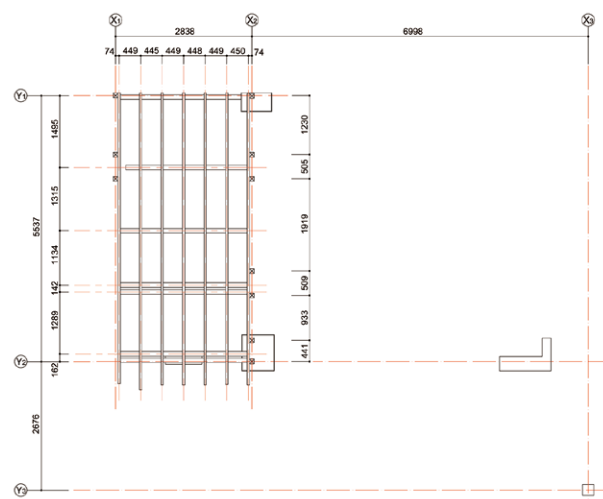


図7c 「渡り廊下」 実測小屋伏図

る一群の古写真の中に、遠景に竣工時の「渡り廊下」を捉えた貴重な記録を2枚発見した。これらを写真8（拡大写真8a）・写真9（同9a）に示す。

これらを見ると、遠景とは言え完成時の姿を確かに読み取ることができる。すなわち竣工した「渡り廊下」には礼拝堂と同様の付け柱が施され、これと腰高窓とが交互に連続する壁面が構成されている。窓上には水平線が強調されたモールディングが付されており、付け柱の頂部が尖頭状になっていることも分かる。したがって、「渡り廊下」は設計図に沿った姿で実現されたと見做される。

4. 「渡り廊下」実測調査結果

2024年に着手された土樋キャンパスの整備工事の過程で「渡り廊下」の天井の一部を解体したところ、天井裏に、建設当初（1932年）のものと見られる屋根部材・防水材料・雨樋・装飾意匠が発見された。中には2号館の建設（1953年）に際して廊下の形状を変えた際に出来たと見られる痕跡や、改造過程で切断されたと見られる柱材などが生々しく遺っており、これらが幾度かの増改築を経て現在に伝わっていることが示唆された。

実測調査は筆者と10名のゼミ生により（東北学院大学工学部環境建設工学科・崎山研究室4年：伊藤胡桃・町屋佑夏・青木涼飛・有松剛志・入駒征英・今野裕真・西條雅貴・長谷川隼斗・深澤心優・星遙希）、2024年7月に実施した。現地で平面図・小屋伏図・断面図を取り、各部材の位置・寸法・構造形式を設計図と比較した上で、当初部材の残存状況を検討した。作成した実測図を図7a・7b・7cに示す¹⁰⁾。以下ではこれらと写真を用いて、調査結果の概要（所見）を述べる。

4-1 屋根

天井撤去後に露わになった架構の概要を写真10に示す。左側に木造の梁（横方向）とこれに直交する母屋（縦方向）、およびその上に敷き詰められた野地板（屋根下地）が見える。これらの過半は劣化状況と痕跡から1932年（昭和7年）竣工時の当初部材と見做される。屋根は設計図の通りフラットルーフに約1/18（5%）の排水勾配を取って造られており、梁材に対する母屋材の納め高さを変えることで、中央から左右に勾配を確保している（図7a参照）。廊下の幅は実測値で柱間芯々2836mm（設計図上では約2860mm）、上部に幅約95mm×高さ約152mmの梁を渡し、その上に野地板を受ける母屋材（幅約

49mm・高さ100mm前後）を7本（両端を含む）架ける。設計図には梁材に幅4インチ（約102mm）×高さ6インチ（約152mm）の木材を、母屋材に幅2インチ（約51mm）×高さ4インチ（約102mm）の木材を使用する旨の記載があり、これらは実測値ともよく一致する。一般にツーバイフォーとして知られる、2インチを基礎単位とする設計である。外国人建築家の手に成る痕跡が、こうした部分にも現れている。母屋の間隔は約450mmで、これも設計図（約455mm）とほぼ一致していた。

一方、同じ天井裏には改造の痕跡も確認できる。例えば他と色味の異なる梁・野地板（写真10左方）は後の交換材であり、戦後の旧2号館建設の際の改造痕とも考えられる。天井を吊っていた下地材も近年の材料で、赤褐色の鋼材や、写真右半に広がる折板屋根が後の改造によるものであることは前述の通りである。ただし後補であることが明らかな折板屋根（写真右半）の下に比較的古い部材が見出せる点には注意が必要で、2つの可能性が推定される。1つは途中段階での増改築の際に出た古材を再利用（転用）した可能性であり、いま一つは戦後間も無い時期に増築された「下駄箱室」（後述）の痕跡が遺っている可能性である。

また、写真10の中央上部に写る赤褐色の鋼材（溝形鋼）は、それ自体後補材であるとは言え、「渡り廊下」の来歴を考える上で有力な手がかりを提供してくれる。と言うのもこの位置（図7におけるX₂通り）は、もともと柱（側壁）が立ち、その柱（側壁）が屋根を支えていた位置だからである。つまりこの鋼材（溝形鋼）は、柱（側壁）による支えを失った屋根を支持するために後から設けられた補強材ということになる。スロープの脇に立つ丸鋼の柱（天井下に見えていた部分だけが白色に塗装されている）がこれを支える。これらは側壁の撤去（屋外化）と同時に行われた改造と考えて間違いない。



写真10 「渡り廊下」架構概要

ただ、この改造が行われた時期を正確に把握できる記録は現時点で確認できない。一方、限定的ながら得られる以下の記録に拠れば、その時期は概ね1980年代前半頃と推定される。

- ①写真11：1955.5刊『東北学院創立七十年写真誌』掲載の「第5回公開クリスマス」（1954.12）の写真である。左側、2棟の建物の間の奥に「渡り廊下」の側壁上部を確認でき、同時に、その手前に別棟の建家が建っていることが分かる（下記の図8より「下駄箱室」と見られる）。
- ②図8：1959.7刊『東北学院創立七十年史』に掲載された「昭和三十二年現在」（1957年）の配置図である。「渡り廊下」に接するように「下駄箱室」（V）と「便所」（Y）がある。また、建設時にT字形だった「渡り廊下」は、旧2号館（G）の新築（1953.4竣工）に際して一翼が削られ、L字形になっている。
- ③写真12（次頁）：1961.4.26の撮影とする国土地理院の空中写真である（原図を一部トリミング）。中央に土樋キャンパスが写る。L字形の「渡り廊下」を識別できる。
- ④写真13（次頁）：1975.9.11の撮影とする国土地理院



写真11 第5回公開クリスマスの様子（1954年12月）

院の空中写真である（原図を一部トリミング）。中央に土樋キャンパスが写る。L字形の「渡り廊下」を識別できる。

- ⑤写真14（p.22）：1978.5.25の撮影とする国土地理院の空中写真である（原図を一部トリミング）。中央に土樋キャンパスが写る。L字形の「渡り廊下」を識別できる。
- ⑥写真15（p.22）：1984.11.4の撮影とする国土地理院の空中写真である（原図を一部トリミング）。中央に土樋キャンパスが写る。L字形の廊下を識別できず、単色の大屋根が架かるように見える。

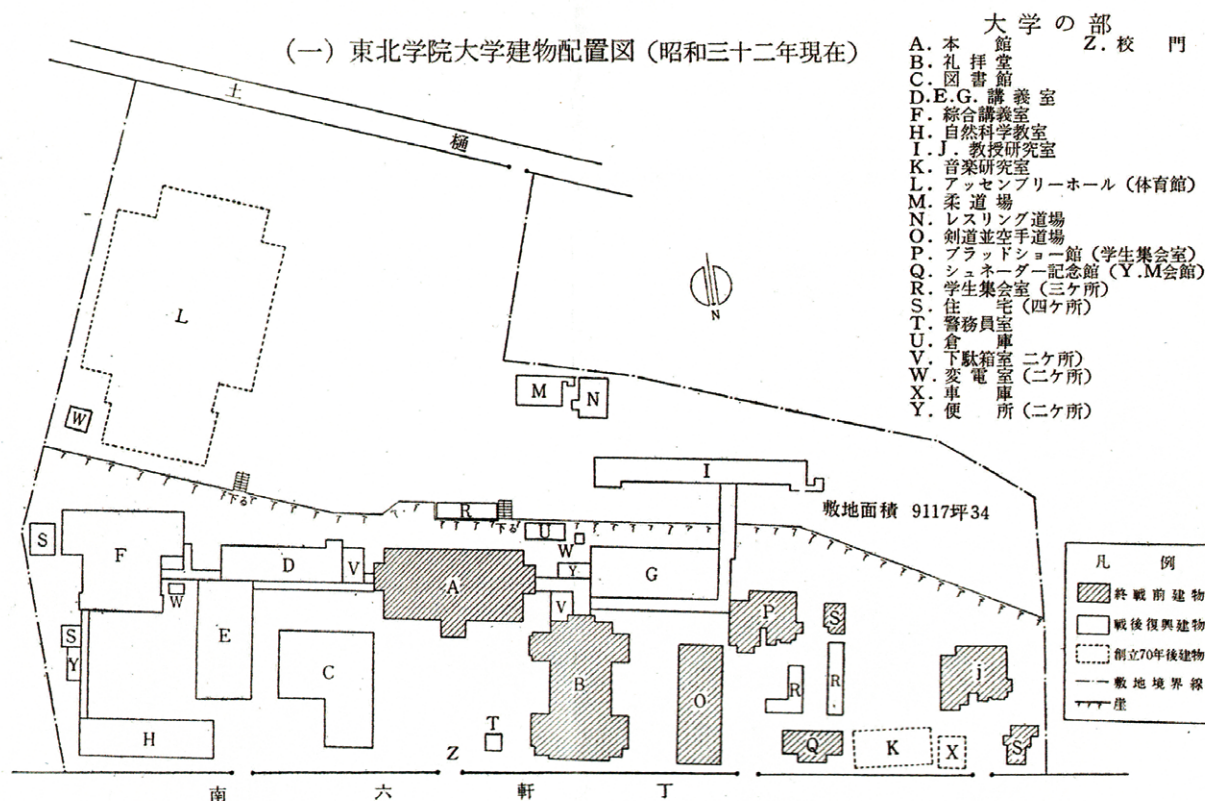


図8 1957年時点の土樋キャンパス施設配置図



写真12 国土地理院撮影の空中写真（1961.4.26）



写真13 国土地理院撮影の空中写真（1975.9.11）



写真14 国土地理院撮影の空中写真（1978.5.25）



写真15 国土地理院撮影の空中写真（1984.11.4）

写真16には、解体中の「渡り廊下」の、礼拝堂と取り合う屋根部分を示した。更にその両端を接写したものを写真16a（礼拝堂側・図面併記¹¹⁾・写真16b（先端側）として掲載した。屋根の上にはアスファルトルーフィングと保護（押さえ）コンクリートが遺り、とりわけ「渡り廊下」と礼拝堂が取り合う接点の部分においては、礼拝堂の外壁石材を削って「渡り廊下」を礼拝堂の壁内に差し込む納めになっていたことを確認できる（写真16aで削られているのが礼拝堂の外壁である）。欠き込み部の周囲には側壁の仕上げに用いられた人造石（洗い出



写真16 解体中の「渡り廊下」屋根

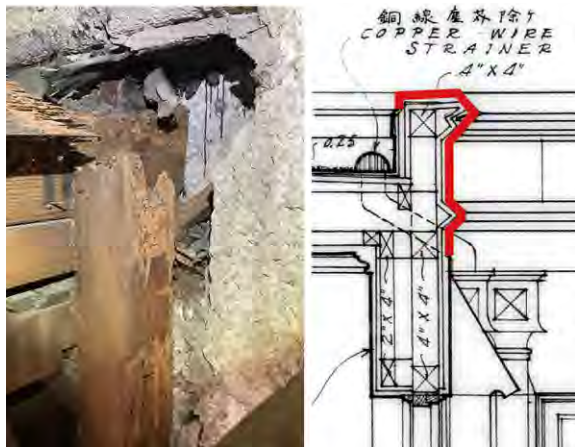


写真16a 部分拡大図（礼拝堂側・図面併記）



写真16b 部分拡大図（先端側）

し）の剥離痕が残り、欠き込みの形状は設計図（写真16a右図）ともよく一致する。秋保石に刻まれた精緻な加工痕は、当時の施工技術の高さを示す貴重な証拠である。

4-2 壁・柱・細部意匠

解体前の屋根の下には、屋根を支えるように大きな柱型が2本立っていた（写真17：白枠内）。供用時にその内部を窺い知ることは不可能だったが、解体に際して確認する機会を得た。この柱型の位置を当初の設計図の上に書き加えたものを次頁の図9に、柱型の内側の写真に図面を併記して整理したものを同じく写真18¹²⁾に、それぞれ示す。

2本の柱型の内部には、もともと外部に露出していた尖頭状の付け柱（次頁写真19参照）と仕上げ材の一部、銅製の堅樋、および外壁の下地材（柱・壁・メタルラス）が見つかった。すなわち大屋根を支持していた2本の柱型は、当初の部材を内に残したまま、これらを覆う形で造られていたのである。また、特に尖頭状の壁面装飾と銅製堅樋は、外気に面していない期間が長かったためか、他に比べて劣化が進んでおらず、状態は比較的良好であった。

さらに天井裏には、上部だけを残して下部を切断した建設当初の壁柱が3箇所で見つかった。その位置を図10（p.25）に示し、さらに切断された柱の様子と、当初の姿を教えてくれる設計図（部分抜粋）を併記して整理したものを写真20（p.25）としてまとめた。

前述の通り、竣工時の「渡り廊下」の壁面は、腰高窓（または扉）と壁が交互に繰り返されるデザインであった（図4－図6参照）。壁の幅は図面によると約600mmで、その外側の中央に、幅約300mmの付け柱（頂部に尖頭状の装飾をもつ）が付加されていた。今回天井裏から見つかった柱は、位置と寸法から見て、それらの壁の両端に立つ主柱と見做さ



写真17 解体中の「渡り廊下」全景

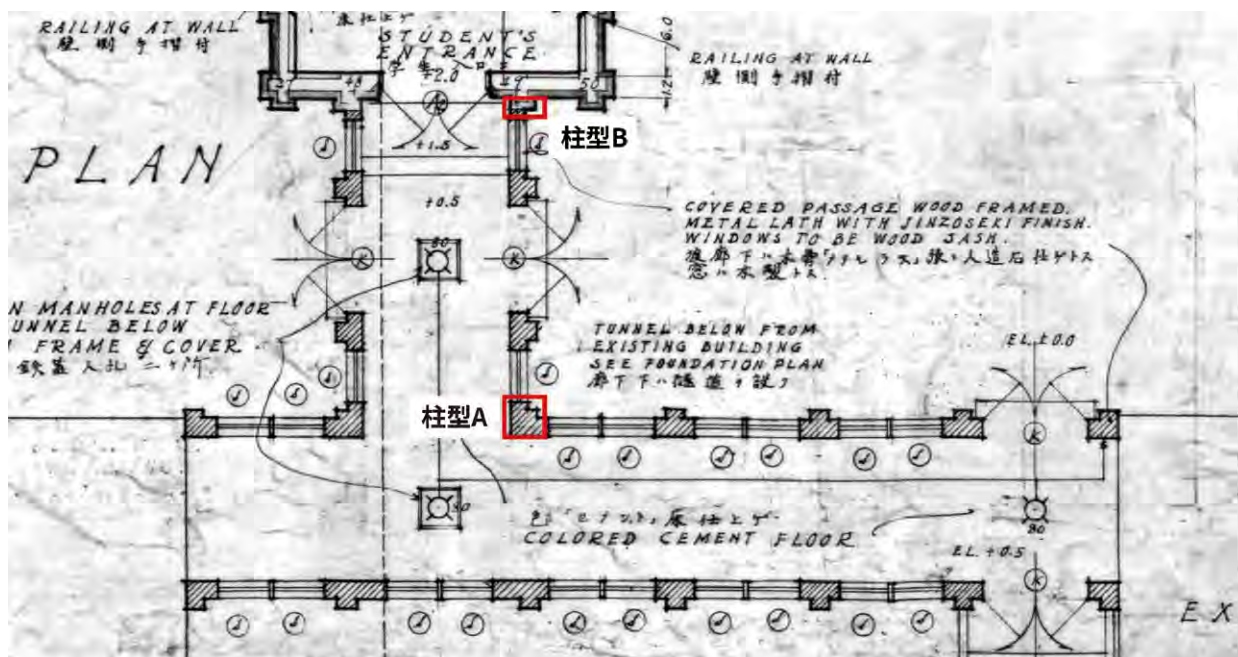


図9 柱型位置図

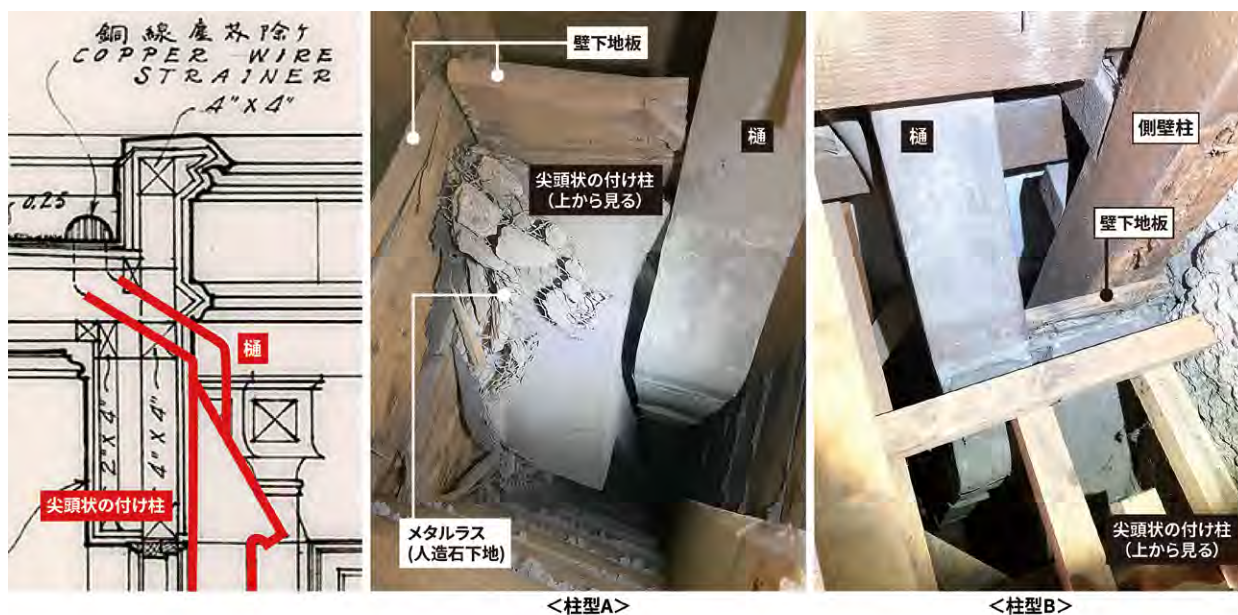


写真18 柱型内部の様子（図面併記）

れるものであった（写真20）。2本の柱は水平材で連結されて一組を成し、その水平材で小屋梁を受けている部分も見られた。柱と水平材とは、伝統的な仕口形式の1つである「傾ぎ大入れ」に似た手法で接合されていた。図面（写真20右下）に拠れば2本の主柱には4インチ角の、付け柱の下地には2インチ角の材料が用いられていた。付け柱による複雑な凸形状は、ツーバイフォー的な2インチ単位の部材と、伝統的な仕口技法とを組み合わせで実現されていたことが知られる。



写真19 礼拝堂の外壁に見られる尖頭状の付け柱

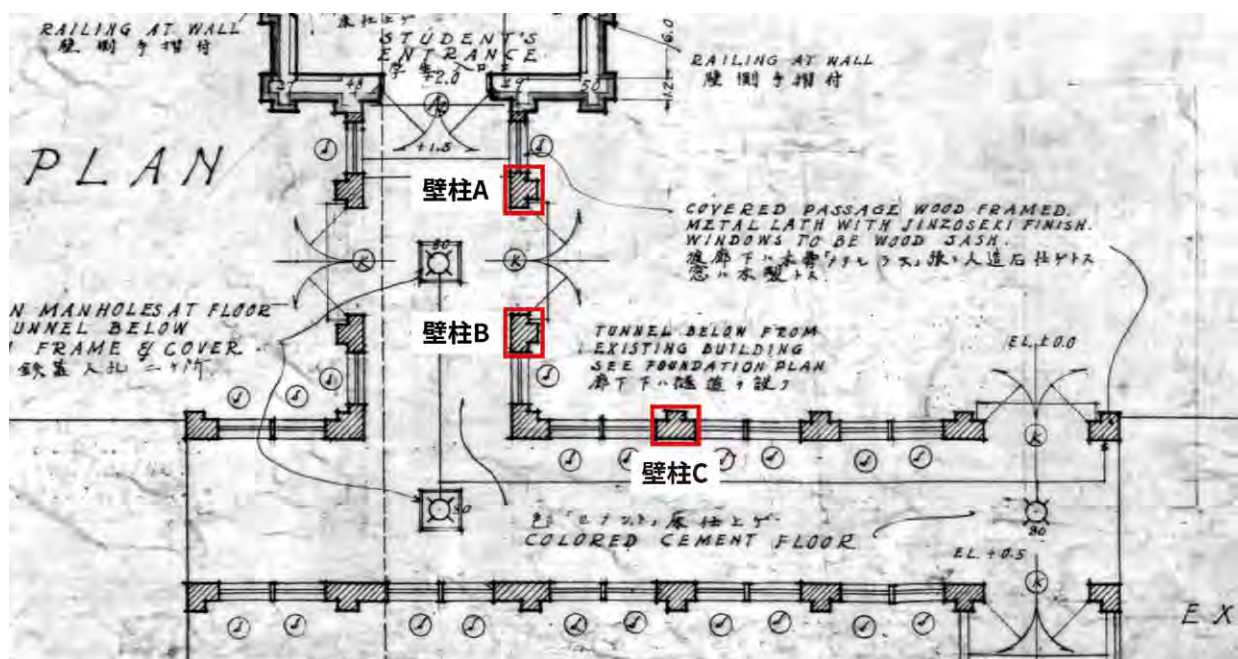
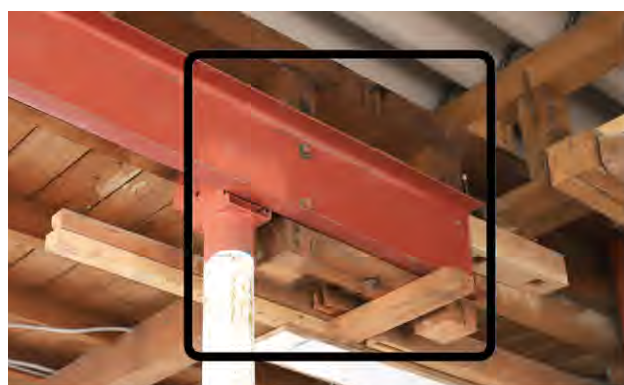
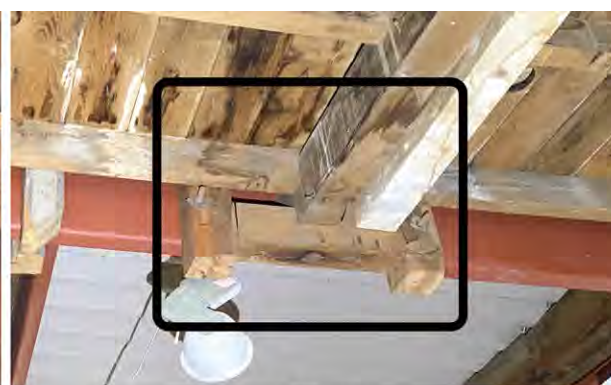


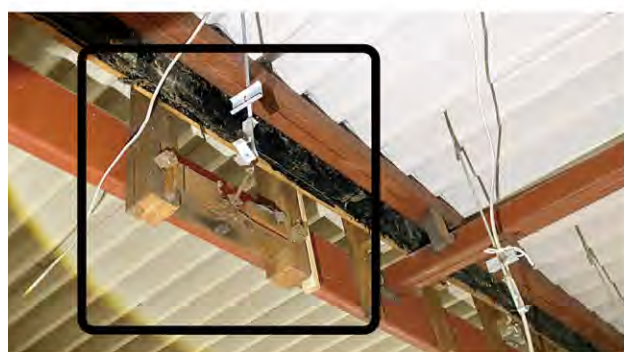
図10 現存が確認された柱の位置図



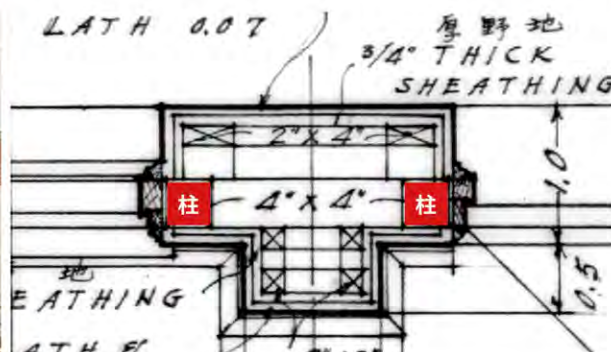
<壁柱A>



<壁柱B>



<壁柱C>



<壁柱設計詳細図>

写真20 残存する柱の様子（図面併記）

5. おわりに

1926年（大正15年＝昭和元年）に最初の建物（本館）が出来た東北学院大学土樋キャンパスは、2025年で100年を迎える。その間、ここには多くの建物が建築され、また解体されてきたが、各々の建物やそれらを包み込むキャンパスの空間には、その歴史に関わった関係者の記憶が満ちている。そうした大きな歴史の中で、2024年、キャンパス草創期に建設された2つの遺構（「渡り廊下」と共同溝内「煉瓦壁」）が止む無く解体された。本稿では、解体前に実施した実測調査に基づいて、これらの記録保存を試みた。本稿で得られた主な知見を整理すれば、以下の3点に要約できる。



写真21 解体中の様子 (2024.8.26)



写真22 解体中の様子 (2024.11.13)



写真23 解体後の様子 (2025.1.30)

①2つの遺構は、本館の建設時（1926）に構想されたマスタープランの中にその起源を見ることができる。一方、その具体化は礼拝堂の建設と同時に進められ、1932年（昭和7年）頃に竣工したものと見做される。

②特に「渡り廊下」の遺構は、供用時に外部から望見できなかった天井裏と柱型内部より解体工事中に発見された。実測調査の結果を当初の設計図と照合したところ、梁・桁・母屋・野地板・ルーフィング・パラペット下地・壁下地・付け柱・堅樋などに、竣工時の部材を確認することができた。

③これらの遺構には、建設技術史的にも興味深い痕跡が見られた。特に木造の躯体（木骨）に人造石で仕上げた「渡り廊下」の壁面は、凹凸の多い装飾的な形態を、2インチを基本単位とするツーバイフォー的な部材と伝統的な仕口技法とを組み合わせることで実現されていたことを確認した。礼拝堂の外壁に刻まれる加工痕も、当時の施工技術の高さを伝える貴重な痕跡と見做される。

2つの遺構は、2024年12月中旬までにその解体が完了した。写真21（2024.8.26撮影）と写真22（2024.11.13撮影）に解体中の様子を、写真23（2024.12.26）には解体完了後の様子を示す。現在は礼拝堂の壁面に「渡り廊下」の痕跡が僅かに残るのみで、当該部位を保護するための工事が検討されている。風景が一変した土樋キャンパスでは、いま、本館から礼拝堂とデフォレスト館が見える（写真23）。

謝辞

遺構の調査に際しては、多くの方々にご理解とご協力を賜った。特にキャンパス整備課の小野一隆氏には、工事の途中で古材が発見された旨の報をいただいて以後、解体工事が進む中での緊急調査の実施に際し、全面的にご支援をいただいた。解体工事を請け負った株式会社フジタの高倉雄士所長をはじめ工事関係の諸氏には貴重な情報を惜しみなくご提供いただいた上、工事現場の片隅で学生たちが調査を行うこともご快諾いただき、安全面でのご配慮を賜った。現地は更地になったが、こうして幾許かの記録を作成し得たことに対し、ご支援を賜ったすべての方に深甚なる謝意を表します。

【註】

- 1) 本稿中では特に対象遺構を指す場合、それぞれにカギ括弧を付して「渡り廊下」「煉瓦壁」と記す。固有名詞的に扱う趣旨である。
- 2) これらはいずれも登録有形文化財（建造物）「ラーハウザー記念東北学院礼拝堂」として登録される範囲の外にあり、文化財としては登録されていない。
- 3) 詳細は『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書』（崎山俊雄編、学校法人東北学院、2021.3）を参照されたい。
- 4) モーガンは1920年（大正9年）に来日し、横浜を拠点に活動した建築家として知られている。その経歴や作品については、水沼淑子『ジェイ・H・モーガン：アメリカと日本を生きた建築家』（関東学院大学出版会、2009）に詳しい。
- 5) テーテンスが創業した設備設計事務所は、我が国で最も古い設備設計事務所の一つとして現在まで存続している。その活動の概要や関与した建築物等については、同社のホームページに詳しい（テーテンス事務所：<https://www.tetens.co.jp/>）。
- 6) 戦前期の東北学院を造った建築家は、確認できる限りにおいて、すべて外国人である。東二番丁の普通科校舎（1905）を設計したG.デ・ラランデ（独）、1919年（大正8年）の南町大火後に中学部の再建のための調査を行ったB.M.ワード（英）、実際に中学部校舎の再建（1922）を担ったW.ウィルソン（米）、そして土樋キャンパスの草創期を担ったJay H.モーガン（米）とA.P.テーテンス（独）である。また設計者名こそ不明だが、仙台神学校（1891）の校舎が外国人建築家の手になるものであることも、かねてより指摘されている。

- 7) 今回解体された「煉瓦壁」（写真3）も現存する擁壁遺構（写真7）も、煉瓦は長手だけの面と小口だけの面を交互に重ねる「イギリス積み」で施工されている。当時としては一般的な方法で、県内でも石井開門（石巻市、重要文化財、1882）、東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）の基礎（重要文化財、1887）、東北大学片平キャンパス内の旧第二高等学校書庫（登録有形文化財、1910）などに見られる。
- 8) 本館設計時（1925-26）に「BOILER HOUSE」の設計図が作成されており、史資料センターに保存されている。しかしながらセンター所蔵の古写真に拠れば、少なくとも1926年5月の時点ではその存在を確認できず（資料番号B55-15）、煙突の位置が当初の設計図とは異なっていたことが知られる。
- 9) 図面には「渡廊下ハ木骨「メタルラス」張り 人造石仕ゲトス／窓ハ木製トス」とある（送り仮名等は原文ママ）。「メタルラス」は木下地に人造石（モルタル）を塗る際に使用される網目状の金属板を指す。また「人造石」とは、石造を模した「洗い出し」仕上げをいう。後述する写真18もあわせて参照されたい。
- 10) 紙幅の都合上、断面図（図7a）を最も大きく掲載し、平面図（図7b）と小屋伏図（図7c）はこれより小さく掲載している。
- 11) 図面中の赤線は筆者加筆による。
- 12) 図面中の赤線と文字は筆者加筆による。また写真中の白字は外から見える仕上げ部分を、黒字は外から見えない下地部分を表す。

崎山 俊雄プロフィール SAKIYAMA, Toshio

1975年北海道生まれ。博士（工学）。東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士課程修了。株式会社フジタ建築設計センター計画設計部、秋田県立大学システム科学技術学部助教・准教授を経て2016年4月より現職。専門は近現代建築史・文化財の保存活用。主な著書に『社宅街 企業が育んだ住宅地』（学芸出版社、共著）、『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書』（学校法人東北学院、編著）など。宮城県内外で歴史的建造物の調査や保存活用にも関わる。

史資料センター所蔵史料「東北学院年次報告 (Annual Report of Tohoku Gakuin)」の調査と分析

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学文学部総合人文学科講師

藤野 雄大

1. 序論

本論は東北学院史資料センター所蔵「東北学院年次報告」(T. G. Annual Report、以下「年次報告」と称す)の史料の調査と分析を行うものである。後述するように本史料は、一部欠けがあるものの、1889年から1940年までの東北学院に関する報告を含んでいる。その中でも本論では、特に東北学院最初期の記録である1892年から1894年までの「年次報告」の原文の掲載と私訳を試みている。

現在、史資料センターの構成員を中心にして、『東北学院百五十年史』(仮題)の作成プロジェクトが進行している。その具体的な作業を進行していくなかで、改めて注目されたのが「年次報告」である。詳細は次節で述べるが、「年次報告」は、東北学院の公式の報告書として、アメリカ本国の外国伝道委員会に、毎年提出されたものである。そのため、「年次報告」は極めて公的な性質の強い史料といえることができる。東北学院には、『東北学院百年史』(以下、『百年史』)編纂事業の一環として、米国ペンシルヴァニア州のランカスター神学校にあるERLA (E&R Library & Archives、当時はERHS: Evangelical & Reformed Historical Society)に所蔵されていた史料の写しが保管されている¹。

ところが、貴重な史料であるにもかかわらず、改めて調べてみると『東北学院百年史』での利用は限定的なものに留まっていることが分かった。『百年史資料篇』には、「年次報告」は収録されておらず、また本篇の方でも、当時の在校生数などを知る参考史料として部分的に用いられているに過ぎない²。

しかし「年次報告」の本文を一読して分かるように、内容的な価値もさることながら、公式の報告書であるとは言っても、一般にイメージされるような

無味乾燥したものではない。今回訳出した部分だけでも、本院三校祖の一人であり、報告者の一人でもあるウィリアム・E・ホーイの東北学院の現状に対する認識や課題、あるいは不満、また将来に対する展望や希望などが率直に記されており、極めて生き生きとした報告書になっている。また「年次報告」の何よりも貴重な点は、毎年一回、学内の様子を記しているため、それらを通して読むことによって、一年単位で東北学院の発展や変遷の様子を窺い知ることができることにある。

もちろん、報告者が限定されており、また報告者それぞれの視点には、自ずから偏りがあることも見過ごすわけにはいかない。しかし、その点を踏まえてもなお、その内容を紹介し、分析することには、一点の意義があると考えられる。そこで本論では、「年次報告」の基本情報を確認し、その上で、参考として最初期の3年間分の原文と私訳を掲載し、最後に、その内容分析を行うことにする。

2. 史料の基本情報

先に触れたように「年次報告」として、東北学院史資料センターには現在、1889年から1940年までの報告書が所蔵されている。ここでは、その基本情報についてまず解説していく。なお、解説にあたっては、今回作成し、本論文末に付した付録1「年次報告一覧表」を適宜参照されたい。

「年次報告」入手の経緯としては、『百年史』の編纂実務を担っていた出村彰本学名誉教授および日野哲史資料センター客員研究員(当時本学職員)が、1981年、1982年の夏に2度にわたってERLAで行った史料収集の際に、本院にそのコピーが持ち帰られたことによる。実際に、コピーをして持ち帰ったのは、出村彰名誉教授であると考えられる³。

¹ HERHSは、2025年1月に正式にERLAと名称を変更した。そのため、本稿でも今後はERLAと称する。

² 例えば、『東北学院百年史』、479、511、533頁など。

³ 入手の経緯については、日野哲客員研究員の証言に基づく。

原則として毎年一回報告書が作成され、前年の6月から当年の5月までの記録が報告の対象となっている。これは、アメリカの学校の授業スケジュールに沿ったものと思われる⁴。しかし、現在、史資料センターが所蔵している「年次報告」には、その内の1890年、1891年、1893年、1907年、1909年分が欠けている。これは、原史料そのものが、欠けていたのか、あるいは何らかの理由でコピーをしなかったのか、あるいは、その後に紛失してしまったのかは分からない。また、1886年の仙台神学校創設から1888年までの2年分と、1940年以降の報告書が存在しているのかも、時間的制約もあり、未調査となっている。この点については今後の調査の過程で明らかにしていきたい。

「年次報告」の1905年、1906年、1908年には合衆国改革派教会の教派新聞であった『メッセンジャー』(*Reformed Church Messenger*)誌に転載された記事のコピーも添付されている。これは出村名誉教授が、補ったものと思われる。今回の調査でも、原本写しが欠けていた1893年分に関しては、同年の『メッセンジャー』誌に転載されていた記事を発見し、補うことができた。とはいえ、次節で明らかにしているように、『メッセンジャー』誌には常に全文が転載されていたわけではなく、割愛されている部分が存在している。そのため1893年「年次報告」も本来の報告書から省略された部分がある可能性は高い。

今後の調査が進展していくことで、その他の欠けた「年次報告」も『メッセンジャー』の記事から補うことができる可能性はあるが、しかし、『メッセンジャー』誌も、膨大な量が発行されており、また「年次報告」は決まった時期に転載されているわけ

ではない⁵。その上に現在では、『メッセンジャー』は、史資料センターにあるマイクロフィルムと、それをプリントアウトして製本した紙媒体でしか閲覧することができないため、毎年の「年次報告」を見つけるためには、実際に1ページずつ目を通し、拾い出していく必要があり、特定する作業は容易なことではなかった。さらに、今回、実際に数年分を試みに探してみたが(単純な見落としの可能性も否定できないが)、年によっては転載記事が見当たらないこともあり、「空振り」に終わることもあった。本論の趣旨とは少し外れるが、学内関係者の研究利用に限定する形で構わないので、将来的には『メッセンジャー』のPDF化、および記事項目による検索だけでも可能にすることを強く求めたい。それが実現したならば、本院の歴史研究も大きく進展することが期待されるだろう。

「年次報告」の執筆者(報告者)は、ホーイ、デイヴィッド・B・シュネーダー、そして出村悌三郎の三人であった。定まった書式があったわけではなく、最初は手書き(英語筆記体)が多く、1916年以降には完全にタイプライターで作成されている。また内容的にも決まった報告事項があるのではなく、報告者の裁量が大きい。印刷の状態については、不鮮明なものもあり、特に手書きの報告書については、文字の掠れや、報告者の癖字もあり、読み取ることが困難な箇所もあった。なお、この点については『メッセンジャー』に転載された報告書の記事が大きな助けとなった。以上のような基本情報を踏まえた上で、次節では実際に原文史料の活字化と私訳を行う。

⁴「原則」としたのは、例えば、1889年4月4日付「年次報告」など最初期の数年間分が、正式には「年次」(Annual)とは記されておらず、「神学校の報告」("Report of Training School")などと記されているからである。特に1889年に関して言えば、『メッセンジャー』誌上には、他の日付で作成された「神学校の報告」が複数掲載されており(例えば1889年8月28日、9月11日、10月16日、11月6日)、この段階では、まだ「年次報告」という形式は定まっていなかったのではないかと想定しうる。

⁵ 今回の調査で明らかになったのは、最も早いもので7月末、最も遅いもので12月半ばの号に掲載されていた。報告書の作成は5~6月ごろであり、掲載まで数ヶ月間の開きがある理由ははっきりとは分からない。当時、船便で手紙を郵送した場合には、数週間から1ヶ月程度で日本から米国に着いているようである。そこから、まず外国伝道委員会で報告され、さらに毎年行われる合衆国改革派教会の地域中会(district synod)、あるいは3年に一回の総大会(general synod)の会議が9月から10月に行われることが多く、このような会議での報告と承認のタイミングが、掲載時期に関係しているのではないかと、想像することはできる。しかし、明確なことは不明としか言いようがない。

3. 史料の原文と翻訳

前節では年次報告の基本情報について紹介してきた。以下では、1892年（1891年6月～1892年5月まで）、1893年（1892年6月～1893年5月まで）、1894年（1893年6月～1894年5月まで）の3年間の「年次報告」の原文の活字化と翻訳を試みたい。1891年は、言うまでもなく仙台神学校から東北学院へと改組され、それに伴い予科、本科が設置され、神学教育機関から普通教育をも含むことになった本院の歴史上重要な年である。この3年間の「年次報告」を通して、仙台神学校から東北学院へと移行していく当時の状況を窺うことができる。なお、すでに述べたように、1893年の「年次報告」については、史資料センターに原文の写しが欠落していたため、「メッセンジャー」1893年7月27日版に掲載された記事を訳出している。そのため、元来の報告書全文が掲載されているわけではなく、一部割愛されている可能性があることに留意する必要がある。

①「年次報告」1892年版

①ー1：原文

Report of the Training School, Sendai, Japan⁶

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States. Dear Fathers and Brethren:—Entering the new building last September with a larger number of teachers and students than we ever had before, the Tohoku Gakuin had made a satisfactory record during the past year. Great difficulties and grave misunderstandings have been met, conquered and forgotten. With hope in God to direct us in the future, I respectfully submit to your body the following report:

On the 18th of September, 1891, the Sendai Theological Seminary building was finished. The contractor, a Tokyo Christian, did his work honestly according to agreement. The contract

was made in the sum of Yen Nine Thousand. This amount has required \$7,271.64 U.S. gold. To this must be added a sum of \$ 144.61 for hard ware, pulpit and traveling expenses, swelling the total cost of the building to Seven Thousand Four Hundred and Sixteen Dollars and Twenty five Cents (\$7,416.25 gold). Treasurer of the Board Lemberger has forwarded remittances in full, and owing to favorable exchange I was able to leave Sixty Dollars in the general treasury. In the Rudolph F. Kelker Memorial Library there are:

Japanese Text Books,	664 volumes.
Japanese Reference Books,	674 //
English Text Books,	805 //
English Reference Books,	1,126 //
Total Number vols. In Library,	3,269 //

Of the specified Memorial Fund we have a balance of gold, \$238.73 We are now preparing a well selected list of books to be purchased with this balance. With this new purchased the number of volumes will reach 3,400. I give you the following list:

class.	Students.	Christians.
1st Preparatory,	37	8
2nd Preparatory,	26	8
Freshman College,	16	12
Sophomore //	20	13
Junior //	5	5
Senior //	3	3
English Theological Department,	2	2
Vernacular // //	10	10
Total,	119	61

Of the vernacular Theological Department students, two have left, one being licensed to preach, and the other wishing to engage in Orphan's Home work.

As the Secretary of the Mission has furnished the Secretary of the Board with a list of beneficiary students, I do not deem it necessary to repeat it here.

In connection with the Tohoku Gakuin, the president, Rev. M. Oshikawa, has inaugurated a movement which he proposes shall result in an Industrial Home, where needy students may become self-supporting, or nearly so. At present he is allowed 30 yen per month from the beneficiary

⁶ *Reformed Church Messenger* (Aug. 4. 1892) に掲載（一部省略）。なお、同記事の直後には、エリザベス・R・プールボーによる宮城女学校の「年次報告」も掲載されている。

fund. It is too early to say much in regard to success or failure of this scheme. There are now seventeen students in this Industrial Home. Some sell milk; some hawk newspapers and pamphlets in the streets of Sendai; some farm, and others peddle coal oil from house to house; and in this way an extra income is provided for. What the result of this movement will be with respect to the scholarship of these students, is a question that fills my mind with misgiving. It may be worth a fair trial, however.

[I think to record here a little warning. Do not crowd the applications for beneficiary students too rapidly upon us. You are open to grave disappointments in this work. Of the original six students with whom the present work was opened, only two remain with us. One has gone to the Universalists; One is – I don't know where; a third, rushing into preaching helper, he was prepared for it, met many difficulties, was not able to answer objections to the Gospel, and is now an avowed enemy of Christ; the fourth is Mr. Matsuda, with whose history, I think, you are acquainted. Give us time, please to exercise the utmost caution in the selection of these students. Even at best, we can only promise to do what we can. The future success or failure of these beneficiaries is not absolutely in our hands. The more I learn of our work and of Japanese character, the more tired I feel in the Lord's service.]⁷

There are no conversions among the non-Christian students to be reported. But there has been a marked improvement in the conduct of most of these students. Some of them, in their composition exercises, write good Christian sentiment. Many are also attending church services. We may hope that in the future a goodly number of these young men will give their hearts to the Lord. We make no efforts to make Christian in a day. We believe in educational religion.

The students have established a flourishing English and Japanese Literary Society. At their first Anniversary Exercised a short time ago, the marked Christian character of all the productions gave us reason to believe that the name of Christ has influence here. The attainments of these students will compare favorably with those of any other school of the same grade in Japan.

In the financial report of the Tohoku Gakuin, you will notice that a gymnasium has been built during the year. It is a cheap building of Japanese style, and furnished with a few simple Japanese conveniences for exercise. It hardly calls for further notice.

I wish, however, to call your attention to the fact that if our school continues its present number of students and classes, we must have more recitation rooms. We need also an apartment to serve as a laboratory. A building to meet these wants can be erected in fair Japanese style for about \$500. The mission will perhaps ask for an appropriation from the balance in the general mission treasury. We are still using the old rude benches in the recitation room. Is there no one who would donate us furniture?

The constitution of the Tohoku Gakuin is being rewritten, and in it better arrangements will be made for holding the property in trust for the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of America for educational and religious purposes only. Your faithful servant,

W. E. Hoy



仙台神学校校舎

⁷ 括弧内は原文のみにあり、『メッセンジャー』の記事には引用されていない。また原文にも括弧が付されている。

①ー2：同私訳

「日本、仙台の訓練校に関する報告」

合衆国改革派教会海外宣教委員会御中

親愛なる父たち、そして兄弟の皆様。昨年9月に新校舎に移り、これまでにないほど多くの先生と生徒を迎え、東北学院は、この1年間で満足すべき記録を残しました⁸。大きな困難と重大な誤解が起りましたが、克服され、水に流されてきました。神が私たちを未来へと導いてくださるという希望を込めて、私は謹んで以下の報告を提出いたします。

1891年9月18日、仙台神学校の建物が完成しました。請負業者は東京のキリスト者で、契約通りに誠実な仕事をしました。工事は合計9,000円で行われました。この金額は7,271.64米ドルの金に相当します。この他に機械設備、説教壇、旅費のために合計144ドル61セントを追加する必要があり、建物の総費用は、7,416ドル25セントに膨らみました。委員会の財務担当であるレンバーガーは、満額送金してくださり、また有利な為替のおかげで、私は一般会計に60ドルを残すことができました。ルドルフ・F・ケルカー記念図書館には、次の本が収められています⁹。

邦語教科書	664冊
邦語参考図書	674冊
英語教科書	805冊
英語参考図書	1,126冊
文庫内総冊数	3,269冊

指定された記念基金のうち、残高は238ドル73セントです。私たちは現在、この残高で購入すべき本のリストを厳選する準備をしています。この新たな購入により、冊数は3,400冊に達するでしょう。次のリストをお示しします。

⁸ 仙台神学校校舎は、1890年秋に着工し、1891年秋に竣工した。赤煉瓦造、方形5層の塔と円錐形スレート屋根の円塔から成る、仙台でも指折りの美しいモダンな建築物であった。「新校舎に移った生徒数は68名、教授数9名であった」と伝わる。花輪庄三郎編著、『東北学院創立七十年史』、東北学院同窓会、1959年、89-95頁。

⁹ 赤煉瓦の本校舎の一室を書籍室として設けた。事業で財をなし、敬虔なキリスト者として合衆国改革派教会外国伝道局会計も務めたルドルフ・F・ケルカーが私財を投じて、1500冊の図書を提供したことから、ケルカー記念図書館とした。『七十年史』99頁。

学 年	学生数	キリスト者
予 科 1 年	37	8
予 科 2 年	26	8
本 科 1 年	16	12
本 科 2 年	20	13
本 科 3 年	5	5
本 科 4 年	3	3
英語神学部	2	2
邦語神学部	10	10
合 計	119	61

邦語神学部の学生のうち、2人が去り、1人は説教の免許を取得し、もう1人は孤児の家の仕事に従事することを望んでいます。

宣教師団の書記が委員会の書記に奨学金受給中の学生のリストを提供していますので、ここで繰り返す必要はないと思います。

東北学院に関連して、院長の押川方義牧師は、労働会として結実することになる彼が提案した運動を導入しました。これによって、貧しい学生は、自立できる、またはほとんど自立ができるようになるでしょう。現在、奨学金のための基金から月額30円（訳注：支出すること）が認められています。この計画の成功または失敗について、多くを語るのは時期尚早です。現在、この労働会には17人の学生がいます。牛乳を売っている者がいます。仙台の街角で新聞やパンフレットを売り歩く者もいます。農業をする者もいれば、家から家へと石炭を売る人もいます。そしてこのようにして、追加の収入がもたらされます。この運動の結果が、これらの学生の奨学金に対してどのようなものになるのかという疑問が、不安と共に私の心の中に満ちています。しかし、まず試して見る価値はあるでしょう¹⁰。

【ここで、少しばかりの懸念を報告しておこうと思います。奨学金を受給する学生の申請をあまりにも急いで私たちに押し付けなないでください。この活動に対する失望を銘記することをご容赦ください。この活動が始まった当初にいた6人の学生のうち、私たちと一緒に残っているのは2人だけです¹¹。あ

¹⁰ ホーイは労働会の展開に対して、当初から懐疑的であった。しかし、ただ傍観していたのではなく、ホーイ自身も多額の献金を捧げていたことは看過してはならない。この箇所は『百年史』341頁にも抜粋が訳出されている。

¹¹ 島貫兵太夫と田村兼哉だろう。島貫は1894年に、田村は1896年に神学校を卒業し、伝道者となった。『百年史』241-243頁、および247-253頁。

る者は、ユニバーサリストになってしまいました¹²。ある者は、消息不明です¹³。三人目は、説教の応援者になることに駆り立てられていて、それに備えていましたが、多くの困難に直面し、福音に対する反論に答えることができず、今ではキリストの公然たる敵になってしまいました¹⁴。4人目は松田氏で、その経緯はご存じだと思います¹⁵。このような学生の選考に最大限の注意を払うために、どうか私たちに時間を与えてください。私たちには、せいぜい、できることを約束することしかできないのです。これらの受給者の将来の成功または失敗は、私たちの手の中に完全にあるわけではありません。私たちの務めや日本人の性格を知れば知るほど、疲れてしまうのです。私は主に仕えていると感じています。】

報告すべきような未信者の学生の中での回心はありません。しかし、これらの学生のほとんどの行動には際立った向上が見られました。彼らの中には、作文の練習で、良いキリスト教的感想を書く者もいます。また、教会の礼拝にも多くの者が参加しています。私たちは、将来、これらの若者のかなりの数が、その心を主に捧げるようになることを願っています。私たちは一日でキリスト者を作ろうと努力しているわけではありません。私たちは教育的宗教を信じているのです。

学生たちは、英語と日本語の文学会を発展させています¹⁶。少し前に行われた彼らの最初の大会では、すべての作品にある際立ったキリスト教的性格は、キリストの名前がここで影響力を持っていると信じる理由を私たちに与えました。これらの学生の学識は、日本の他の学校の同学年の学生と比較しても遜色ないでしょう。

東北学院の会計報告では、この年の間に体育館が建設されたことに気づくでしょう。それは安価な和風の建物で、運動のための簡素な和式の器械がいくつか備わっています¹⁷。それ以外に関心を集めることは、ほとんどありません。

しかし、私たちの学校が現在の学生数とクラス数を持続するのであれば、より多くの講義室を持たなければならないという事実に対する注意を喚起したいと思います。また、実験室として使える区画も必要です。これらの要求を満たすための建物は、約500ドルあれば普通の和風様式で建てることができます。宣教委員会はおそらく、ミッションの一般会計の残高からの充当を求めるでしょう。講義室では、古い粗末なベンチをまだ使っています。家具を寄付してくれる人はいないのでしょうか？

「東北学院憲法」は書き直されているところで、その中で、教育的および宗教的目的のみを目的として、アメリカ合衆国の改革派教会の外国宣教委員会に財産を信託するためのより良い取り決めがなされることになるでしょう。あなたの忠実な下僕、

W・E・ホーイ

¹² 安部保次郎を指す。安部は「宇宙神教」(ユニテリアン・ユニヴァーサリスト)に傾倒していった。『百年史』218-222頁。

¹³ 消去法で言えば、西堀幸八か橋本宗之進ということになる。『百年史』、215-218頁、および244-246頁。しかし、ホーイが当時二人のうち、どちらの消息を知らなかったのかについての確証はない。

¹⁴ 早坂千三郎か。早坂は当時キリスト教への批判に転じ、1892年2月には『通俗非基督教全』を刊行している。しかし、晩年にはキリスト教信仰を回復したとも伝わる。『百年史』238-240頁。

¹⁵ 松田順平を指す。松田は仙台に孤児院を創設すると主張し、学業を疎かにし、またホーイらとも対立していた。そして、度重なる注意にも従わなかったため、1892年に退学処分となっている。『百年史』223-235頁。

¹⁶ 文学会は、1889年に作られた。当時の世相を反映して、学生の弁論演説への熱が高まっていた。「仙台神学校文学会雑誌」を発行していたが、1891年からは島貫兵太夫が、1892年1月からは岩野泡鳴が編集に加わり、活発に活動していた。『七十年史』104-107頁。なお第1回文学会大会は1892年4月29日に行われている。『百年史』1312頁。

¹⁷ 正確な所在地は不明。付録2「東北学院所有地並二校舎」を見ると、神学校校舎の北西に教室及び体操機械倉庫を含む建物があるが、それを指すか。

②「年次報告」(1893年版)

②-1: 原文

“Annual Report of the Tohoku Gakuin” (1893)¹⁸

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States.

Dear Fathers and Brethren: — In making this report of the Tohoku Gakuin, I must, in the first place, mention the zeal and fidelity of the president and of all the professors and tutors. The Rev. M. Oshikawa is the right man in the right place. His influence over young men is second to none in the Church in whose interests the Tohoku Gakuin has been established. His unselfish devotion to the welfare and advancement of our students has made him a very useful man indeed. The students love him and regard him as their “Father.” In the enlargement and improvement of the school, during the past year, he has done an important part. The professors, too, are thoroughly interested in the Tohoku Gakuin. They are faithful in teaching and liberal in their contributions to the Industrial Home and to the Endowment Fund, contributing one tenth of their salaries to the latter cause alone. It is a matter of joy and gratitude to be permitted to labor with such men.

In order to provide the requisite number of recitation rooms, the former gymnasium was remodeled and enlarged last fall; and to retain the facilities of a gymnasium, a large frame with a good roof over it was erected. The four sides of this unique building are the four quarters of the heavens, save a small enclosure to serve as a dressing room.

Last summer a good selection of books was made. This increase in the Hon. R. F. Kelker Memorial Library consists, in the first place, of one hundred and sixteen English volumes; among these may be mentioned the best edition of the

Century Dictionary, a Standard Atlas of the World and a valuable set of Perry’s Japan Expedition. A Christian farmer, a member of one of the churches near Sendai, donated a large Chinese- Japanese Dictionary in some sixty volumes. A number of other contributed books, both English and Japanese, must be gratefully included in the additions to the Library. The Text-Book Library has also been enlarged. A large number of students who are too poor to buy their books can thus be furnished with the necessary books at a certain rate for rent. Many text-books have been sold, either for cash or at a fixed rate of monthly payment. We hope in the near future to have all, or nearly all, the students make arrangements to buy their books.

For the practical study of some of the natural sciences a good outfit has been purchased during the year. An enthusiastic professor makes good use of this, and the students are making progress in these branches.

We have now a thoroughly organized institution of Christian learning. The Preparatory Department has a carefully prepared course of study covering three years. The Collegiate Department resembles the ordinary American college in its several appointments. Much satisfactory work has been done here during the year. The Theological Seminary, having its course of study arranged after the manner of good Seminaries at home, aims to prepare the candidates for the ministry in a thorough way.

Since our last annual report the faculty of the Tohoku Gakuin has been strengthened by the addition of three new professors, one American and two Japanese, and of one new tutor. A new Kanji (business manager, etc.) has been secured. Owing to the peculiar manners and customs of Japan, this officer is a necessity in all well- organized schools in this land. Our new Kanji is one of the best Christian ministers in Japan. He was formerly associated with Dr. Moore in his Yamagata work. We have in our Faculty thirteen Japanese and three Americans, sixteen in all. Among these Japanese are men who are recognized in all the Christian churches in Japan as men of culture, ability and influence. In fact, nearly all the best

¹⁸ 1893年に関しては原本写しは史資料センターには存在しない。そのためMessenger, July 27, 1893の記事より補っている(報告書の作成月日は未記入)。

Christian talent of Japan is centralized in the institutions of Christian learning; and the Church with which we co-operate is no exception to the rule. This goes to show how a living experience on the field endorses Christian education.

I shall now give formal statistics:—

	whole No.	Chrstians	Seekers	Unbelievers
1st.Preparatory	31	8	6	17
2nd. Preparatory	30	7	7	16
3rd.Preparatory	20	8	9	3
Freshman B.	22	10	8	4
Freshman A.	21	13	5	3
Sophomore	15	11	3	1
Junior	14	13	1	
Senior	4	4		
Theol. Seminary	22	22		
	179	96	39	44

The students have been most faithful, and they are respectful in their attitude toward us all. The religious spirit of the Tohoku Gakuin is improving. Twelve young men were baptized during the year. The statistics show thirty-nine under special spiritual instruction. The students hold services of their own in addition to the regular instruction and services. There are fifty-two young men studying for the Gospel ministry, and there are more to follow.

It is with pleasure that I note the promising work of President Oshikawa's Industrial Home. His plans and purposes having been but recently fully explained in the Church papers by the Secretary of the Mission, I need only add that I can heartily recommend this noble enterprise to the prayers and confidence of God's people. Let me offer statistics:

Number of students in the Home, 45; number of Christians, 34; number of seekers, 11. Of pronounced unbelievers there are none.

The work of the students in the industrial Home runs as follows: - Colporteur, 1; money collectors, 2; newsboys, 15; milk-men, 8; magazine sellers, 2; teacher of the Japanese language, 1; rice sellers, 2; beef sellers, 7; shoyu (a Japanese sauce) sellers, 2; church janitor, 1. May the Lord bless these young men in their efforts to help themselves. This kind of toil will tend to make them more industrious and self-reliant.

With the prayer and hope that some generous soul may make a special offering for the Industrial Home, I will add that Rev. Oshikawa has a debt of nearly fifty dollars gold, resting on the Home. This is owing largely to the original "outfit." It certainly would be a great encouragement, were some one to make an offering of this kind.

The students of the Tohoku Gakuin maintain a vigorous literary society, and they are preparing to publish a bi-monthly magazine on Christian principles. This will add very much to the growing influence of the Tohoku Gakuin.

So much has been said during the past years, in letters for the home church papers, about the Christian influence of the Tohoku Gakuin, that very little remains to be said here. That the name of God is being glorified; that souls are being trained in the higher life; that intellects are widening in the wisdom of all sciences made to center in Christ Jesus; that good talent is being furnished unto the noble work of the Christian ministry; that young men of worthy parts are strengthened for the various walks of life; that Japan is being enriched and ennobled; that the Kingdom of God is having its prophets and its seers prepared for the noblest work on this beautiful earth; this inspiring earth;- these things, all these things, and thou and more, I claim in the name of our Lord Jesus Christ as recognized work and the enthused life of the Tohoku Gakuin. Looking to the whole man to be developed God-ward, praying that all departments of human learning may be sacredly used for the upbuilding of the new Jerusalem in Japan, trusting in the allgracious Father who has so signally blessed us in the past, the Tohoku Gakuin has no uncertain work to do; and she makes no uncertain sound, when she turns, like an inspired and unsullied virgin, to the defined life and love of the future, hoping only for the fulfillment of the heavenly aspirations God has implanted in her mobile breast. With her doors swung open for the admission of the enthusiastic boys and young men of the Church of Christ in Japan, the sounds that issue from her consecrated halls also bring influences to bear upon boys and young men not yet in Christ; so that these come hungry, get filled,

and leave rejoicing in both new knowledge of the things and mysteries of this earth and wisdom in the things that pertain unto the spiritual life that now is. Let the God-given and God-prospered work continue in its normal progress, and we shall fear no future, however dark and unpromising, in financial matters. The first year of this institution, the work was done in a miserable hut without stove. We are no afraid of poverty. If young men continue to come to us, we shall surely take them in. That our present buildings are full to overflowing is no reason whatever to make us halt here. Mind and spirit are too precious to be denied life and growth for want of a few cheap buildings and a few acres of additional ground. God has met and will continue to meet all legitimate wants. A benefactor in the hour of sorest need will be raised up unto the Tohoku Gakuin.

In the burning hope of youth; with renewed consecration and determination to obey the voice of God in the uplifting of man in Japan; the Tohoku Gakuin, the youngest daughter of the Reformed Church, has life to live and give. Here is no mean portion. Her strength is in the past, the present and the future.

Faithfully submitted in service,

W.E. Hoy, President of Board of Direction.



ケルカー記念図書館

②-2：同私訳

「東北学院年次報告」

合衆国改革派教会海外宣教委員会御中

親愛なる父たち、そして兄弟の皆様— 東北学院のこのレポートを作成するにあたり、私は、まず院長をはじめ、すべての教授や講師の熱意と忠実さについて触れなければならないでしょう。押川方義牧師は、まさに適材適所の人物です。若者に対する彼の影響力は、東北学院を設立した教会の中では比類のないものです（訳注：日本基督教会、特に東北の諸教会か）。学生の福祉と進歩への無私の献身によって、彼は実に有用な人物となっています。学生たちは彼を愛し、彼を「父」と見なしています。学校の拡大と改善において、この1年間、彼は重要な役割を果たしてきました。教授陣も東北学院にすっかり関心を持っています。彼らは教えることに忠実であり、労働会と寄付基金への貢献に気前良く、給与の10分の1を後者の目的のためだけに寄付しているのです。このような人々と一緒に働くことを許されていることは、喜びと感謝です。

必要な数の講義室を提供するために、昨秋、旧体育館は改装され、拡大されました。そして、体育館の設備を保持するために、その上に上等な屋根のある大きな枠組みが建てられました。このユニークな建物の4つの側面は、更衣室として用いられる小さな囲いを除けば、4分の1が天空です¹⁹。

昨夏には、いくつかの良書が選定されました。R・F・ケルカー記念図書館の増加分は、第一に英書116冊からなっています。その中には、センチュリー辞書の最高傑作、スタンダード・アトラス・オブ・ザ・ワールド、ペリーの日本探検に関する貴重な全集などがあります。仙台近郊の教会の教会員である、あるキリスト者の農夫が、約60冊の大きな漢和辞典を寄贈しました。その他にも、寄贈された英語と日本語の多くの図書を、喜びを持って図書館への追加図書として含めなければなりません。教科書の棚も充実しました。こうして貧しすぎて本を買うことができない多くの学生に、必要な本を一定の料金で貸し出すことができるのです。多くの教科書が、現金または月賦で販売されています。近い将来、すべての学生、あるいは、ほぼ全員が自分の本を購入するようになることを願っています。

¹⁹ 吹き抜けのことか？ 建物が特定されておらず、写真もないので、文章の正確な意味は不明。本論の脚注17も参照のこと。

この年には、自然科学の実践的な研究のための充実した用具類が購入されました。熱心な教授がこれを用いてうまく利用し、学生はこれらの分野で進歩を遂げています。

私たちは今や、キリスト教教育のために完全に組織化された機関を備えています。予科には、3年間にわたる慎重に準備された学習コースがあります。本科は、いくつかの設備において、アメリカの一般大学とよく似ています。この一年で、ここではたくさんの充実した活動がなされました。神学校は、その学習コースを本国の優れた神学校の順序に従って配置しており、神学生たちを徹底的な方法で伝道に向けて準備することを目指しています。

前回の年次報告以降、東北学院の教授陣は、新たに3名の教授（アメリカ人1名、日本人2名）と1名の新しい講師が加わったことで増強されました²⁰。新しい幹事（ビジネス・マネージャーなど）も確保しました。日本特有の風俗と習慣のために、この役職者は、この国の全ての良く組織された学校では必要不可欠です。私たちの新しい幹事は、日本で最も優れたキリスト教牧師の一人です。彼は以前、山形での活動でモール博士を補佐していました。私たちの教師陣には、日本人が13人、アメリカ人が3人、合計16人がいます。これらの日本人の中には、日本のすべてのキリスト教会で、教養、能力、そして影響力のある人物として認められている者がいます。実際、日本のキリスト者の中で最高の才能を持つ者のほとんどすべてが、キリスト教教育機関に集中しています。そして、私たちが協力している教会も、その例外ではありません。これは、当地での実際の体験がキリスト教教育をどれほど支持しているかを示しています。ここで公式の統計を示しましょう。

	総数	キリスト者	求道者	未信者
予科1年	31	8	6	17
予科2年	30	7	7	16
予科3年	20	8	9	3
本科1年B組	22	10	8	4
本科1年A組	21	13	5	3
本科2年	15	11	3	1
本科3年	14	13	1	
本科4年	4	4		
神学校	22	22		
	179	96	39	44

学生たちは非常に忠実で、私たち全員に対して敬

意を払う態度をとっています。東北学院の敬神的精神は向上しています。この年の間に12人の若者が洗礼を受けました。統計によると、39人が特別な霊的指導を受けています²¹。学生は、通常の指導と奉仕に加えて、独自の奉仕があります。福音の宣教のために勉強している若者は52人いますが、これに続く者がこれからもいます。

私は、押川学長の労働会の有望な働きについて記すことができるのを嬉しく思います。これまでの彼の計画と目的は、最近になって宣教師会の書記によって教会の会誌で完全に説明されたので、私はこの崇高な事業を神の民の祈りと信頼に対して、心から推薦できることを付け加えるだけです。統計を提供しましょう。

労働会の学生数、45名。キリスト者の数、34名。求道者の数、11名。明確な未信者は一人もいません。

労働会の学生の仕事は次のように行われています。キリスト教書籍販売、1名。集金係、2名。新聞売り、15名。牛乳売り、8名。雑誌売り、2名。日本語教師、1名。米売り、2名。牛肉売り、7名。醤油（日本のソース）売り、2名。教会の用務員、1名。主がこれらの若者たちが自分自身を助ける努力を祝福してくださいように。この種の労苦は、彼らをより勤勉で自立させる傾向があるようです。

寛大な人々が労働会に特別な献金を捧げてくれることを祈りつつ、希望を込めて、私は押川牧師が会のために50ドル近い負債を負っていることを付け加えておきます。これは主に最初の「道具一式」によるものです²²。誰かが、このために献金をしてくれるのは、確かに大きな励ましになります。

東北学院の学生たちは活発な文学会を維持しており、キリスト教の教えに関する隔月の会報を発行する準備をしています。これは、東北学院の影響力の増大に大きく貢献するでしょう。

ここ数年の間に、本国の教会の機関紙に寄せた手紙の中で、東北学院のキリスト教の影響について多くのことを語ってきましたので、ここで語るべきことはほとんどありません。神の御名が栄光を現されていること。より高い生活の中で魂が訓練されてい

²⁰ ヘンリー・K・ミラー、熊谷駒之助ら。『百年史』696-697頁。あと一人は調査できなかった。

²¹ 求道者向けの教理教育を指すと思われる。

²² 初期の設備投資のための借財ということであろう。

ること。知性は、キリスト・イエスを中心に据えられたすべての科学的知恵において拡大していること。優れた才能が、キリスト教宣教という高貴な務めのために備えていること。立派な若者たちが、さまざまな人生の歩みのために強化されていること。日本は豊かになり、高潔になっていること。神の国は、その預言者と預言者たちを、この美しい地における最も高貴な仕事のために準備させていること。この感動的な地。これらのこと、これらすべてのこと、そしてあなたがた、そしてその他のことを、私は、私たちの主イエス・キリストの名において、東北学院の認められた務めであり、熱心な生命として主張します。全人類が神に育まれることを望み、人間のあらゆる学問的分野が日本において新しいエルサレムの建設のために神聖に用いられるように祈り、過去に私たちをあれほど明確に祝福してくださった恵み深い父を信頼しているので、東北学院には不確実な務めはありません。そして、彼女（訳注：東北学院）は、靈感を受け、汚れのないおとめのように、神がその躍動する胸に植え付けた天国への願望の達成だけを望みながら、未来の確かな生活と愛に向き直るならば、不協和音を立てることはありません。その扉が日本のキリスト教会の熱心な少年たちや若者たちの入学のために開かれ、奉獻された、そのホールから発せられる音は、まだキリストに出会っていない少年や若者にも影響を与えるでしょう。そうすれば、これらの飢えた人々は、この地上の事柄と神秘についての新たな知識と、現在の霊的生活に関連する事柄についての知恵の両方に満たされ、喜びながら巣立っていくのです。神から与えられ、神によって栄えを得た務めが通常の発展を続けるならば、私たちは、財政問題において、どんなに暗く、見込みのない未来であっても恐れることはありません。この学校の最初の年は、ストーブのないみすばらしい小屋で活動が行われていたのです²³。私たちは貧困を恐れません。もし若い人々が私たちのと

ころにこれからも来るならば、私たちは必ず彼らを受け入れるでしょう。私たちの現在の建物があふれんばかりに一杯になっているからといって、私たちがここで立ち止まる理由にはなりません。心と精神は、安価な数棟の建物と数エーカーの追加する土地が不足しているということによって、その生命と成長を否定してしまうには、あまりにも貴重なものです。神は、あらゆる正当な要求を満たしてきましたし、これからも満たし続けるでしょう。最も困窮している時にこそ、東北学院には恩人が与えられるでしょう。

若さの燃えるような希望の中で、日本人の向上のために、新たにされた献身と神の声に従う決意を持って、改革派教会の末娘である東北学院は、生きた命と与える命を持っているのです。ここには中途半端なものはありません。その強さは過去、現在、そして未来の中にあります。

忠実に奉仕に服従しながら。

W・E・ホーイ、理事局長。

²³ 最初の木町・北六番丁角の一軒家を指すと思われる。当時、冬の寒さの中でストーブもなく、洋服をかぶって、寒さを防ぎ、小さな火鉢の火で手の指を温めたと、ホーイは記している。『百年史』208-211頁。

③ 「年次報告」 1894年

③-1 : 原文

Report of the Tohoku Gakuin.

To the Board of Commissioners for Foreign Mission of the Reformed Church in U.S.: — Let me start with statistics.

	whole No.	Chrstitians	Seekers	Unbelievers
1st.Preparatory	37	16	14	7
2nd. Preparatory	23	12	9	2
3rd.Preparatory	19	12	5	2
Freshman	12	7	2	3
Sophomore B.,	12	7	4	1
Sophomore A.,	9	5	4	
Junior,	7	6		1
Senior,	12	11	1	
Theol. Seminary	29	29		
	160	105	39	16

The whole number last year was given at the figure of 179, but that included those who had left during the year. The number 160 above means the present number. The attendance therefore, is about the same as last year, with an increase of Christians and 11 baptisms. Five students graduate from Theological Department in a few weeks.

The Industrial Home has increased to 65. The work of the Home is divided as follows; — Milkmen, 8; News-boys, 30; Miso sellers, 2; church janitors, 2; School janitors, 3; Magazine sellers, 2; Dealers in notions, 2; Stationers, 2; Washermen, 2; Teachers of the Japanese language, 2; Beef sellers, 1; Merchants, 7; Money collectors, 2. These young men earn one-third of the amount needed to maintain the Home. The rest is made up by contributions from the school funds and from Japanese friends. Rev. Oshikawa has a debt of more than a hundred dollars, gold, resting on his industrial institution. He is struggling hard to remove it.

During the year the library has been increased by more than a hundred valuable books. Scientific instruments have also been purchased when needed.

[Along the present lines of work, I would point out the need of a separate place for the (local?) classes. We are overcrowded, some of the rooms in the Rev. John Ault Memorial Dormitory being used for recitation purposes. If we had five or six thousand dollars gold, we could buy a suitable lot, near our present buildings, and erect (these on?) the necessary buildings. Our present grounds are too small for these purposes. I should like to have the Mission and the Board assist me in raising about six thousand dollars gold for the above mentioned purposes. Mrs. Hoy and I have work under way which is (sure?) to realize us at least two thousand dollars. This will be a fair beginning. Can we not all unite on this effort to give the Tohoku Gakuin full accommodations? It could soon be done. Who will help?]²⁴

Believing that there is a mission for the Tohoku Gakuin on her own principles, and distinctively in the name of Christ and for His Church,

I am, Your sincerely,

W.E. Hoy,

President of the Board of Directors of the Tohoku Gakuin.

Sendai, Japan, June 6, 1894.

²⁴ 原文のみに記載。『メッセンジャー』には無い。

③-2：同私訳

「東北学院報告」

合衆国改革派教会海外宣教委員会御中
まずは統計をお示いたします。

	総 数	キリスト者	求道者	未信者
予 科 1 年	37	16	14	7
予 科 2 年	23	12	9	2
予 科 3 年	19	12	5	2
本 科 1 年	12	7	2	3
本科2年B組	12	7	4	1
本科2年A組	9	5	4	
3 年 生	7	6		1
4 年 生	12	11	1	
神 学 部	29	29		
	160	105	39	16

昨年の総数は179人でしたが、その中にはその年に去った人々も含まれています。上記の160という数字は、現在の数字を意味しています。したがって、出席者は昨年とほぼ同じですが、キリスト者が増加し、洗礼が11回行われました。数週間の内に5人の学生が神学部を卒業します²⁵。

労働会は65名に増加しました。会の仕事は次のように分担されています。牛乳売り、8名、新聞売り、30名、味噌売り、2名、教会の用務員、2名、学校の用務員、3名、雑誌売り、2名、小間使い、2名、文具売り、2名、洗濯屋、2名、日本語教師、2名、牛肉売り、1名、商売人、7名、集金係、2名。これらの若者は、会を維持するために必要な金額の3分の1を稼いでいます。残りは、学校の資金と日本の友人からの寄付で賄われています。押川牧師は、労働会のために100ドル以上の金の負債を抱えています。彼はそれ（訳注：負債）を取り除くために一生懸命苦勞しています。

この年、図書館は貴重な本を100冊以上増やしました。必要に応じて科学機器も購入されています。

〔現在の仕事に関して、私は（訳注：一語不明。おそらく「個々の」か？）教室のために区切られた空間の必要性を指摘したいと思います。私たちは人で溢れており、ジョン・オールド牧師記念館の部屋

のいくつかは講義のために使用されています²⁶。もし5000か6000ドルの金があれば、現在の建物の近くに、適切な区画を購入し、（これら？訳注：教室だと思われる）に必要な建物に設けることもできるのですが。現在の敷地は、これらの目的には小さすぎるのです。私は、ミッションと委員会に、上記の目的のために約6000ドルの金を調達するのを手伝ってもらいたいと思っています。ホーイ夫人と私は、少なくとも2000ドルを調達するための仕事を進めているところです。これはまずまずの始まりとなるでしょう。東北学院に充実した設備を提供するために、皆で、一丸となって取り組めないものでしょうか。それはすぐに実現するかもしれません。誰か援助してくれませんか。〕²⁷

東北学院には、独自の原則に基づきつつ、キリストの名において、またキリストの教会に対する使命があると信じつつ、

真心を込めて。

W・E・ホーイ

東北学院理事局長

1894年6月6日、仙台市。



ジョン・オールド記念館

²⁵ 東北学院神学部第一回卒業式。卒業生、金成兵助、島貫兵太夫（英語神学部）、橋本経光、佐藤庸男、猪俣誉平（邦語神学部）を指す。『百年史』1314頁。

²⁶ 南町通りに面した東二番丁と南光院丁の敷地を仙台教会と分割し、西側が学校の所有地となった。そこに本校舎に先駆けて建てられたのが、寄宿舎であった。木造二回建、7室に平屋の賄い部屋からなる寄宿舎は、ホーイ夫人の亡父ジョン・オールドの遺産を投じて建てられたことから、その名を冠した。『七十年史』81頁。

²⁷ 原文のみに記載。『メッセンジャー』には無い。

4. 史料の分析と結論

前項で3年分の史料の紹介と私訳を行った。細かい点については、できる限り脚注で補っておいたので、ここでは全体として表れている史料の特徴を整理しておきたい。

まず、「年次報告」という公的な報告書としては、ホーイの溢れ出るような強い思いが記されていることが分かる。ホーイの願望、喜び、不安、そして不安の中での神への信頼が表れている。これは、一つには「年次報告」が、『メッセンジャー』にも掲載され、教派内部の多くの人の目に触れることを念頭に置いたものだからであろう。ホーイは、彼の他の手紙がそうであるように、東北学院の様子を伝えるとともに、東北学院に対する一層の支援を要請しているのである。

また東北学院開院当初の3年間の報告を見ると、特に注目されるのが、労働会に関する記述の多さである。ホーイは、その成否の判断は、まだ時期尚早としながらも、基本的には疑念を示している。1893年の段階では50ドルだった押川の負債は、翌年には100ドルに増加したことを記しており、その運営が順調ではないことを本国に伝えている。

ホーイの報告の中で、経営や財政的な問題と並んで、常に重視されているのが、学生のキリスト教教育であった。報告書を通して、1894年までの段階では、学生の内、キリスト教徒が、6割から7割弱を占めており、さらに求道中の者を含めると、当時の東北学院におけるキリスト教的風潮が非常に強いものであったことが想像される。未信者の人数も、学年が上がるにつれ、減少しており、これは校風に合わず退学していったのか、あるいは周囲の感化を受け、洗礼を受けるか、求道者に転じる傾向があったのだと推測される。この傾向は、労働会所属の学生を見るとより顕著であり、労働会は経営的には失敗することになるが、キリスト教的感化という点では一定の意義があったと見ることもできる。また1892

年の報告にある「私たちは一日でキリスト者を作ろうと努力しているのではありません。私たちは教育的宗教を信じているのです」という言葉は、ホーイのキリスト教教育観を端的に示したものと言えるだろう。

さらに訳出した「年次報告」を通して、最初期の混乱の様子も伝わってきた。施設が十分に整わないままに、学生の数が増加したことによって、教室（講義室）の確保が困難になっていることが分かる。92年に建設したばかりの体育館（あるいは道場と言うべきか）を、翌年には増改築し、教室を増やしたという記述からは、ホーイらが、いかにこの問題に苦慮していたかを知ることができる。

一方で、公的な報告書だけに書くことができない問題もあったと思われる。『百年史』が指摘しているように、1893年11月21日に、ホーイは最初の辞任の意を表しているわけだが、その後すぐに思いとどまったためか、「年次報告」には彼の進退について窺わせる記述はない。しかし、深読みになってしまうかもしれないが、1893年の「年次報告」に比べて、辞任騒動の渦中にあったであろう1894年の「年次報告」は、分量的にも少なく、内容的にも簡素な記述に留まっている。ここにホーイの当時の心境を読み取ることもできるかもしれない²⁸。

本論では、東北学院への改組期から始まる3年間の「年次報告」に限定して、論じてきた。わずかな期間ではあったが、特に最初期ということもあり、内容的には濃密なものであった。これから先の記述が、どのような展開になっているのかは、今後の研究によって明らかにされることになるだろう。しかし、いずれにしても、「年次報告」の史料価値は高く、今後も調査を進めていく意義はあると思われる。

²⁸『百年史』1314頁。

藤野 雄大プロフィール

FUJINO, Yudai

1983年東京都生まれ。2018年アメリカ合衆国 Calvin Theological Seminary (Th.M) 修了。2019年東京神学大学大学院博士課程後期課程単位取得済み退学。2020年東北学院文学部総合人文学科着任。

【文末付録】

付録1 「年次報告一覧表」

番号	正 式 名 称	年 月 日	執 筆 者	書 式	状 態	Messengerへの掲載
1	Report of Training School	1889年4月4日	ホーイ・シュネーダー	手書き	印刷不鮮明	見当たらず*他の日付の報告はあり
2	Report of Training School, Sendai, Japan	1892年日付なし	ホーイ	手書き		1892年8月4日 *一部割愛
3	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1893年日付なし	ホーイ	原本写し欠け	Messenger記事から補う	1893年7月27日
4	Report of the Tohoku Gakuin	1894年6月6日	ホーイ	手書き	印刷不鮮明	1894年11月15日
5	Report of the Tohoku Gakuin for the year ending May 31, 1895	1895年5月31日	シュネーダー	手書き		見当たらず
6	Report of the Tohoku Gakuin	1896年6月6日	シュネーダー	タイプ		見当たらず
7	Report of Tohoku Gakuin	1897年6月	ホーイ	手書き		未調査
8	タイトルなし *史料7に付随か?	1897年日付なし	シュネーダー	手書き		未調査
9	Tohoku Gakuin Report for 1897-98	1898年日付なし	ホーイ	手書き		未調査
10	タイトルなし	1899年6月21日	ホーイ	手書き		未調査
11	Report of the Tohoku Gakuin	1900年7月3日	シュネーダー	手書き		1900年11月8日
12	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1901年日付なし	シュネーダー	手書き		1901年9月26日
13	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1902年日付なし	シュネーダー	手書き		1902年10月2日
14	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1903年6月	シュネーダー	手書き		1903年8月13日
15	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1904年日付なし	シュネーダー	手書き		見当たらず
16	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1905年日付なし	記名なし	手書き・記事添付		1905年11月30日
17	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1906年日付なし	シュネーダー	手書き・記事添付		1906年12月13日
18	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1907年?		原本写し欠け		未調査
19	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1908年6月20日	シュネーダー	手書き・記事添付		1908年9月30日
20	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1909年?		手書き・記事添付		未調査
21	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1910年6月	シュネーダー	タイプ		未調査
22	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1911年6月	シュネーダー	タイプ		未調査
23	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1912年6月	シュネーダー	タイプ		未調査
24	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1913年日付なし	シュネーダー	手書き・タイプ		未調査
25	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1914年5月	シュネーダー	手書き		未調査
26	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1915年6月10日	出村憐三郎	手書き		未調査
27	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1916年5月14日	出村憐三郎	手書き		未調査
28	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1917年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
29	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1918年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
30	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1919年5月	シュネーダー	タイプ		未調査
31	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1920年5月26日	出村憐三郎	タイプ		未調査
32	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1921年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
33	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1922年4月26日?	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査
34	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1923年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査
35	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1924年5月5日	出村憐三郎	タイプ		未調査
36	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1925年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
37	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1926年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
38	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1927年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
39	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1928年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査
40	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1929年4月	シュネーダー	タイプ		未調査
41	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1930年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
42	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1931年日付なし	シュネーダー	タイプ	印刷不鮮明	未調査
43	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1932年9月	シュネーダー	タイプ		未調査
44	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1933年5月	シュネーダー	タイプ		未調査
45	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1934年5月23日	シュネーダー	タイプ		見当たらず
46	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1935年日付なし	シュネーダー	タイプ		未調査
47	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1936年日付なし	出村憐三郎の報告を翻訳	タイプ		未調査
48	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1937年?		タイプ		未調査
	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1938年4月13日	出村憐三郎	タイプ		未調査
	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1939年日付なし	出村憐三郎	タイプ		見当たらず
	Annual Report of the Tohoku Gakuin	1940年日付なし	出村憐三郎	タイプ		見当たらず

戦前の東北学院専門部の朝鮮人留学生

東北学院史資料センター調査研究員
東北学院大学国際学部国際教養学科教授

松谷 基和

2000年以降、日本とアジア諸国の繋がりが深まる中で、全国各地の大学では、戦前のアジアからの留学生に対する調査や研究が積み重ねられてきている¹。特にミッション系私学においては、戦後五十年を契機として、戦前の日本のアジア侵略や植民地支配に対する自校の責任や関わりを批判的に振り返る動きが高まって以降、自校史編纂の一環として、旧植民地からの留学生に関する文献調査や口述資料の収集などが行われてきている²。

しかしながら、東北学院ではこのような関心は弱く、管見の限り、戦前の留学生に対する体系だった調査は行われていない。これは、東北学院の自校史研究の体制が不十分であることに加えて、他のミッション系私学と比較して、戦前の自校史に対する批判的意識が弱いことも関係していると思われる。

こうした東北学院の自校史研究上の課題は一旦さておくとして、筆者は2022年度の本年報に寄せた拙稿の中で、戦前に人権派弁護士として活躍した鈴木義男が、朝鮮人の治安維持法事件に深く関与した背景には、東北帝国大学助教授時代の教え子である鄭在允という朝鮮人留学生との親しい関係があり、この鄭在允とは東北学院の同窓生同士としての繋がりもあったことを明らかにした³。

この拙稿執筆後、筆者は鄭在允に限らず、戦前の東北学院に学んだ朝鮮人留学生の全体像を把握する必要性を感じ、学内に保管されている学籍簿の調査を開始した⁴。この結果、東北学院専門部には鄭在允も含めて少なくとも8名の朝鮮人留学生が在籍していたことが確認できた。さらに、彼らの朝鮮での出身背景や卒業後の進路を追跡調査したところ、その多くが、当時の平壤にあった崇実学校というミッションスクールと深い関係にあったことも見えてきた。現在も調査は継続中であるが、これまでに明らかとなった事実を以下に整理し、中間報告としたい。なお、今回の調査対象は、専門部に在籍した留学生に絞ったものである。

専門部の朝鮮人留学生

現在、東北学院大学に保管されている学籍簿は、1904年3月1日以降の在籍者を対象としている。1904年3月1日とは、東北学院が「専門学校令」により、正式な高等教育機関として認められた日付であり⁵、この認定を機に、既存の学籍簿の整理が行

¹ 全国の大学における留学生研究の現状については、次の文献を参照せよ。阿部裕樹「大学アーカイブ・大学史におけるアジア留学生研究の現状」明治大学資料センター編『大学史紀要』第26巻、2020年3月、127-144頁。

² 例えば、青山学院では、戦後五十年を機に、自校史と戦争責任を考える「青山学院大学プロジェクト95」を立ち上げ、その成果として刊行した『青山学院と平和へのメッセージ：史的検証と未来展望』（雨宮剛、1998年）の中で朝鮮や台湾からの留学生の人生にも光を当て、その証言も多数紹介している。また、学籍簿に基づく詳細な留学生調査も行っている。佐藤由美「青山学院の台湾・朝鮮留学生に関する記録 1906-1945 (I)~(III)」『青山学院大学教育学会紀要 教育研究』（2004-2006年）。同様に、明治学院でも、戦後五十年に『心に刻む』（明治学院、1995年）を刊行し、その後、明治学院歴史資料館編『明治学院歴史資料館資料集(8) 朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』（明治学院歴史資料館、2011年）の刊行に至っている。関西学院は、韓国の研究者と共同で、自校の留学生調査を行っている。李徳周（朴賢淑訳）「関西学院神学部における朝鮮人学生入学関係資料の分析（一九一三-四三年）」『関西学院史紀要』（16号、2010年）7-40頁；神田健次「戦前における関西学院神学部の教育と思想の特色-韓国からの留学生との関係で-」神田健次『W・R・ランバスの使命と関西学院鉅脈（関西学院大学出版会、2015年）187-205頁に所収。

³ 松谷基和「鈴木義男と朝鮮-鄭在允との関係を中心に」東北学院史資料センター編『東北学院史資料センター年報』Vol.8、2023年3月、20-28頁。

⁴ この学籍簿調査においては、学務部長の平野幹夫先生と教務課員から多くのご助力を得たことを感謝して記す。

⁵ 厳密に言えば、1904年2月27日に文部大臣から、同年3月1日より東北学院専門科（文学部と神学部）が「専門学校令」に準拠して設置された学校であることを認める旨の通知が届けられた。この専門学校としての認可過程についての詳細は、東北学院百年史編集委員会編『東北学院百年史』（東北学院、1991年）485-488頁。

われ、新たに専門部用の学籍簿が作成されたと見られる⁶。

この学籍簿に最初に登場する朝鮮人留学生は、1914年に神学科に入学し、1917年に卒業した李時雄^{イ・シウン}である。李は1891年生まれで、本籍地は朝鮮北部の平安北道定州五山面である。この学籍簿には「入学前学歴」欄があるが、李の場合は未記載であり、朝鮮の出身校は不明である。ただし、彼の本籍地である定州の五山には、長老派系キリスト教徒の李昇薫^{イ・スンフン}が校長を務める「五山学校」という有名な私塾があったことや⁷、李時雄の東北学院入学の前年に、五山学出身者二名が神戸の関西学院神学部に入學していた事実^{イ・スンフン}に照らすならば⁸、李時雄も五山学校の出身者であった可能性が考えられる。あるいは、彼の学籍簿の保証人欄には、当時の東北学院神学科教授である笹尾糸太郎の名前があるため、笹尾が朝鮮側の教会関係者から、李時雄の紹介を受けたのかもしれない。いずれにしても、現段階では推測の域を出ず、今後のさらなる調査が必要である。

李時雄は神学科卒業後の翌年に朝鮮に戻り、故郷の平安北道にある長老教会（朝鮮耶蘇教長老会）の牧師となったことが、朝鮮総督府に提出された「布教届」の記録から確認できる⁹。彼はその後も牧師を続け、1921年に京城（ソウル）郊外の永登浦に転居した後、1944年まで同地で牧師を続けていたと見

られる¹⁰。しかし、この間の牧師としての活動の詳細は現時点では把握できていない。

なお、李時雄が入学した1914年以降、神学科への朝鮮人留学生は一人も現れず、再び神学部（1925年以降、「神学科」は「神学部」となる）への留学生が現れる1933年まで長い空白があった。この空白の背景には、当時の朝鮮の長老教会やミッションが、海外の神学校出身者を牧師に採用しないという方針を取っていたことが影響していたと思われるが、詳しくは後述する。また、1933年に神学部に入學した朝鮮人留学生も途中で転学したため（これも後述する）、李時雄は、東北学院の神学部の歴史上、唯一の朝鮮人卒業生ということになる。

専門部文科の留学生

李時雄以来、東北学院神学科への留学生は途絶えたが、これに代わって1920年代には専門部の文科に朝鮮人留学生が現れてくる。この文科への最初の朝鮮人留学生は、1923年4月入学の韓鎮興^{ハン・ジンフン}である。この人物の前歴、また卒業後の進路については、現時点では不明である。ただし、彼の出身校である「京城高等普通学校」は、当時の朝鮮において全国に二十校程度しかない官公立の中等学校の頂点に立つエリート校であった。従って、その卒業生であれば、東京や他の大都市の名門大学への進学も十分可能であったと思われる。その彼がなぜ東北の地方都市にあり、朝鮮人学生の間では知名度も低い東北学院を選んだのかは謎である。ちなみに韓の在学中の保証人は、学院の体操教員の「津田郁」であるが、これは津田が学院の生徒監、すなわち学生全般の生活指

⁶ 学籍簿の表紙のタイトルは、『専門科神学部 学籍簿 第壹号 私立東北学院』である。

⁷ 李昇薫は1907年に五山学校を設立したが、自覚的なクリスチャンとなったのは、抗日運動に関わった容疑（いわゆる「一〇五人事件」）で1911年に逮捕された結果、獄中で自己修養の機会を持ったことによる。李昇薫は出獄後も、引き続き五山学校の運営に関わり、さらに1919年の3・1独立運動で主要な役割を果たした。拙著『民族を超える教会』（明石書店、2020年）235-237頁。

⁸ 拙稿「関西学院の朝鮮人留学生の実相－入学関係書類を読み直す」『関西学院史紀要』第31号（2025年3月）。

⁹ 『朝鮮総督府官報』第一九一五号（大正七年十二月二十五日）351頁。この記録にある「李時雄」が、東北学院を卒業した「李時雄」と判断した根拠は、卒業の翌年に、彼の故郷の平安北道で、かつ長老派教会の布教者（牧師）として届け出を行っているという三つの要素が重なっており、同姓同名の他者である可能性はないと判断したためである。

¹⁰ 李時雄は、1921年には平安北道鉄山郡から、京畿道始興郡永登浦永登浦里への「布教者居住地移転」を届け出た。『朝鮮総督府官報』第二八〇〇号（大正十年十二月十二日）116頁。1944年には、永登浦を住所とする「李時雄」が「布教廃止届」を出しており、同一人物によるものと判断した。なお、この時点での李の所属教派は戦時下の教団統合により「日本基督教長老教団」となっていた。『朝鮮総督府官報』第五一〇三号（昭和十九年二月九日）74頁。

なお、1919年の3・1独立運動に連座して逮捕された人物の中にも「李時雄」がいるが、この人物は、京城（ソウル）の中央学校4年生で二十歳の青年であり（東北学院の李時雄は、この時、二十八歳）さらに本籍地も咸鏡御南道北青郡となっているため、同姓同名の別人であると分かる。「出版法違反竝保安法違反」の名簿参照。韓国史データベース所収（https://db.history.go.kr/id/hd_011_0010_0010）。

導をする立場にあったためであり、朝鮮人学生との特段の関係を示すものではないと考えられる¹¹。

なお、学籍簿の記載によれば、韓は入学の翌年に「家事都合」により一旦退学したが、三か月後にすぐに復学し、文科に「転科」している。東北学院では1918年の学制改正により、専門部は文科・師範科・商科に細分化されていたので、おそらく彼は入学当初は文科ではなく他の学科に所属しており、復学後に文科への転科を申し出たものと見られる。いずれにしても、彼は文科で最終学年度まで学び続け、1928年3月に無事に卒業している。ただし、上述の通り、その後の足取りは掴めていない。

韓鎮興ホン・スンジョンの入学から約半年後に学期途中で入学したのが、洪淳鐘である。洪は朝鮮人であるが、中国北京の「匯文中学」を卒業した後、東北学院に入学するという珍しい留学経路を辿っていた。北京の匯文中学は、米国の南メソジスト系のミッションスクールであり¹²、ドイツ改革派ミッションが経営する東北学院とは教派的な繋がりにはなかった。このため、この朝鮮人留学生が遠く北京から仙台の東北学院を目指した理由は今のところ全く見当がつかない。ただ、彼の入学時の保証人は、学院の教員ではなく、仙台市内に在住の「脇山清助」という銀行員（その後、「郡山源四郎」という教員に変更）であるので、もしかすると、この人物が仕事の関係で朝鮮や中国大陸との繋がりがあり、洪淳鐘と個人的な接点を持っていたのかもしれない。

ともあれ、洪淳鐘は、1923年9月に入学したものの、1926年11月2日付で「除名」されている。彼は初年度は履修したが、二学年から長期欠席者となり、正式に退学届を出さなかったため、学校側の判断で除籍されたものと見られる¹³。

鄭在允（1901－1943）



東北帝大在学中の鄭在允

朝鮮人として三番目の入学者でありながら、最初の文科卒業生となったのが、冒頭でも言及した鄭在允チョン・ジェユンである。鄭は朝鮮の平安南道平原郡に生まれ、平壤の長老派系ミッションスクールである崇実中学を卒業後、その上級学校にあたる崇実学校（後に専門学校）に進み、1924年に卒業している。その後、彼は南部の全羅北道群山のキリスト教系学校での教員生活をした後、再び学生となるべく渡日し、1925年11月に東北学院専門部文科の第三学年に編入した。彼は数ヶ月後の翌年春に卒業したため、先に入学していた韓鎮興を追い抜いて、朝鮮人初の文科卒業生となった。そして、卒業後は同じ仙台にある東北帝国大学法文学部の法科に進み、鈴木義男の学生となったのである¹⁴。言うまでもなく、当時の朝鮮人学生で帝国大学に進めた者はごく少数であり、鄭在允は東北学院に在籍することわずか数ヶ月で、その狭き門を突破したのである。

ところで、鄭在允の母校である崇実学校は、米国の北長老派ミッションが中心となって設立した学校であり、1920年代の平壤では、地元を代表する名門校であった。しかしながら、地元では名門とはいえ、当時の崇実学校は、朝鮮総督府の定めた学校基準に依らない非認可校であり、日本の教育制度上、各種学校の扱いであった。このため、崇実学校の中等部は「崇実中学」、専門部は「崇実大学」あるいは「崇実学校」と称されていたが、これはあくまでも自称にすぎなかった。当時の朝鮮では、総督府の認可した中等学校は「高等普通学校」、高等教育機関は「専門学校」と称されており、これらの認可校の卒業生にのみ上級学校への受験・入学資格が認められていた。従って、崇実学校の卒業生は、仮にいくら学力があろうとも、上級学校への入学資格がなく、この認定のためには特別の検定試験を経る必要があった。このため、高学歴を目指す朝鮮の青年たちは、崇実のような非認可校ではなく、厳しい競争を勝ち抜いて、限られた数の「高等普通学校」を目指すか、

¹¹ 津田郁については、『東北学院時報』第200号、昭和40年7月3日、5頁。

¹² D. MacGillivray, *Protestant Missions in China* (NY: American Tract Society, 1907) 449頁に、米国の南メソジスト派ミッションが北京で運営していたPeking Universityが「匯文書院」とであるとされ、この漢字名から、1920年代の「匯文中学」は同学校の中等部にあたるものと推定した。なお、本文献をご教示くださった東北学院大学国際学部教授の渡辺祐子氏に感謝する。

¹³ 洪淳鐘の学籍簿と成績簿の記録による。学籍簿には「退学」ではなく「除名」の印がある。

¹⁴ 鄭在允の経歴については、松谷「鈴木義男と朝鮮」23－25頁。

あるいは早期に日本に留学し、日本の中学校や高等学校を経て、専門学校や大学を目指す者が多かった。

このように非認可校には明らかにデメリットがあるにもかかわらず、崇実が認可を求めなかったのは、ひとえに学校を経営する長老派ミッションの方針であった。実は、総督府が定めた「高等普通学校」や「専門学校」の認可基準には、日本式のカリキュラムや教科書の導入に加えて、聖書教育などの宗教教育を正課から外す（つまり、課外時間に実施する）ことも含まれていたため、これを宗教の自由への侵害と判断した長老派ミッションは、自派の学校に対しては敢えて総督府の認可を求めず、各種学校としてとどまる道を選んでいたのである¹⁵。

もっとも、1920年代に入ると「文化政治」の一環として、教育法令も見直され、宗教教育を維持したままでも、財団法人の設立やその他の要件を満たせば「指定校」として認定を受け、その卒業生にも上級学校への受験・入学資格が認められるようになった。しかし、それでも長老派ミッションは、費用と時間のかかる「指定校」の認可には消極的であり、認可を急がなかった。このため、崇実はじめ長老派系の学校では、ミッションの保守的な姿勢に不満を募らせた学生らが、抗議デモや同盟休校を行う事件が頻発するようになっていた。宣教師はこの圧力を受けて、ようやく指定校申請へと舵を切り、1925年に崇実学校が、続いて1928年に崇実中学が、それぞれ「専門学校」、「高等普通学校」に相当する「指定校」の認可を受けた¹⁶。

こうした朝鮮側の事情を踏まえれば、崇実学校を卒業した鄭在允が、東北学院専門部に編入した理由も見えてくる。つまり、非認可校の崇実出身の彼には、日本の上級学校進学資格がなかったため、東北学院の専門部に編入学し、これを卒業することで大学受験資格を得ようとしていたと考えられるのである。実際、彼が編入学したのが文科の最終学年で

あり、わずか4か月後に卒業している点に照らしても、最短での卒業資格取得を目指していた可能性が高い。

ただし、鄭が単に学歴を作るためだけであれば、日本の他の学校でも可能であったはずであり、数ある学校の中で敢えて東北学院の専門部を選んだのには、何らかの特段の理由があったものと思われる。これは今後の研究課題であるが、一つの可能性として指摘できるのは、宣教師の紹介である。崇実と東北学院は、それぞれ米国の北長老派教会とドイツ改革派教会という異なるミッションによって運営されていたが、両者は共に米国の東部に拠点を置く長老派系の教会であり、宣教師間で個人的な交流や情報の交換が行われていた可能性がある。また、当時の崇実「指定校」の認可を得るべく、日本の大学を卒業した有資格者の教員を増やす必要があったため、崇実の宣教師が鄭在允を抜擢し、東北学院側に編入生としての受入れと帝大進学に向けた支援を要請していた可能性もある。東北学院で鄭在允の保証人となったのが、当時の文科教授であり、西洋古典の大家として知られる山川丙三郎であった点も、そうした可能性を示唆する。また、鄭在允が東北学院を経て東北帝大を卒業した後、すぐに母校の崇実専門学校の法科教授として迎えられた点から考えても、鄭在允は最初から将来の崇実を担う教員として期待される存在であり、同校の宣教師からの支援を受けて東北学院に送られてきた可能性は高い。

なお、すでに拙稿で明らかにした通り、鄭在允は、崇実専門が神社参拝を問題をめぐり1938年に閉鎖（後段を参照）された結果、教授職を失ったが、その後は、東京の鈴木義男の弁護士事務所に身を寄せ、自らも弁護士となって平壤に戻った。また、この間、鄭在允は鈴木に対して、治安維持法違反容疑で訴追された朝鮮の知識人たちへの弁護を依頼し、鈴木が朝鮮の事件にも関与するきっかけを作った。不幸にも鄭在允は病を得て、1943年に42歳の若さで早世したが、仮に彼が長寿に恵まれていたとすれば、鈴木義男が理事長となる戦後の東北学院とも深い関係を持っていたのではないかと想像する。

¹⁵ なお、メソジスト派は長老派とは異なる考え方に立ち、宗教教育の面での妥協と引き換えに、自派の重点校三校については1910年代にすでに総督府から「高等普通学校」の認可を得ていた。それら北メソジスト派が経営するソウル（京城）の培材、平壤の光成、そして南メソジスト派の経営する開城の松都の三校である。

¹⁶ こうした指定校への昇格をめぐる問題については、権寧培「日帝下 私立各種学校の指定学校 昇格에 관한一研究」『조선사연구』13권、2004年、219-227頁に詳しい。

金成植 (1908–1996)



金成植 1970年頃の写真と推定。申相楚「葉田 金成植(上)」『尋常』1998年6月号、89頁より転載

実は鄭在允は、東北学院に留学の際(1925年9月)、金成植キム・ソンシクという崇実の後輩の学生を同伴しており、二人揃って入学していた。金成植は鄭在允よりも五歳年下であり、崇実中学を卒業したばかりの18歳の青年であった。しかし、前述の通り、崇実中学は非認可校であるため、東北学院は彼に特別試験を用意し、その結果が良好であることを確認した上で、1925年度途中から文科予科に一旦籍を置かせ、翌1926年4月から正式に予科1年生として入学を認めた¹⁷。その後、金成植は順調に進級し、1927年4月に本科に進み、1930年3月に卒業した¹⁸。その後、彼は九州帝国大学の法文学部に進み、西洋史を専攻し、1935年に無事に卒業した。そして、帝大卒業後は平壤に戻り、母校である崇実学校(以前の崇実中学が1928年に総督府の「指定校」となり、崇実学校と称された)の教員となった¹⁹。このように、崇実から東北学院に学んだ二人の朝鮮人学生はいずれも帝大に進学し、卒業するという快挙を成し遂げただけでなく、両者とも揃って平壤の母校に戻り、教員として奉職する道を歩いたのである。

実は鄭在允と金成植は、単に崇実の先輩後輩という関係だけでなく、同じ村の出身という地縁でも結ばれていた。これは学籍簿でも確認できるが、彼らの本籍地は「平安南道平原郡龍湖面葉田里」と全く同一であった。つまり、彼らは五歳の年齢差はあるが、同じ村で幼少期を送り、中学からは平壤に出て同じ中学に通い、そして、卒業後には二人で揃って東北学院に留学していたのである。さらに、彼ら

の東北学院在学中の住所も、同一の「東八番町184」であった。おそらく、この住所は当時の東北学院の寄宿舎のものであり、彼らは、生活空間も共にしていた。また、鄭在允は東北学院卒業後も仙台に残り、東北帝大に進学したので、金成植は東北学院を卒業するまで、先輩の鄭在允から様々な情報や支援を受けることができたはずである。これは金成植が九州帝大を目指す上でも大きな力となったと考えられる。

金成植が東北学院で特に親しく指導を仰いだのは、鄭在允の保証人を務めた山川丙三郎であった。金成植は1970年代に記した随筆の中で、山川を自分の「師匠」と呼び、次のように回想している。

この師匠の名前は山川丙三郎である。当時、ダンテの研究者として日本では広く知られた方であった。土曜日になると必ず学生たちを招いてくれた方でもある。ある時、「先生、どうしてそんなに髪を長くするのですか?」と尋ねたことがある。先生は「ものごとを考えるのに良いからね」と、お答えになったことが記憶に残る。ダンテの「神曲」(天堂、煉獄、地獄)をすべて翻訳し、「新生」も翻訳され、さらに精密な注釈をつけて研究者の便宜をはかられた[業績もある]。教室では時々、イタリア語の原語でダンテの面白い詩を朗読してくれた。またボッカチオの作品の人の心を惻惻させる文章も原語で読んで説明してくれたことを昨日のこのように覚えている²⁰。



山川丙三郎(1876–1947)
金成植の回想にあるように、長髪は山川のトレードマークであった。写真はWikipediaより転載。

この回想が示すように金成植は山川の魅力ある授業に惹かれ、土曜日ごとにも招かれ(おそらく自宅での勉強会と思われる)、かつ気兼ねなく会話できるような関係にあった。金成植が九州帝大で西洋史を専攻し、ヨーロッパの知性史を専門的に研究するようになったのも、この山川丙三郎の影響が

¹⁷ 金成植の成績簿には「試験ノ上豫科ニ編入」との記録がある。

¹⁸ 金成植の在学中の1928年から東北学院の文科は従来の三年制から四年制となった。しかし、学籍簿や成績簿を見ると、金成植は1929年から三学年を飛ばして四学年に進級している。つまり、この時に在学中の二年生は三学年を飛び級した形として在学期間を延長することなく従来通り、三年間で卒業できたことが分かる。

¹⁹ 崇実校友会編『会員名簿』(昭和十三年九月)17、25頁。

²⁰ 金成植『간혹있던良心 묵여있던眞實』(第三企画、1987年)285頁。原文は韓国語、翻訳者は筆者。

大きかったと見られる。彼が回想の中で、九州帝大の教授ではなく、敢えて東北学院教授の山川を「師匠」として挙げたところにも格別の親愛の情が感じられる。こうした点に鑑みて、金成植にとって東北学院での留学生生活は知的刺激が多く、人間関係にも恵まれた平穏なものであったと推察される。なお、金成植の在学中の保証人は、東北学院の体育教員の駒米秀治であるが、彼との関係は不明である。

金成植は九州帝大卒業後に、鄭在允と同様に母校に戻り、崇実学校の教員となった。しかし、やはり1938年の学校閉鎖によって失職し、田舎で隠遁生活をしながら1945年8月15日の日本の敗戦を迎えた。しかし、北部にソ連軍が進駐し、金日成を中心とした共産党の支配が強まると、これを嫌った金成植は南朝鮮に脱出し、大韓民国の成立後は、ソウルの名門私立大学である高麗大学の西洋史学講座の教授となった。さらに、1960年4月に李承晩の独裁政権に反発する学生運動が広がると、金成植は学生を積極的に支持する教授団の一員としてとして活躍した。後に「4・19学生革命」と呼ばれるこの歴史的事件において、金成植は主導的な役割を果たしたのである。それだけでなく、金成植は、その後に成立した朴正熙の軍事独裁政権に対しても、民主化を求めて発言を続け、一時期は政権により大学の教授職から追放されるなど政治的迫害も経験した。その後、大学への復職が認められ、引き続き行動する知識人として活躍したが、民主化の達成を見届けることなく1986年に老齢のため死去した。ちなみに、今日でも高麗大学では、毎年4月19日に、金成植の教え子たちが恩師の足跡を偲ぶ集会を続けている²¹。

²¹ 金成植は韓国では『韓国民族文化大百科事典』にも収録される著名な知識人である <https://encykorea.aks.ac.kr/Article/E0009473> (2024年11月24日、最終閲覧)。高麗大学での最近の追悼行事については、『高麗新聞』(2023年5月8日付)ウェブ版 <https://www.kunews.ac.kr/news/articleView.html?idxno=40888> [2024年11月24日、最終閲覧]。

金大奉

金成植が文科を卒業した1930年春に、入れ違うように四学年に編入学して来たのが金大奉^{キム・デボン}である。この金大奉も平壤の崇実出身であったが、この間、崇実学校は1926年に専門学校に昇格していた。従って、金大奉には、専門学校卒業生として直接に日本の大学を受験する資格はあったはずであるが、敢えて東北学院に編入学したのは、先輩である鄭在允や金成植からの助言があったのかも知れない。当然、金大奉も、この二人の先輩と同様に、東北学院を経て、帝大への進学を目指していたと思われるが、卒業後の進路は把握できていない。

なお、この頃の崇実専門の学内誌では、卒業生の進路や活躍が定期的に報じられており、その中で金大奉の進学先も「日本仙台東北学院」と紹介されていた²²。鄭在允、金成植、金大奉と3人もの卒業生が留学先として選び、しかも、そのうち2名が帝大に進学したことで、「仙台」の「東北学院」は、少なくとも当時の崇実においては卒業後に目指すべき有力な上級学校として認知されるようになっていたようである。

神学部留学生の再開

こうした東北学院に対する認知度の高まりを示唆するのが、1933年に神学部にも李斗星^{イ・ドゥソン}と李在冕^{イ・ジェミョン}という2名の崇実出身の学生が入学したことである。先に触れたように、1913年入学の李時雄以来、神学部への朝鮮人留学生は、長らく途絶えていた。しかし、そこに突如、2名の崇実生が留学して来たのである。彼らは1933年3月に崇実学校(旧崇実中学)を卒業すると同時に揃って東北学院神学部^{イ・ドゥソン}に直接に入学しているが、これは崇実学校が1928年に「指定校」に昇格していたため可能であったと思われる。他方、東北学院神学部は、この間、予科3年、本科3年の学制に変わっていたため、李斗星と李在冕はまずは予科1年に入学し、3年後の1936年に本科1年に進学した。ところが、この年に、東北学院神学部が東京の日本神学校と合同することになったため、二人の朝鮮人留学生は第二学年に進級直後の1937年4月

²² 『崇実』第10号(1930年6月)108頁。

から日本神学校への転学を余儀なくされた。このため、学籍簿には「退学」ではなく、「日本神学校ト合同ノタメ」に「転学」として記録されている。こうして李時雄以来、二十年ぶりに東北学院神学部に入學した朝鮮人留学生は、卒業することなく、仙台を後にしたのである。

崇実学校と平壤神学校の関係

ところで、崇実出身の彼らが東北学院神学部を目指したのは、朝鮮のキリスト教史、特に長老派の教会史の文脈に照らすと極めて異例のことであった。というのも、当時の朝鮮の長老派教会（朝鮮耶蘇教長老会）は、平壤の長老派神学校（平壤神学校）の卒業生以外は、自派の教会の牧師に採用しないという厳格な方針を維持していたからである。つまり、日本や海外の神学校を卒業したとしても、朝鮮に戻って長老派教会の牧師資格は得られなかったのである。仮に海外の神学校出身者が、朝鮮の長老教会の牧師を希望する場合は、改めて平壤神学校に入學し、少なくとも半年以上の再教育を受けることが、長老派教会の規定によって義務付けられていた²³。

長老派教会がこの厳格な方針に拘り続けていたのは、19世紀末以来、朝鮮の宣教活動をリードしてきた宣教師たちが、非常に保守的な神学思想に基づいて長老派教会と神学校を運営してきたという歴史が関係している。当時、米国の長老派教会では、神学的な保守派と進歩派の対立が深刻化していたが、朝鮮に派遣された宣教師は保守派が圧倒的多数を占めており、朝鮮北部の平安道を拠点として、保守的なキリスト教を根付かせることに成功していた。平安道の平壤に唯一の長老派神学校が置かれたのも、こうした歴史背景によるものであり、同校は保守的な長老派の牙城であった。

平壤の崇実学校は、平壤神学校とは別組織であるが、両者ともに米国の長老派ミッションが実質的な運営権を握っており、崇実学校の卒業生のうち、牧師志願者を平壤神学校で受け入れて教育する体制となっていた。当然、崇実出身の牧師は、朝鮮の長老教会の主流をなしていた。したがって、長老派の牧師を目指す朝鮮人学生にとって、東北学院神学部へ

の留学はさほど魅力的であったとは思われない。実際、1913年の李時雄以来、約20年間も神学部への留学生がゼロであったのは、こうした朝鮮側の事情が主たる理由であったと考えられる。

それだけに、1933年に突如として、崇実出身の李斗星と李在冕が揃って、東北学院神学部に入學したのは異例の事であり、朝鮮の教会や崇実側に何らかの方針転換があったと見られるが、詳細は不明である。

李斗星と李載冕のその後——北朝鮮の神学校教授

1937年4月に東北学院神学部から東京の日本神学校に転学した李斗星と李載冕は、その後も日本神学校で学びを続け、1939年に同校の第九期生として卒業を迎えた²⁴。途中で転学を強いられたとはいえ、無事に日本で神学校卒業の資格を得たのである。

彼らは卒業後、すぐに朝鮮に帰国したと見られるが、この頃の朝鮮では戦時統制が強まり、教会やミッション系の学校に対しても神社参拝が強要され始めていた。そして、この神社参拝を、宗教の自由を蹂躪する政策と見た朝鮮の長老派ミッションは、それに妥協するよりは、むしろ自派の学校を閉鎖することを選んだ。この結果、長老派の宣教師たちは1938年に崇実学校だけでなく、平壤神学校も廃校することを決定し、本国への引揚げを開始した。他方で、現地に残された朝鮮の牧師や教会指導者は、閉鎖された神学校に代わる新たな神学校の設立を模索し、日本当局との折衝を経て、1940年に朝鮮人の運営する新しい「平壤神学校」を立ち上げた。これを通称「後平壤神学校」と呼ぶ。

李斗星と李載冕が、この激動する朝鮮のキリスト教界に戻り、どのような動きをしたのかは不明であるが、おそらくは故郷の平壤に戻り、牧師を続けていたと見られる。というのも、1945年8月の日本の敗戦後、北の平壤には新たに「聖化神学校」というメソジスト系の神学校が設立されたのであるが、李斗星と李載冕はこの新設の神学校の教授に就任したからである。ちなみに、戦前の朝鮮ではメソジスト教会（監理教会）の神学校はソウルに置かれていた。しかし、戦後の南北分断により、北部にも別の神学

²³『朝鮮예수교長老会憲法』（朝鮮예수교長老会、1934年）120頁。

²⁴宮内俊三編『日本神学校史』（レバノン会、1991年）239頁。

校が必要となり、その結果、平壤に「聖化神学校」が設立されたのである²⁵。李斗星と李載冕は本来は長老派系の崇実－東北学院－日本神学校の出身であったが、二人とも北部の出身者であったため、この地元の新しいメソジスト系の神学校に参画したと見られる。

周知のように、戦後の北部朝鮮は、ソ連軍の支援を受けた金日成を中心とする共産党の占領下に置かれた。そして、共産党によるキリスト教への監視や敵視が強まると、多くのクリスチャンとその家族が、南部の米軍占領地域へと脱出するようになった。とはいえ、占領開始から数年の間は、共産党もキリスト教勢力と一定の妥協を図っていた。またキリスト教の側も社会主義傾向を持つ人々は、北の政権に期待をかけ、協力する動きも見られた²⁶。このように共産党とキリスト教が共存が可能な政治的空間が確保されていたからこそ、戦後の平壤には「後平壤神学校」が引き続き存続し、さらに「聖化神学校」の新設も認められ、李斗星や李載冕がその教授に就任するようなことも起きていたのである。



『労働新聞』に掲げられた李斗星の論説

しかしながら、この共存関係は長くは続かなかった。1948年9月9日に朝鮮民主主義人民共和国が成立した後は、教会や神学校への弾圧も強まり、1950年3月には、後平壤神学校と聖化神学校が強制的に統合・縮小されて、「平壤基督神学校」となった。そして、その3か月後の6月25日に朝鮮戦争が勃発すると、神学校関係

者は一斉に逮捕され、もはや自由な活動は不可能となった²⁷。ただし、開戦の二日後、北朝鮮の『労働新聞』には、ある「平壤基督神学校」の牧師による「祖国統一のための正義の戦争は必ず勝利する」と題した論説が掲げられた。その牧師とは、いわずもがな李斗星、その人であった²⁸。

結論——今後の検討課題

これまでの検討で明らかのように、戦前の東北学院に学んだ朝鮮人留学生は、留学時期が1920年代半ばから1930年代前半の約10年間に集中し、かつその多くが平壤の崇実学校からの学生であったことに特徴がある。そして、文科に学んだ崇実生3名の内、2名が帝国大学に進学し、母校の崇実学校に教員として戻り、神学部に進んだ2名も、戦後の北朝鮮の神学校教授となるなど、学術・教育界で活躍した人物が多かった。

さらに筆者の最近の調査では、鄭在允が東北学院から東北帝大に進んだ後、崇実学校から東北帝大への留学生が増加していたことも分かってきた。つまり、平壤の崇実学校は、東北学院だけでなく、東北帝国大学ともパイプを築き、有望な学生の留学を後押ししていたと見られる。言うなれば、1920年代半ば以降、平壤の崇実には、「仙台留学ブーム」が生じていたのである。

従って、今後の課題は、東北学院だけでなく、周辺の東北帝大、宮城師範学校などの高等教育機関も視野に入れ、平壤の崇実からの「仙台留学ブーム」が生じた背景をより具体的かつ実証的に明らかにすることである。また、本稿の対象としなかった専門部の師範科や商科、また中学部への朝鮮人留学生の調査も必要であろう。こうした作業を通じて、東北学院の歴史が、単なる自校史や地方史の枠に止まるものでなく、日韓の近現代史、教育史、キリスト教史とも有機的に結びつく「グローバルな」教育機関であったことも見えてくるであろう。

²⁵ 고성은「解放以後 平壤에 設立된 聖化神学校の 歴史」『한국기독교와 역사』第45号、2016年、299頁。なお、以下での聖化神学校に関する事実関係は、特に断りのない限り、この文献に依拠している。

²⁶ 例えば、その代表が、3・1独立運動の際に、牧師として独立宣言に署名した33人の代表の一人である金昌俊である。彼は戦後に自らの意志で北の共産主義政権に協力すべく「越北」した。当然、こうしたクリスチャンは、それ以前からキリスト教社会主義に共鳴していた。例えば、유영렬「基督教社会主義者金昌俊에 對한 考察」『金昌俊回顧録』을『韓國獨立運動史研究』第25号、2005年、177－224頁を参照せよ。

²⁷ 고성은、308頁。

²⁸ 고성은、309頁；『労働新聞』1950年6月27日、3面。

戦前の東北学院専門部の朝鮮人留学生

	氏名	生年月日	出身地	学歴	所属学科	入学/編入学日	卒業/退学	保証人
1	李時雄	1891年5月27日	平安北道定州市 五山面益城里	不明	神学科	1914年2月9日	1917年3月27日	教員 笹尾兼太郎
2	韓鎮興	1900年6月26日	平安南道中和郡 楊井面石陽里	京城高等普通学校 卒1923	専門部文科	1923年4月1日	1924年1月8日退学 1924年4月7日復校 文科に転科 1928年3月10日卒	津田郁 学院教授
3	洪淳鐘	1906年3月9日	慶尚南道昌原郡 鎮東面鎮東里	北京匯文中学 卒1923	専門部文科	1923年9月29日 予科	1926年11月2日 第二学年 除名	銀行員 脇山清助 → 教員 郡山源四郎
4	鄭在允	1903年5月1日	平安南道平原郡 龍湖面葉田里	[崇実中学 卒1920] [崇実専門 卒1924] [永明学校教員 1924.4-25.3]	専門部文科	1925年11月2日 編入	1926年3月21日卒	山川丙三郎 教員
5	金成植	1908年8月8日	平安南道平原郡 龍湖面葉田里	崇実中学 卒1924	専門部文科	1926年4月8日 予科	1930年3月12日卒	教員 駒米秀治
6	金大奉	1904年8月13日	全羅南道済州島 済州面一往里	崇実専門学校 卒1930	専門部文科	1930年4月8日 第四学年に編入	1931年3月11日 第四学年修了	商 永井多三郎
7	李斗星	1914年1月23日	平安南道大同郡 在京里面氷庄里	平壤崇実学校 卒1933	神学部	1933年4月8日 予科 1936年4月8日 本科	1936年3月20日 第三学年修了 1937年4月1日 第二学年にて転学	平壤府 父 李承周
8	李戴冕	1911年2月3日	平安南道龍岡郡 龍岡面芳溪里	平壤崇実学校 卒1933	神学部	1933年4月8日 予科 1936年4月8日 本科	1936年3月20日 第三学年修了 1937年4月1日 第二学年にて転学	平壤府 兄 李載善

松谷 基和プロフィール MATSUTANI, Motokazu

1975年福島県福島市生まれ。国際基督教大学（学士）、東京大学大学院総合文化研究科（修士）、ハーバード大学大学院東アジア文明・言語学科博士課程修了（Ph.D. East Asian Studies）。早稲田大学アジア研究機構助手、東北大学経済学研究科・国際交流支援室付准教授を経て、2016年4月より准教授、のちに現職。専門は日韓近現代史、植民地研究、東アジアキリスト教史。近年の業績としてカーター・エッカート（翻訳）『韓国軍事主義の起源』（慶応義塾大学出版会、2024年）、『民族を超える教会—植民地朝鮮におけるキリスト教とナショナリズム』（明石書店、2020年）、『三・一運動における「キリスト教徒」と「教会」』（歴史評論 第827号（2019年2月））、“US Occupation Policy on Shinto in Postliberation Korea and Occupied Japan,” in Emily Anderson ed. *Belief and Practice in Imperial Japan and Colonial Korea* (Palgrave Macmillan, 2017) など。

Our Trip to Japan and China(3)

－外国伝道局からの来訪者(2)－

東北学院史資料センター客員研究員

日野 哲

はじめに：これまでの経緯

本稿は、1936（昭和11）年の東北学院創立50周年記念の際に、日本と中国を私的に訪れた外国伝道局の3人の女性たちが伝道局の機関誌『メッセンジャー』に約20回にわたって掲載した旅行記“Our Trip to Japan and China”（1936年4月30日～9月24日）をそのタイトルとしたものである。

アメリカ本国からは、合衆国改革派教会（通称「ドイツ改革派教会」、以下「改革派教会」）の外国伝道局を代表して日本と中国の宣教地を視察するため、伝道局長（President）や幹事（Secretary）がたびたび訪れている。本『年報』Vol.6（2021年）では、「Our Trip to Japan and China(1)」として、その中の一人ジェイコブ・G・ルップ（Jacob G. Rupp, 1869–1946）を紹介した。ルップは、幹事に次ぐ職位の巡回幹事（Field Secretary）であったが、三度も来日しているにもかかわらず、『東北学院百年史』（以下『百年史』）には一度も登場していない。ランカスターの福音・改革派歴史協会（Evangelical & Reformed Historical Society, 以下“ERHS”）¹の資料保存室（アーカイヴ）から借用した16ミリフィルムの一つ「東北学院の運動会」に録画されていたことから判明した人物である²。ルップは、院長デイヴィ

ド・B・シュネーダーのアメリカでの募金活動を積極的に支援し、1926（大正15）年の専門部校舎（現在の大学本館）建築では15人の改革派教会員から一人5,000ドル（合計7万5千ドル）を、さらに1932（昭和7）年のラーハウザー記念礼拝堂の献堂に際してはミス・ラーハウザーから5万ドルの寄付を得るのに尽力した経緯は既に紹介したとおりである。

「Our Trip to Japan and China(2)」(『年報』Vol.8、2023年)では、外国伝道局長として初めて来日したジェイムズ・I・グッド（James I. Good, 1850–1924）と、幹事として最初に来日したアレン・R・バーソロミュー（Allen R. Bartholomew, 1855–1933）の二人を紹介した。グッドも『百年史』には全く登場していないが、歴代の伝道局長の中では最長の約30年間（1893–1924）在任し、ウィリアム・E・ホーイと押川方義が東北学院を去った後、シュネーダーの献身的な働きを伝道局の責任者として支え続け、初期の東北学院発展の礎に貢献した人物と言える³。他方、バーソロミューも最も長い34年（1887–1890, 1902–1933）にわたって幹事を務めており、彼の名前は外国伝道局の人物の中では最も多く『百年史』に引用されている。バーソロミューはホーイの中国伝道とシュネーダーの日本での活動とを公平に支え続け、押川が1889（明治22）年に訪

¹ “ERHS”は2025年1月から“E&R Library & Archives”に名称が変更されたが、本稿では従来の名称を使用することとする。

² ERHSから借用した日本関係の16ミリフィルム6巻と幻燈フィルム1本の内容については、『年報』Vol.7（2022年）の拙稿「ランカスターに保存されていた日本関係フィルム」で詳述している。

その中の“A Visit to the Yamagata Kindergarten”（山形の幼稚園訪問）のフィルムは、日本近代建築の父と言われる建築家アントニン・レーモンド（1888–1976）の最初期（1922年）の建築物である山形市の千歳幼稚園（現千歳認定こども園）の映像であることが判明し、2022年9月に山形六日町教会で行われた「山形のレーモンド 100年記念シンポジウム」で上映された。

また、盛岡で活躍したギルバート・W・シュレーヤ宣教師夫妻の生涯を記録した幻燈フィルム“Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers”については、シュレーヤ夫妻の孫でハワイ在住のケン・クレラ氏から照会があり、2023年8月には本学を来訪されるなど、彼との交流が始まっている。

³ グッドの膨大な書籍類が「グッド・コレクション」としてセントルイスのイーデン神学校に保存されている。筆者は2023年3月にランカスター神学校での調査を終えた後、元本学教授の故鐸木道剛氏と共に同神学校を訪問して、このコレクションと対面した。アーキヴィストのスコット・ホール氏が予め作成してくださった日本関係資料のリストの中に押川による英文の“A SKETCH OF THE LIFE OF DENGORO TAKAHASHI”（高橋伝五郎伝）を発見し、その内容を『年報』Vol.9（2024年）に「押川方義の『高橋伝五郎伝』（英文）－イーデン神学校での資料調査から－」として紹介している。

米した際には英文による押川伝 *Won by Prayer; Or The Life and Work of Rev. Masayoshi Oshikawa* (1889年) を自ら書き下ろして出版するなど、本院の三校祖とは最も関りが深い人物である。

続いて外国伝道局からの来訪者として紹介したい人物は、グッドの後任として伝道局長に就任し、本院の創立40周年記念式典に参列したチャールズ・E・クライツ (Charles E. Creitz, 1865–1940)、伝道局からの最初の来訪者で、二度も本院を訪れたアーサー・V・キャッセルマン (Arthur V. Casselman, 1874–1957)、そして本稿のタイトルとした創立50周年の際に来訪した3人の女性たちであるが、今回はキャッセルマンを紹介することにしたい。

アーサー・V・キャッセルマン (1874–1957)

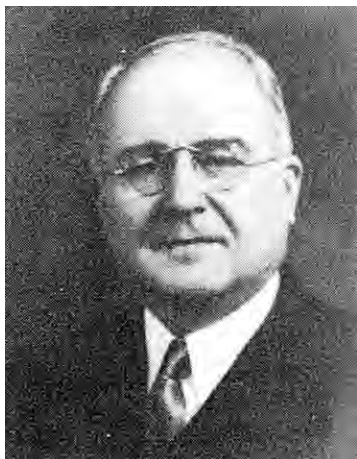


写真1 A.V.キャッセルマン (1938年)

キャッセルマンは、オハイオ州にある改革派教会立のハイデルバーグ大学神学校を1898 (明治31) 年に卒業し、同じオハイオ州のグレイス教会の牧師に就任した。彼は在任中、教会をあげて中国に派遣された宣教師の給与を全額支援するなど、海外宣教活動に精力的に貢献したことから、1902年には外国伝道局の最初の巡回幹事 (Field Secretary) に選任され、その直後に改革派教会の宣教地である日本と中国を訪れた。その後、1906年から1922 (大正11) 年までペンシルヴェニア州のカルバリー教会の牧師を務めた期間を除いては、1944 (昭和19) 年に退任するまでの22年間にわたって改革派教会をはじめ多くの超教派の宣教団体の働きも担った。その間、1933年には死去したバーソロミューの後任として外国伝道局の幹事に就任し、2年後の1935年には幹事として再び日本と中国を訪問している。そして1940年から退任するまでの4年間は福音派教会と合同して新たに形成された福音・改革派教会 (E&R教会) の

国際伝道局総幹事 (Executive Secretary) に選任された (『メッセンジャー』1957年5月21日)⁴。キャッセルマンは、「改革派教会外国伝道局」が日本と中国に最初に派遣した人物であり、また最後に派遣した人物とすることができる。

1. キャッセルマンの来訪 (1)

–1902 (明治35) 年–



写真2 キャッセルマンとシュネーダー (1902年)

キャッセルマンの一回目の来日は、彼が外国伝道局の最初の巡回幹事に選任された翌年である。当時改革派教会在日宣教師団のベテラン宣教師であったミラー (Henry K. Miller) は、『東北教会時報』第16号 (1902年7月31日) の英文ページに次のように記している。

改革派教会外国伝道局の理事会は、目下積極的な活動を展開している。最近の変化の一つは伝道局の働きを支える資金を集めるための財政部門の担当者を選任したことである。現在A.V.キャッセルマンがその任を担っている。(中略) 彼はこの秋に日本と中国を訪れる予定である。その困難な任務で良い成果を得るため

⁴ 二つの教派の合同 (1934年) により海外伝道機関も合同して新たに「国際伝道局」が形成され、それぞれの教派の機関誌も統合されたことについては、本年報Vol.7 (2022年) の拙稿 (7ページ、注2) でも説明している。

に何が必要かを理解するには宣教地の現状をその目で見ること以外にはないからである。伝道局は代表者が公式に日本を訪れることを熱望していたが、キャッセルマンが訪日すれば心からの歓迎を受けることになるだろう。

宣教地に派遣されている宣教師と母国の伝道局との間には、「常に微妙な感情のずれや時には激しいやりとりが繰り返され」ていたことは、以前も述べたとおりである（『年報』Vol.8、49ページ）。伝道局の代表者が宣教の現場を訪れることは双方から熱望されていたことであった。

キャッセルマンは8月28日、休暇で帰米中であった宮城女学校（現宮城学院）校長のズーフル（Lena Zurfluh）と共に横浜港に到着した。軽井沢の宣教師保養所を訪れ、浅間山に登るなどした後、9月3日に仙台に着いた⁵。その後の活動はめざましく、仙台市内をはじめ福島・山形さらに北海道などのすべての宣教地を訪れ、またさまざまな集会にも積極的に出席して交流を深めた。『東北教会時報』は各教会からの報告として、キャッセルマンが訪れた時の集会の様子を聴衆の人数や彼が語った説教のタイトルなどと共に詳細に記録している⁶。

⁵『東北教会時報』第18号（1902年9月30日）の英文ページに記載。

同号には「Tohoku Gakuin」という表題で、当時の普通科（5年制）の志願者状況をミラー宣教師が次のように報告している。

「2学期（秋学期）には多くの志願者があった。下級の学年は定員に達していたため、志願者のほとんどは上級学年への入学希望者であった。5年生の志願者22名のうち13名が不合格となり、普通科の学生数は現在165名で、以下のとおりである。1年生60名、2年生40名、3年生26名、4年生24名、5年生15名。理事会は文科と神学部の徴兵猶予特権の取得に向けて動きを始めている。キャッセルマン幹事は校舎を増築する必要性を強く主張しており、その実現に全力を尽くすつもりである。」

⁶『東北教会時報』第18号（1902年9月30日）～第22号（1903年2月4日）に掲載。

東北学院の状況



写真3 シュネーダー夫妻（1902年）

東北学院は、キャッセルマン来日の前年（1901年）、創立者押川が院長を辞任し、シュネーダーが第2代院長に就任していた。もう一人の創立者ホーイもすでに辞任（1899年）して中国伝道を開始していたので、東北学院の将来は若き院長シュネーダーの双肩に委ねられた。二人の創立者が相前後して学院を去ったことから内部的な動揺も予想される中、1899年に文部省から発せられた「訓令第十二号」による在学生の激減に対する対応も急務であった。すなわちこの訓令により徴兵猶予と上級学校への進学などの特典を持たない東北学院からは、入学した生徒が卒業まで残らず、途中で退学して官公立学校へと移って行ってしまうのである。シュネーダーはこれらの特権の取得に向けて、より良い教育環境の整備、特に新たな校地の取得と新校舎の建設に向けて積極的に動き出す。これには巨額の資金が必要であり、当然ながら伝道局の理解と支援なしにはできない大事業であった。

9月9日、キャッセルマンは院長室で行われた東北学院理事会に陪席した（理事会記録）。冒頭に審議されたのは、校舎の屋根や窓ガラス・ストーブ・畳・襖（ふすま）などの修繕に対する多額の臨時支出であった。当時は明治24年に完成した壮麗な神学校校舎を別とすれば、恒久的な設備は皆無に近かったため、シュネーダーは「現状では適当な教室は3室のみで、残りの7学級は惨めな間に合わせの設備に甘んじている」と、適切な校舎と寄宿舎建設の必要を外国伝道局幹事に再任されたばかりのバー

ソロミューに要望していた（1902年4月9日）。理事会で審議された臨時支出は、これらの「惨めな間に合わせ」の木造校舎の修繕経費と思われるが、キャッセルマンもバーソロミュー宛てに、「東北学院の校舎は素晴らしく、街を彩っているが、寄宿舎や他の校舎は完全に荒廃しており、穀物の貯蔵倉庫（corncribs）と言っても良いくらいである」と報告している（『メッセンジャー』1902年11月6日）。

改革派教会は豊かな階層を教会員とする教派ではなかったが、新たに中国伝道に着手し、またキャッセルマンが来日する半年前に失火から全焼した宮城女学校の校舎を再建することも緊急の課題であった。このような状況の中、シュネーダーはひるむことなく、行動を開始した。就任直後（1901年）には東二番丁に新たな校地を取得し⁷、5月に普通科の徴兵猶予の「認定願」を文部大臣宛に提出（翌年1月認定）、さらに1903年6月には普通科が専門学校への入学資格を取得した。並行して進められた新校舎建築に向けた資金作りは難航を極めたが、1904年6月には着工することができた。全額が伝道局からの支出となった建築費は最終的に約3万ドルとなり、当時東北学院が受けていた経常費補助金（平均年6千ドル）の5倍の巨額であった。さらに言えば、校地と校舎などが設置基準を満たす見通しがついたためか、専門科（文科、神学部）も専門学校令による認定（1904年2月）と徴兵猶予の認定（同年4月）を受けた。

新校舎の着工に際して行われた定礎式の所感として、当時神学部教授であった梶原長八郎は、キャッセルマンの貢献について次のように述べている（『東北文学』第4巻第4号、1904年10月27日）。（以下、本文で引用する資料はできるだけ旧字体を新字体に変えている。）



写真4 建設中の普通科校舎（ERHS所蔵）

「一昨年の秋、キャッセルマン氏日本に來り親しく東北の状況を視察し、我等教育と伝道とに従事せるものを奨励するところありき。氏は東北の教育と伝道との事業の必要なるを認め、帰国の後、我学院のために一層の熱誠を注ぎつつあるなり。「東北学院の教場は馬小屋同様にして誠に見苦し、見よ、三年内には数万円の資金を起こさしめて一大新校舎を建築し、従来の校舎を薪とせん」とは実に氏の一言なりしなり。

こうして普通科の新校舎は着工の翌1905年9月に完成した。全焼した宮城女学校の新校舎も1904年6月には完工していたので、「東二番丁通りを挟んで、二つのキリスト教主義学校の善美を尽くした壮麗な校舎が立ち並ぶさまは、二十年に及ぶドイツ改革派教会の日本伝道の努力が、けっして虚しくなかったことを如実に物語るかのようであった」（『百年史』530ページ）⁸。

宣教地（日本）の状況

キャッセルマンが来日した当時、東北・北海道の教会で組織する日本基督教会宮城中会（以下「中会」）と改革派教会との関係は必ずしも良好とは言えない状況であった。その詳細を記す紙幅はないが、伝道地の選定や伝道者の任免などに関して中会

⁷「5月7日付けのシュネーダーの手紙は、この方針（筆者注：新たな校地の取得）に向けてすでに積極的に動いていることを明示する。シュネーダーは（ほとんど間違いなく、外国伝道局の事前の了解を抜きにして）東二番丁に約1,500坪の校地を、4,750円（2,375ドル）で購入したことを報ずる。理事会記録にこの校地取得が残されていないのは、校地が在日宣教師団の名義で取得されたからである。」（『百年史』480-481ページ）

⁸ 普通科校舎建築が着工され、宮城女学校の新校舎が完成した1904年は、改革派教会の外国伝道開始二十五年に当たり、6月1日から3日間にわたって記念祭が行われた。その二日目の6月2日「午前十時半より東北学院新校舎建築着手式、同日午後三時より宮城女学校新校舎献堂式」が行われた（『東北文学』第4巻第3号、1904年6月27日）。

と在日宣教師団は依然から緊張関係にあった。中会は「現在の協同伝道を廃し、中会施政権確立を計ることになった」(『日本基督教会東北中会史』)⁹として、1898年から1900年までの3年間、一部の伝道地を除いて伝道局からの資金援助を「謝絶」(同上)した。この資金援助が再開されるのはシュネーダーが院長に就任した1901年であり、キャッセルマンはその翌年に来日したことになる。中会は「何等の取り極め(ママ)があったのかは分からない」(同上¹⁰)としているが、在日宣教師団の代表が引き続き毎年の中会に「員外議員」として出席し、1901年の中会では宣教師団が独自に継続した伝道の成果が報告されていることから、両者の関係が実質的には好転しつつあったことがうかがえる。

北海道を巡回

キャッセルマンは、9月18日から約2週間にわたって北海道の教会を巡回した。同行したのは神学部教授のノッス宣教師(Christopher Noss)であった。北海道の諸教会と東北学院とは創立当初から関係が深く、最初の6人の生徒のうち北海道出身の西堀幸八は釧路での教育活動に従事し、橋本宗之進も室蘭や北見での宣教活動を支援していた。橋本が在任した「北見の北光社は、高知の自由民権論者坂本直寛がロシアの南下政策に対する防禦を意識して北海道に入植(筆者注:1897年)し、開拓地として創始したもの」(『百年史』428ページ)であるが、押川自身も前年にロシアの南下を念頭に置いた北海道同志教育会を創設して、北見の湧別原野に学田農場として開墾事業を開始していた。

また、キャッセルマンたちが巡回していた同じ時に、北海道の教会と講義所はそれまで所属していた宮城中会から独立して北海道中会を設立する手続きを進めている最中であった。北海道の宣教は新たな

時期を迎えていた¹¹。

ノッスの旅行記¹²によれば、二人は函館から札幌、小樽を経て羅臼で坂本直寛に面会し、旭川へと北上した。二人は旭川から北東方面に北見と網走に向かい、途中で北光社を訪れたいと願っていた。そこには改革派の13人の信徒と他に求道者もあり、内6人はバプテスマ(洗礼)を受ける備えがあるとの情報があったからである。しかしその距離から大幅に遅延してしまう可能性があるため、二人はやむなく南東方面を選択し、旭川から悪路を帯広へと進み、さらに海岸沿いを馬と鉄道を利用して釧路に着いた。しかし、釧路では数日間嵐のために滞在を余儀なくされた。

ノッスは足止めされた釧路でこの北海道巡回を次のように振り返る。まず出会った多くのアイヌ人の貧困に深い同情を寄せながらも、「アイヌの若者たちがすでに日本語で会話しているのを見て、次の世代への伝道は特別な問題ではなくなるであろう。日本人の移民たちは、予想通り日本国民の中で最も進取的かつリベラルな考えの持ち主であり、キリスト教に対する古い偏見を捨て去っているのので、一度キリスト教徒になれば躊躇なく教会を支援する義務を全うするであろう。さらに人口比で見ると、日本国内では最もキリスト教活動家(Christian workers)が多く、教会は北海道のキリスト教化に多くのエネルギーを注ぐ必要がある。これが日本全体を動かす最も容易で最良の方法であることが証明されるかもしれない。(中略)改革派教会が北海道で新たな出発をする場合、その活動の中心はこの釧路であり、最初の前哨基地(outstations)は北見の北光社と十勝の帯広となるであろう。」(『東北教会時報』第20号、英文ページ)

二人はさらに3日間の過酷な旅を経て、10月3日に仙台に戻った。

⁹ 清水東四郎遺稿、梅津吉之助・成瀬高編著『日本基督教会東北中会史』、1968年、22ページ。「中会」は、1885(明治18)年春に「仙台中会」として発足し、同年11月の第3回日本基督教会大会での加入認可を得て「宮城中会」と改称した。1902年に「北海道中会」が分離独立した後、1919(大正8)年に「東北中会」と改称している。

¹⁰ 同上、23ページ。

¹¹ 宮城中会は1902年10月4日に臨時中会を開催し、北海道教役者会を代表して光小太郎から提出された「北海道中会建設建議案」(同年9月16日付)に同意し、大会へ提出することとした。その後、10月10日に東京新栄教会で開催された第16回日本基督教会大会は、宮城中会書記の佐々木純一と北海道の宣教師ピアソンから事情説明を受け、北海道中会の設立を承認した。建議書によれば、「津軽海峡ヲ以テ内地ト相隔絶シ利害ノ関係亦自ラ内地ト同ジカラザルモノアリ且ツ現在ノ中会内ニ於テハ交通不便ナルタメ彼是相来往スル能ハズ從テ伝道上種々ノ不便ヲ感ズルニヨリ」というのが「理由」であった。

¹² 『東北教会時報』第19号(1902年10月31日)、第20号(1902年12月5日)のいずれも英文ページには、二人の旅行記が詳細に掲載されている。

宣教地（中国）の状況



写真5 W.E.ホーイー家（1897年ころ）

ホーイは東北学院を辞任（1899年）した後、単身で中国に向かったが、清朝末期の混乱した状況にあったことから、一家がようやく合流できたのは1901年（明治34）の暮れであった。彼は湖南省の岳州を伝道拠点に定め、1902年4月1日、すでにその地で活動を試みていた「ロンドン伝道協会の宣教師たちから土地と会堂を購入し、同時に彼らの指導のもとにあった信徒と求道者数名を引き継ぐことになったので、この日がドイツ改革派教会の中国伝道の公式な発足の時」（『百年史』464ページ）となった。ホーイの伝道活動は短期間でめざましい成果を見せ、その年（1902年）の12月には新たに5人の宣教師が中国伝道に加わった。翌「1903年2月15日、外国伝道局の担当幹事アーサー・V・キャッセルマン師の隣席のもとに、12名の会員をもって岳州の教会が初めて組織された」（『ウィリアム・ホーイ伝』197ページ）¹³。新たに始められた中国伝道にはさらに多額の資金と人材が必要であり、キャッセルマンが伝道局を代表して初めて、しかも伝道開始直後に現地を訪れることは双方に大きな意義のあることであった。「その後の二十年間に十二箇所の伝道拠点を開設、四百名を越す会員を有するまでに発展した」（『百年史』465ページ）。

ホーイー家は、この中国伝道の初期でも大きな犠牲を払いながら活動を行っている。それは基督教に敵意を抱く土地で自宅を開放して伝道活動を行う危険や労苦は言うまでもなく、決して清潔ではなく医療体制も貧弱な中での生活も大きな負担であった。まさに中国伝道が開始された1902年の9月18日、7歳のデイヴィッドがコレラに感染してわずか一週間で死去した。ホーイは仙台でも伝道を開始した直後の1889年6月5日に第一子のカールを出産直後に亡くしており、夫妻は日本と中国のそれぞれの伝道開始時期に愛する我が子を捧げたことになる。9月18日はキャッセルマンが北海道巡回に旅立った日であった。

キャッセルマンの書簡

キャッセルマンは帰国後、翌1903年11月1日付で「日本基督教東北伝道者諸兄御中」として書簡を記す（『東北教会時報』第32号、1903年12月26日。以下、要約）。「私はこの2か月の間、アメリカ国内を数千キロ旅行し、あらゆる集会に参加して、日本の伝道者がいかに『忠実熱心敬虔』に仕えているかを語ったところ、日本の伝道者のために祈っていると伝えてほしいとのことであった。そこで私は、各牧師たちに土曜日の夜は祈祷カードを所持して日本の伝道者のために祈ることを約束してもらった。伝道者諸兄よ、『此日を記憶せられよ。土曜日の夜は即ち御地の日曜日の午前に当たり、諸兄が説教せらるゝ時には、此地の篤信なる多数の人々心を合わせて諸兄の為に神に祈りつつあることを記憶せられよ。諸兄が教を宣べらるゝ時、此地の兄弟等が信仰と愛とを以て加勢応援することを意識して説教せられよ。小生も此等の祈念に合わせて我が切なる祈祷を諸兄銘々の為に神にさゝげ申すべく候。』そして、「教を宣べよ！神の賜わる力を以て、更に一步を進めて教を宣べよ」と結ぶ。この『東北教会時報』（第32号）の冒頭には、宮城中会に属する各教会の牧師、宣教師などの住所一覧が掲載されているが、キャッセルマンのアメリカの住所（Pittsburgh, Pa.）も記されている。彼が帰国後も東北の伝道者たちとの深い交流を持ち続け、彼らの期待と信頼に応えようとしていたことがうかがわれる。

¹³ ウィリアム・メンセンディク著、出村彰訳『ウィリアム・ホーイ伝－苦闘の生涯と東北学院の創立』、東北学院、1986年。

2. キャッセルマンの来訪 (2)

—1935 (昭和10) 年—



写真6 左からキャッセルマン、ゴッチ、シュネーダー (1935年)
(Messenger, May 13, 1947)

キャッセルマンが外国伝道局幹事として再び来日したのは1935年であった。東北学院は翌年創立50周年を迎え、シュネーダーは院長を退任することが決まっていた。来日の前年 (1934年)、改革派教会は同じドイツ系移民を母体とする福音派教会と教派合同するが、今回はその福音派教会の外国伝道局幹事ゴッチ (Frederick A. Goetsch, 1882–1947)¹⁴を伴った来日であった。

東北学院の状況

キャッセルマンは1933年11月のバーソロミューの逝去に伴い、その後任として外国伝道局幹事に就任したが、交替してわかったのは、「伝道への熱意の故にせよ、バーソロミューは財政的配慮において十二分に注意深くはなかったということ」(『百年史』752ページ)であった。伝道局本部には、深刻な負債があることが判明し、新任幹事のキャッセルマンはただちに健全財政への立て直しに取りかかった。その第一弾は、宣教師の給与を含む伝道局予算の4割削減であり、就任翌年の1月には東北学院にも1934年度補助金の4割減が通達された。当時経常費の半分以上を外国伝道局からの援助に頼っていた東北学院は、授業料の値上げや経費の削減などでは

到底補いきれないため、大英断をもって教職員の減俸を行うと共に、5月には一年後に迫った創立50周年記念事業として百万円の基本金募金を開始する。しかし、当時の不況下では目標額の達成は極めて難しく、「耐え難き苦痛を忍びつつ之に同意」¹⁵した教職員の中には、このような事態を招いた理事会に対する不満がくすぶっていた。また学生の中にもこの年早々に再び起こった教員の解雇に端を発して、理事会への責任追及を強める動きが再燃していた¹⁶。これらの不協和音は長きにわたるシュネーダー体制への不安と批判でもあった。シュネーダーはしばらく前から理事会でも口にしていた院長としての辞意を6月の理事会で正式に表明し、理事会は9月の理事会で創立50周年記念式を機として受け入れることを決議した。

シュネーダーはこの年 (1934年) を「わが生涯の最悪の年」と呼んでいる。学校の責任者としての苦悩だけでなく、4月には宮城女学校で音楽を教える宣教師として仕えていた長女のメアリを癌のために亡くしていた。すでに77歳を迎えていたシュネーダーは、大晦日にキャッセルマンに宛てて次のように書く (『百年史』755ページ)。

1934年、何という年でしたらう。それは厳しい年でした。何よりも、私自身と家の者らにとって。私たちは愛する者を地上から失いました。それはまた伝道局にとっても、学校にとっても、伝道活動にとっても、前例のない試練の年でした。(中略)

今年はまたあなたにとっても、伝道局にとっても厳しい年だったことでしょう。どれほど厳しかったかは、私たちには推測しかできませんが。あなたの健康が保たれたことを感謝します。また、あなたの賢明で、ビジネス・ライクな、しかし積極的で断固とした姿勢に感謝します。それは日本および中国における神様の事業の将来にとって良いことなのです。

¹⁴ フレデリック・A・ゴッチ (1882–1947) は、セントルイスの出身で、ワシントン大学を経てイーデン神学校を卒業し、オハイオ州の聖パウロ教会の牧師となった。その後、1909年からインドに宣教師として派遣され、1927年からは福音派教会外国伝道局の幹事補となり、その後幹事に就任した。改革派教会との合同後はキャッセルマンと共に宣教師の派遣に関わる業務を担い、1944年にキャッセルマンが国際伝道局の総幹事を退任した後、その後任となった。

¹⁵ 出村悌三郎「母校財政の昨今」『東北学院時報』第111号 (1934年3月1日)。

¹⁶ この騒擾によって解職となった永橋卓介 (神学部講師) については、『百年史』(752–753) に記録されているほか、遠藤健一氏 (東北学院大学名誉教授) の最近の論文「フレイザー『金枝篇』の翻訳者永橋卓介と東北学院 覚書」(『東北学院英学史年報』第46号、2025年3月) に詳述されている。

宣教地の訪問

キャッセルマンは6月8日にシアトル港を出発して、約2か月にわたって中国伝道の現況を視察した後、8月20日に上海から横浜に向かった。約1か月半に及ぶ日本滞在を振り返り、在日宣教師団の一人フェスパーマン (Frank L. Fesperman) は、「キャッセルマン博士の日本訪問は伝道活動にとってどんな意味があったのか」と書き出して、「この問いに答える前に博士が訪問した場所について触れておく」として、次のように報告する(『メッセンジャー』1935年11月28日)。



写真7 盛岡の善隣館を訪問 (1935年)
シュレーヤ宣教師一家等と共に
(The Outlook of Missions, January 1936)

キャッセルマンは、軽井沢から仙台に向かう途中、大宮教会の吉田菊太郎牧師 (1898年神学部卒) を訪問し、夜行列車で会津若松に向かい、亡きノッス¹⁷の自宅や丹忠牧師 (1914年神学部卒) と若松教会を訪問した後、8月30日に仙台に到着した。(筆者注：訪問日と場所等を略記する。)

9月8日(日) 東六番丁教会 (川島専助牧師)、北四番丁教会 (小林龜太郎牧師)、東二番丁教会 (萩原信行牧師)、長町教会 (長谷部俊一郎牧師)

9月9日 仙台の文書伝道活動を視察、宣教師会議に出席、東北中会役員と懇談

9月10日 東北中会の協力伝道委員会に陪席¹⁸、外国伝道局が支援する教会の牧師たちと懇談

9月11～13日 北日本全キリスト教会信徒修養会 (東二番丁教会) にて講演

その後、宣教師と共に山形、秋田、青森、盛岡の各宣教地を訪問し、資産を調査

9月15日(日) 東北学院教会 (筆者注：現仙台広瀬河畔教会) にて説教

9月22日(日) 福島教会 (城生牧師) にて説教¹⁹
その後、ミラー宣教師が東京・埼玉地区の伝道者を招集した会議に出席 (東京)

そして、冒頭の質問 (キャッセルマンの日本訪問の意味) については、次のように記す。「その答えは簡単に言えば、すべてに意味があった (It has meant everything) ということです。私たちは長い間、落胆の日々を送ってきました。伝道活動中にノッス博士が亡くなり、財政面、管理面、さらに将来の方針に関する課題などで私たちは大きな打撃を受け、これまでずっと希望に満ちた見通しはありませんでした。(中略) 多くの問題はまだ解決されていませんが、キャッセルマン博士は『適切な時 (right time)』に『適切なメッセージ (right message)』をもたらしてくれました。彼は『このような時のために (for a time like this)』ふさわしい人物であり、彼が外国伝道局と母国の教会に私たちの活動に関する情報を伝えて、これから直面する多くの課題を解決するための見通しを与えてくれることを確信しています。」

キャッセルマンは、約1か月半にわたって宣教地を巡回し、各地の教会と在日宣教師団からの期待と信頼とを背にして、10月5日に横浜港から帰国した。

¹⁷「会津の使徒」と呼ばれたノッス (Christopher Noss) は、1934年12月31日に青森に在任していた次男のジョージ宣教師宅を訪ねている間に脳溢血で亡くなった。

¹⁸ この委員会で受け取ったと思われる東北中会からの「今後の活動計画と要望」と題する文書 (1935年9月9日付) が、9月22日にラーハウザー記念礼拝堂で開かれた在日宣教師団の年次会議の席上、キャッセルマンから提出されている。中会は、長年の海外の援助からの依存体質を払拭して、財政的・精神的自立を計ることを目的とした「自給十年計画案」を作成 (1931年) して各教会の自給を進めていたが、この時期は在日宣教師団と東北中会とが協力して生み出された東北各地の教会の土地、建物などの財産の所有権をめぐる協議が重ねられていた。

¹⁹ キャッセルマンが福島教会で説教した日付 (9月22日) は、翌週の「9月29日」の誤りであったと思われる。注16にも記したとおり、9月22日にはキャッセルマンとゴッチも同席して在日宣教師団の年次会議が開かれており、フェスパーマン自身も出席している。さらに『東北学院時報』第122号 (1935年12月10日) には、「9月26日、中学部礼拝堂にて来仙中のキャッセルマン博士のために歓迎会を開き」、「9月28日、キャッセルマン博士退仙につき、教職員並に生徒の代表者停車場まで見送りをなす」と記されている。仙台を発った翌日 (9月29日) に福島教会を訪れ、その後東京に向かったと思われる。

東北学院の訪問



写真8 中学部再建校舎



写真9 高等学部の校舎（現大学本館）と礼拝堂

9月6日²⁰、キャッセルマンは33年ぶりに東北学院を訪問した。シュネーダーは、「Dr. Casselman at North Japan College」と題して次のように報告する（*The Outlook of Missions*, Dec. 1935）。

キャッセルマン博士は東北学院（North Japan College）に二度目の訪問をしました。33年前に初めて東北学院を訪れた時の印象と比べておられたようです²¹。今回は最初に中学部の朝の礼拝に出席、礼拝は英語による“Jesus, I live to Thee”の賛美で始まりました。その後、授業を見学し、中学部、高等学部、神学部の三つの建物と敷地を視察しました。

²⁰『東北学院時報』第121号（1935年10月1日）には、キャッセルマンは9月6日に中学部の礼拝に参列し、翌7日に神学部を訪問して、教授たちと2時間半にわたって懇談したと報告されている。

²¹33年前の来訪時、東北学院には神学部校舎以外は間に合わせの木造校舎しかなかったが、今回は東二番丁に中学部の校舎、南六軒丁（現土樋）には高等学部の校舎とラーハウザー記念礼拝堂を目にすることができた。

9月26日に開かれた歓迎会が最大のイベントでした。この日の朝、ラーハウザー記念礼拝堂には1000人の学生と約75人の教師が集まりました。（中略）シュネーダー院長は次のようにキャッセルマンを歓迎し、謝意を表しました。

- (a)外国伝道局の幹事として。本校を献金と関心と祈りによって支え続けている何千人もの教会の男性、女性、子どもたちの代表である。
- (b)友人として。前回の訪問以来33年もの間、あらゆる方法で本校に有益な関心を示してくれた。
- (c)救世主として。ここ数年のキャッセルマン博士の勇敢で賢明な努力がなければ、本校はおそらく悲惨な状況に見舞われていたであろう。
- (d)命名者として。33年前に博士は本校の英語名を“North Japan College”と提案されたが、その後その名称が採用されている。

キャッセルマンは、9月6日の午後3時からシュネーダー院長宅で行われた定期理事会に出席した（理事会記録）。理事会は、翌年の創立50周年記念式に「キャッセルマン博士並に関係ある重（ママ）なる人々に対し是非出席さるよう招待状を発送すること」を決議した。シュネーダーはその後、再三にわたり手紙で出席を要請したが、キャッセルマンは、“I wish I could say, “Yes,” but I am afraid I shall have to say, “No.”と答える（シュネーダー宛手紙、1936年3月9日）。この年、アメリカは厳冬に見舞われ、多くの教会では礼拝もできない状況であった。このような余分な出費のために「1月と2月の献金額は昨年より数千ドル少なくなっている」が、「レント（著者注：四旬節）になれば持ち直してくれることを期待している」と伝え、「自分が東北学院と日本の宣教のためにできる最善のことは、ここに留まり現状を前に進めることである」（同上）として、招待を謝絶した。キャッセルマンに代わって、創立50周年記念式典で外国伝道局を代表して祝辞を述べたのは、私的に訪れた伝道局の婦人であったことは、本『年報』Vol.7（2022）で紹介したとおりである。

神学部廃止との関わり



写真10 神学校校舎

キャッセルマンが出席した9月6日の定期理事会では、神学部合同問題についても議論されたものと思われるが、議事録には残されていない。しかし、『東北学院時報』（128号、1936年11月1日）は「神学部合同問題に就いて」と題する新院長出村悌三郎の次の文を掲載する。

昨年キャッセルマン氏が来朝の際、神学部合同問題について調査し、各方面の意見を徴し、殊に我が学院理事会員並に神学部当局の意見に傾聴した。そして帰米後、出来る丈我々の意見のある処を詳細に説明して、伝道局の諒解を求める様尽力することを約束せられた。

伝道者養成機関として創設された東北学院にとって、神学部を廃止することは極めて重大な決断を要するものであった。しかし、この時期の神学部は東北学院にとっても外国伝道局にとっても、財政上の大きな負担となっていた。このような財政事情は、神学部を抱えていた他のキリスト教学校も同様であり、東京・横浜地区と東北学院の6つの神学教育機関の内部で、協力ないしは合同を念頭に置いた検討がすでに始まっていた（キャッセルマン宛シュネーダーの手紙、1933年6月28日）。そして現実的と思われたのは、もともと同じ神学的背景を持つ日本神学校（現在の東京神学大学）との合同の可能性であった。

キャッセルマンは日本滞在中に、精力的に各方面との接触を計り、「在日宣教師団はもちろんのこと、日本神学校の責任者たちとも十分な意見の交換をなし、一つの結論をもってアメリカに戻り、同年9月の伝道局理事会の審議に臨んだのである」（『百年史』836ページ）。翌1936年3月11日付でキャッセルマンが在日宣教師団代表のゾーグ（Elmer H. Zaugg）に宛てて書き送った伝道局の決議が、上に引用した出村悌三郎の「神学部合同問題に就いて」の中に次のように記録されている。すなわち合同問題に関する得失などを慎重に検討した結果、伝道局は「現在は東北学院神学部が日本基督教会所属日本神学校と合同するを以つて賢明にして機宜に適せる時期なり」として、キャッセルマンが本件に関する伝道局の決定を在日宣教師団に説明し、かつ「ミッション（筆者注：在日宣教師団）より東北学院理事局に対し、同局が時機を見て可成近き将来に於いて東京の日本神学校と合同する事を考慮する様懇懇すべき事を要求」した。東北学院理事会は同年7月21日の臨時理事会で合同を承認し、神学部は1937年3月をもって廃止されることとなった²²。キャッセルマンがこの合同に際して果たした役割は極めて大きかったと言える。

²² 神学部は東北学院の創設以来、南町通りの校舎（仙台神学校校舎）で講義を行っていたが、1934年9月からは南六軒丁（現土樋）の敷地内にあった宣教師館（ブラッドショウ館）に移転していた。南町通りの校地と校舎は1939年12月の理事会決定によって、日産海上保険に売却することが決定され、代金から10万円が前に記した創立50周年記念の百万円の基本金募金に組み込まれた。

3. キャッセルマンに関わる資料

(1) 1902年に撮影された写真（アルバム）



写真11 ミッション・アルバム（6冊）

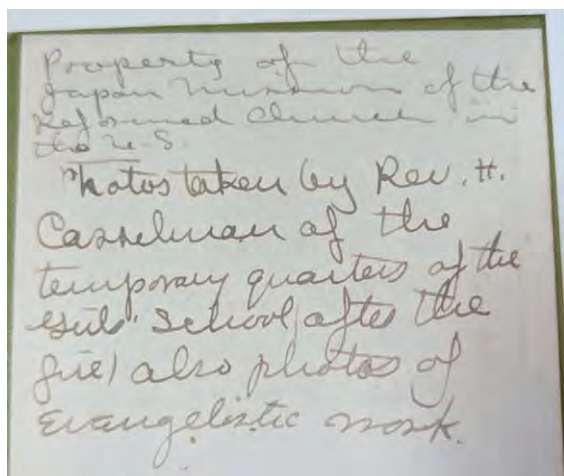


写真12 アルバム「Book I」裏表紙のサイン
(Property of the Japan Mission of the Reformed Church in the U.S. Photos taken by Rev. A. Casselman of the temporary quarters of the Girls' School after the fire also photos of Evangelistic work.)

当センターには膨大な数の写真類が保存されているが、その中に本来は在日宣教師団が保存していたと思われるアルバムも残されている。筆者は本院の創立100周年（1986年）当時、その記念行事を担当する部署に所属し、『百年史』や『東北学院の100年』（写真誌）の編纂にも携わっていたので、それらの写真にも目を通しており、実際に写真誌にも引用し

ていたが、今回この原稿を執筆するに当たってあらためてその中にキャッセルマンが1902年の最初の来日の際に撮影し、その後在日宣教師団が保存したアルバム6冊（Property of the Japan Mission of the Reformed Church in the U.S.）を確認することができた。その中には、宮城女学校の校舎の焼け跡や仙台神学校の校舎、キャッセルマン自身と院長に就任直後のシュネーダー夫妻（写真2・3）、来日の前年（1901年）に神学校校舎に隣接して新築された壮麗な仙台教会の礼拝堂（写真13）、東北各地の教会を訪れた際の記念写真などが収められている。

前にも引用した『メッセンジャー』（1902年11月6日）には、キャッセルマンが仙台の状況を次のように報告している。



写真13 南町通りに面した仙台教会（右）と神学校校舎（左）（1902年）

写真では馴染みの深いミッションの宣教地訪問を待ちわびていた。（火災で）荒廃した土台だけが今や宮城女学校の校舎があった場所を示している。東北学院の校舎は素晴らしく、街を彩っているが、寄宿舎や他の校舎は完全に荒廃しており、穀物の貯蔵倉庫（corncribs）と言っても良いくらいである。しかし、新しい（仙台教会の）礼拝堂については、これほど美しいとは思ってもみなかった。教会を見に来る日本人は畏敬の念におそわれるであろう。（丸カッコは筆者の補記）

各地の教会の写真は人物が中心で、多くは看板などの場所を推定できる物が写っていないが、いずれ各教会の記念誌を参考にして、当時の在任牧師や信徒の写真などから教会名を特定したいと願っている。

(2) ハーバート・H・キャッセルマン宣教師



写真14 H.H.キャッセルマン夫妻
(*The Outlook of Missions*, June 1909)

『東北教会時報』には、第103号（1909年12月）から第139号（1912年12月）まで「キャッセルマン」という宣教師が登場する。誌面には「キャッセルマン」とだけ表記されているため、当初は本号で紹介したアーサー・V・キャッセルマンが7年の時を経て今度は宣教師として着任したのかと勘違いしたが、『改革派教会外国伝道五十年史』²³には、1909年に日本に派遣されたハーバート・H・キャッセルマン（Herbert H. Casselman）と妻アダ（Ada Casselman）の名前が記録されている。これらの「キャッセルマン」がどのような関係にあるかはこれまで知ることはなかったが、今回の調査でハーバートはアーサーの兄弟であることがわかった²⁴。アーサーは1906年から1922年まで伝道局の職務からは離れていたため、兄弟ハーバートの日本派遣には直接関与してはいないが、宣教師としての召命や日本での宣教に関しては大きな影響を与えていたと思われる。

²³ *Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States 1877-1927*, 1927

²⁴ 『メッセンジャー』（1957年5月21日）には、アーサーの死亡記事が掲載されているが、その文末には次のように記されている。

“Surviving are his widow and a daughter. Dr. Herbert H. Casselman, retired, of Tiffin, Ohio, is a brother.”

ハーバートは在日宣教師団の書記や財務を担当し、仙台をはじめ福島や山形の教会で活動したことが記録されている。しかし、わずか数年で退任して帰国している。その理由について、在日宣教師団は1913年10月15-16日に開催された秋の定期会議で、ハーバートの書記辞任と医療費の支給を承認した後、彼の帰国に関する次のような声明を採択する。すなわち、「キャッセルマン氏は健康回復に懸命に努力したが、5人の著名な医師によってできるだけ早くアメリカに帰国することが必要であると判断されたため、不本意ながら受け入れることとした。」しかし、「キャッセルマン氏は何らかの母国での海外宣教活動に従事することで、この国での経験を生かす機会が得られることを希望する。したがって、我々は彼を伝道局の書記補（Assistant Secretary）か伝道局の活動に関連する仕事に就任することを推薦する。」

同年11月26日開催の伝道局常任委員会は、在日宣教師団からの推薦を受けて、伝道局とハーバートの今後の関係を審議することを決議した（バーソロミューからゾーグ宛の報告書）。前述の『改革派教会外国伝道五十年史』には、ハーバートの職務を“Business Administration”と記録している。また以前本年報第8号（2023年）で引用した改革派教会100周年記念パンフレット「One Hundred Years World Service」（1938年）には、当時の伝道局のスタッフの一員として、ハーバートは“Field Secretary”（巡回幹事）と紹介されている。

おわりに

キャッセルマンは、外国伝道局から最初に派遣された人物であり、また改革派教会からは最後に派遣された人物であった。さらに一回目の訪問（1902年）はシュネーダーが院長に就任した直後であり、二回目の訪問（1935年）はシュネーダーが院長を退任する直前であった。いずれも、東北学院をはじめ国内の各宣教地は深刻な課題を抱えていた時であったので、キャッセルマンの訪問は適切なタイミングであったと言える。本稿は、彼が精力的に現地を視察して関係者と深い信頼関係を築き、それらの課題に誠実に向き合って解決に導いたことを記録に留めたいと願ったものである。

この他にも、キャッセルマンには最初の来日中(1902年)に日本で執筆し発行された *Japanese Churches* (『日本教会』) という25ページほどの小冊子²⁵と、二回目の訪日の翌年(1936年)に執筆した *The End*



写真15 *Japanese Churches* (『日本教会』) (国立国会図書館所蔵)

²⁵ Arthur V. Casselman, *Japanese Churches*, Kaneko Memorial Press, 1902.

表紙には『日本教会』という日本語のタイトルが表記されており、印刷は東北学院労働会の「金子記念(ママ)印刷所」で行われている。明らかに伝道局を支援する本国の教会員に向けて書かれたものであるが、キャッセルマンは1902年12月12日付の前書きで、この小冊子の発行の目的を日本の教会の建物の現状を知らせること、この状況を改善する必要性を示すこと、そして教会で「神の金」(God's gold)を管理する方々がその罪を開く素晴らしい機会を提供することの三つであると述べている。本文ではいくつかの教会の会堂を写真入りで紹介しながら、アメリカの支援者の献金が日本の教会の会堂建築ではいかに有効に用いられるかが説明されている。「表紙のデザインは郡山講義所の讃美歌にあったもので、信徒の一人が製作した芸術的作品である。ハーフトーンの銅板は、我らの教派の教会の新聞を印刷している福音印刷によって作成された」と紹介されている。

of the Beginning という約200ページの書物²⁶がある。いずれもキャッセルマンがその見識と視察した内容を基に記述したものであり極めて興味深い資料であるが、これ以上の言及は断念する。

次は、本院の創立40周年記念式典に参列した外国伝道局長クライツと、本稿のタイトルとした創立50周年の際に来訪した女性たちを紹介したい。

今回も本稿の執筆に際して、当史資料センターの熊坂大佑氏と奈良輪俊幸氏に多大なる協力をいただいたことに謝意を表したい。

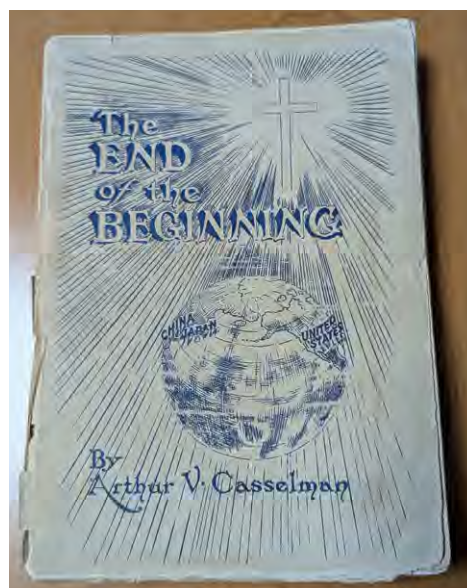


写真16 *The End of the Beginning*
(東北学院史資料センター所蔵)

²⁶ Arthur V. Casselman, *The End of the Beginning*, Heidelberg Press, Philadelphia, 1936.

キャッセルマンは「序文」の中で次のように記す。(以下、その概要)

「今やキリスト教会の宣教は一つの時代の終わりを迎えている。そしてこの時代の終わりは前例のない偉業を達成する新たな時代の始まりでもある。改革派教会(The Reformed Church in the United States)と福音教会(The Evangelical Synod of North America)は、その個別の存在に終止符を打ち、すべてのものを統合して、新たに福音改革派教会(The Evangelical and Reformed Church)を発足させた。本書はそれぞれの教派のこれまでの宣教活動を振り返り、新たな教派として何を引き継ぐかを知るための情報を提供したいとの意図をもって書かれたものである。」

本文では改革派教会の日本と中国での伝道の歴史とその成果を辿りながら、「これまでの“Foreign Missions”の時代は終わり、今や“International Missions”としてさらに宣教を拡大する時が始まった」と結んでいる。

日野 哲プロフィール

HINO, Satoshi

1949年生まれ。東北学院大学文学部英文学科卒業。1972年東北学院勤務。大学総務部長をもって2015年3月定年退職。同年4月から東北学院史資料センター調査研究員、2022年4月から同客員研究員。

E・H・ゾーグがみた鈴木義男の姿 ーゾーグが残した写真・伝記を中心にー

東北学院史資料センター

奈良輪 俊幸

はじめに

鈴木義男については、東北学院史資料センター客員研究員である仁昌寺正一氏によるものをはじめとした数多くの研究が積み重ねられてきた。2006（平成18）年の『大正デモクラシーと東北学院ー杉山元治郎と鈴木義男ー』の刊行以後、長年鈴木の実像を追い求めてきた仁昌寺氏の研究成果は、2023（令和5）年刊行の『平和憲法をつくった男 鈴木義男』に集約されているといえよう。鈴木の仕事、および主要な研究史は同書を参照されたい¹。

仁昌寺氏はこれまでの研究で、1912（明治45）年3月に東北学院普通科を卒業し、同（大正元）年9月から1915年7月まで仙台市の旧制第二高等学校に在学した鈴木の実生活や学業成績、クラブ活動における学内外での活躍、そして大正デモクラシーへの関心の高揚を明らかにしてきた。仁昌寺氏によれば、鈴木は自身の生活費だけでなく、東北学院に入学した二人の弟の学費をも工面するため、日本の新聞・文献を英訳するアルバイトなどを行う「ヘルパー」として、東北学院神学部教授のW・G・サイプルや在野の宣教師のA・H・ブラッドショウ²をは

じめとした、在仙のアメリカ人宣教師たちのもとで働いていた。和文英訳の専門的能力を有するとみなされた「ヘルパー」には、前途有望な青年に対する支援という名目で、教師や宣教師たちから当時の一般的なアルバイトの水準よりも高い報酬が支払われており、このことが鈴木にとって、生活費を確保するだけではなく、自身の英語力を向上させるための修練の機会にもなっていたという。

ところで、筆者は前稿の執筆に前後して、「ドイツ改革派教会」から日本に派遣されたアメリカ人宣教師で、1906年から1942（昭和17）年までのおよそ30年にわたり、東北学院教授として勤務したE・H・ゾーグ（Elmer Harry Zaugg。以下、単にゾーグと呼称し、その家族はファーストネームで呼称する）について調査する機会を得た³。その調査の過程で、図らずも第二高等学校在学中であった鈴木とゾーグを結び付ける資料に巡り合うことになった。

そこで本稿では、これまで検討されてこなかった写真と文献資料を用い、鈴木と第二高等学校在学時代を中心に、鈴木とゾーグの関係について検証していく。

¹ 仁昌寺正一「鈴木義男」（東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編『大正デモクラシーと東北学院ー杉山元治郎と鈴木義男ー』東北学院、2006年）。仁昌寺正一『平和憲法をつくった男 鈴木義男』筑摩書房、2023年。本稿の鈴木に関する記述は、特記のない限り上記の論文・著書に依拠している。なお、本稿執筆に際し、仁昌寺氏と、同じく当センター客員研究員の雲然祥子氏からご教示を受けることができた部分に関しては、その旨を明記している。

² Annie Hammond Bradshaw（1852-1929）は、アメリカン・ボード（この頃は主に会衆派（組合派）による団体で、東北学院などへ宣教師を派遣した「ドイツ改革派教会」の外国伝道局とは別の団体）が日本に派遣した宣教師。1889（明治22）年の仙台赴任以降、1922（大正11）年に隠退帰米するまでの34年間同地に留まって伝道活動を行った。市内の諸学校などで熱心に伝道し、青年たちに大きな感化を与えた（日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、P1234）。

³ 奈良輪俊幸「『東北学院校歌』の作成経緯と歌詞表記の変遷ー新出の「東北学院校歌楽譜」の紹介を兼ねてー」（『東北学院史資料センター年報』Vol.8、東北学院、2023年）。以下、ゾーグに関する記述は、特記のない限り本稿「表 E・H・ゾーグ略年譜」に依拠している。

表 E・H・ゾーグ (Elmer H. Zaugg) 略年譜

年 代	事 項	出 典
1881 (明治14) 年	10月14日、アメリカ合衆国オハイオ州ウェイン郡マウント・イトン生まれ	
1896 (明治29) 年	9月、アメリカ合衆国ハイデルベルクアカデミー (日本の旧制高等学校相当) 入学	
1897 (明治30) 年	6月、ハイデルベルクアカデミー卒業	
1899 (明治32) 年	9月、アメリカ合衆国ハイデルベルク大学入学	
1903 (明治36) 年	6月、ハイデルベルク大学卒業。9月、ハイデルベルク神学校 (日本の大学院相当) 入学	
1906 (明治39) 年	4月、ハイデルベルク大学神学校卒業。この頃ニーナ・カンティエニー (Nina Cantieny) と結婚。「ドイツ改革派教会」の外国伝道局の任命により宣教師として9月22日に来日。12月、東北学院専門部教授就任。神学のほか、英語・音楽も教えた。ピアノ・オルガン・バンジョーなどの楽器が演奏でき、音楽に堪能だったこともあり、グリークラブの指導にも当たる	【1】
1910 (明治43) 年	4月～翌1911年9月の間、山形伝道のため東北学院専門部教授を「一時辞職」	【2】
1914 (大正3) 年	「ドイツ改革派教会」の外国伝道局の許可を得て一時帰米。7月1日に仙台を、3日に東京をそれぞれ出発。9月、シカゴ大学神学部入学	【3】
1916 (大正5) 年	5月、シカゴ大学神学部を修了し哲学博士号 (Doctor of Philosophy) を取得。9月に再び来日し、東北学院専門部教授に再任。また財務理事を兼任	【4】
1921 (大正10) 年	6月頃、《東北学院校歌》作成に作詞・作曲者として関与	
1923 (大正12) 年	東北学院専門部神学科長就任。2月から「休養」のため一時帰米	【5】
1924 (大正13) 年	8月に再来日。東北学院専門部神学科長に再任	【6】
1925 (大正14) 年	8月に専門部神学科が神学部として分離独立したことに伴い、東北学院神学部教授・神学部長に就任したとみられる	
1927 (昭和2) 年	「神学部騒擾」事件によって東北学院神学部教授を一時辞任し7月6日までに帰米。ハイデルベルク大学で宗教教育学教授就任	【7】
1930 (昭和5) 年	再び来日し、10月に東北学院神学部教授・神学部長に再任	
1936 (昭和11) 年	5月、東北学院第3代理事長就任	
1937 (昭和12) 年	3月、東北学院神学部が廃止され、日本神学校 (現東京神学大学) と合同となるのに伴い、4月に東北学院神学部長に替わって高等学部長に就任。8月上旬～翌1938年9月16日の間、恩賜休暇のため一時帰米	【8】
1940 (昭和15) 年	9月、日米情勢緊迫につき、理事長・高等学部長辞任。引き続き財務を担当	【9】
1941 (昭和16) 年	同志社女子専門学校 (現同志社女子大学) 栄光館に設置されるパイプオルガンの組み立てに主任として関与。1か月以上をかけて2月22日までに完成。12月、真珠湾攻撃により日米が開戦すると、敵国人として日本当局に妻とともに身柄を拘束される	【10】
1942 (昭和17) 年	6月、アメリカ合衆国に送還。その後バージニア州アーリントン郡に居住し、公務員となる	
1946 (昭和21) 年	「福音・改革派教会」(「ドイツ改革派教会」は1934年に北米福音教会と合同) の国際伝道局に再来日を申請するが、ゾーグ夫妻の年齢と健康上の問題のため慰留される	【11】
1957 (昭和32) 年	76歳で公務員を退職	
1965 (昭和40) 年	この頃、アメリカ合衆国カリフォルニア州ラグーナ・ヒルズに転居	【12】
1971 (昭和46) 年	2月6日に死去。90歳	【13】

※ 前掲註3拙稿P62掲載の略年譜を『百年史』、Harold E. Zaugg, "Sensei the ultra American : from missionary teacher to wartime translator" Sunflower University Press, 1995、当センター所蔵のE・H・ゾーグ履歴書の記述に基づきつつ、以下の文献によって加筆・修正した。なお、本稿の目的上、ゾーグが離仙・帰仙した時期が分かる部分を具体的に記載している。

【1】秋保孝蔵「神学部の思い出」(花輪庄三郎編『東北学院創立七十年史』東北学院同窓会、1959年、P613～622)

【2】「東北学院だより」(『東北教会時報』第106号、教会時報社、1910年3月、6面)。「東北学院だより」(『東北教会時報』第124号、1911年9月、教会時報社、6面)

【3】「東北学院だより」(『東北教会時報』第157号、教会時報社、1914年6月、6面)。E. H. Zaugg, 「FAREWELL MESSAGE」(『東北教会時報』第158号、教会時報社、1914年7月、8面)

【4】「雄報 東北学院だより」(『東北教会時報』第183号、教会時報社、1916年8月、7面)

【5】「専門部通信」(『東北学院時報』第49号、東北学院同窓会、1923年3月、1～2面)

【6】蒔田「寿」『母校教職員近況』(『東北学院時報』第57号、東北学院同窓会、1924年12月、2～3面)

【7】蒔田「寿」『雄報』(『東北学院時報』第73号、東北学院同窓会、1927年11月、3面)

【8】三品鼎「ザウグ先生送別会」(『東北学院時報』第132号、東北学院同窓会、1937年7月、4面)。田口泰輔「母校近事 中学部」(『東北学院時報』第141号、東北学院同窓会、1939年1月、2面)

【9】「ザウグ先生の辞任について」(『東北学院時報』第152号特別号4、東北学院同窓会、1940年、3面)

【10】湯浅永年「日本のオルガン」(3)「同志社栄光館」(『礼拝と音楽』第4巻第4号、日本基督教団出版部、1958年)。大下尚一「昭和前期の国際交流」(上野直蔵編『同志社百年史 通史編二』同志社、1979年)

【11】E. H. Zaugg, 「Intelligence from America」(『東北学院新聞』東北学院専門部新聞部・東北学院中学校文芸部、1947年9月)。「東北学院新聞」は当センター所蔵(複製)

【12】「ゾーグ先生の近況」(『東北学院時報』第199号、東北学院同窓会、1965年2月、8面)

【13】月浦利雄「ザウグ先生を偲んで」(『東北学院時報』第257号、東北学院、1971年3月、2面)

第1章 鈴木義男とゾーグ一家集合写真

第1節 写真の概要

まずは、鈴木が捉えられた1枚の写真を紹介する（【写真】）。



【写真】鈴木義男とゾーグ一家集合写真
(東北学院史資料センター所蔵)

この写真は、1986（昭和61）年に創立100周年を迎えた東北学院の記念事業の一環であった『百年史』⁴の編纂を目的として、1981年に設置された東北学院百年史編集委員会によって収集されたものの一つで、現在は当センター所蔵となっている。【写真】を含む写真資料群は、ゾーグの旧蔵資料とみられる⁵。

【写真】の裏面の支持体部分には、複数回貼付と剥離が繰り返された痕跡として、アルバムに由来するとみられる繊維片が固着しており、裏書といった、本来存在したかもしれない文字情報を読み取ることはできない。また、支持体上部に開いた二つの小孔は、【写真】が画鋏で壁やコルクボードに留められた状態で飾られていた時期があることを窺わせる。

写っている人物は、前列左からゾーグ長女ミルドレッド⁶、ゾーグ長男デイヴィッド⁷、後列左から鈴木、ゾーグ、ゾーグ夫人のニーナ⁸の計5名である。撮影場所は不詳だが、写っている人物の主要構成員がゾーグ一家であるため、当時仙台市北二番丁にあったゾーグ邸の庭園である可能性がある⁹。

【写真】と同様のものが鈴木の手元にも残されたとみられ、鈴木逝去をきっかけに刊行された伝記には、「中学時代」のものとして掲載されている¹⁰。しかし、果たしてこの判断は妥当であろうか。

第2節 撮影の年代

撮影年代については、鈴木が制服を着ていることから、ひとまず東北学院普通科・第二高等学校在学時代の1907（明治40）年4月から1915（大正4）年7月までの期間に限定できる。ここから更に年代を絞り込むためには、鈴木制服の服飾、およびゾーグ夫妻の子女二人の推定年齢が手掛かりとなる。

まず、【写真】の鈴木制服は、東北学院普通科在学中の制服¹¹とはボタンの形状・色が異なる一方、第二高等学校在学中の制服¹²と比較すると、生

⁶ Mildred Zaugg Chamberlin(1911-2014) は、5月8日にゾーグ夫妻の第二子として東京で出生(W. G. S.[サイブル]「Here and there」(『東北教会時報』第121号、教会時報社、1911年6月、8面)。『東北教会時報』は当センター所蔵(複製)。「Mildred Zaugg Chamberlin」(『Find a Grave』2024年12月閲覧、<https://www.findagrave.com/memorial/126463850/mildred-chamberlin>)。

⁷ David Jerome Zaugg(1908-1993) は、8月21日にゾーグ夫妻の第一子として「Karuizawa」(現長野県北佐久郡軽井沢町)で出生。(T. I.[五十嵐正]「Here and there」(『東北教会時報』第89号、教会時報社、1908年9月、8面)。「Dr David Jerome Zaugg」(前掲註6Webサイト、2024年12月閲覧、<https://www.findagrave.com/memorial/1359058/david-jerome-zaugg>)。

⁸ Nina Cantieny Zaugg(1883-1978) は、アメリカ合衆国オハイオ州生まれ。1906年にゾーグと結婚・来日している(「Nina Cantieny Zaugg」(前掲註6Webサイト、2024年12月閲覧、<https://www.findagrave.com/memorial/190129546/nina-zaugg>)。

⁹ エル・デー・アダム『The Japan Directory』増補訂正第47版、ジャパン・ガゼット新聞社、1914年、1868年初出、P142。国立国会図書館デジタルコレクションにて2024年12月閲覧。

¹⁰ 鈴木義男伝記刊行会編『鈴木義男』鈴木義男伝記刊行会、1964年、「修学時代」掲載口絵。

¹¹ 「東北学院普通科低学年時の鈴木義男」(前掲註1仁昌寺著書、P29掲載写真)。

¹² 「二高時代の鈴木義男(1913[大正2]年頃の家族写真)」(前掲註1仁昌寺著書、P46掲載写真・P47掲載写真)。

⁴ 本稿では、東北学院百年史編纂委員会編『東北学院百年史』東北学院、1989年、東北学院百年史編集委員会編『東北学院百年史 資料篇』東北学院、1990年、東北学院百年史編集委員会編『東北学院百年史 各論篇』東北学院、1991年、および東北学院創立100周年記念百年史編集委員会編『東北学院の100年』東北学院、1986年を指す。以下、当該図書は『百年史』のように略記する。

⁵ 当該写真資料群の構成や来歴などについては、別稿を期す予定である。

地の色合いやボタンの形状・色が類似している。ここで、当時の両校の制服に関する規則について確認しよう（旧字体は新字体に直した。傍線、傍註は筆者による。なお、紙面の割付けの都合上、一部字間を調整した）。まずは、東北学院普通科についてである。

普通科

[中略]

服制

- 一、本学院普通科生徒ハ本学院規定ノ制服制帽ヲ着用セザレバ何レノ課業ニモ出席スルヲ許サズ但シ疾病其他ノ事故ニヨリ和服着用ノ許可ヲ得タル者ハ此ノ限りニアラズ尤モ和服着用ノ際ハ必ず袴ヲ着用スベシ
- 二、級長若シ和服着用ヲ許可シタル場合ニハ其旨ヲ出席簿ニ揭示スベシ
- 三、制服地質ハ随意ナレドモ色合ハ冬期ハ紺色夏期ハ鼠霜降トス
- 四、夏服ハ六月一日ヨリ九月三十日マデ冬服ハ十月一日ヨリ五月三十一日マデ着用スルモノトス但シ疾病其他ノ事故ニヨリ制服ヲ着用シ得ザル場合ニハ其事由ヲ具シ予メ期間ヲ定メ保証人連署ノ上級長ニ願出デ許可ヲ受クベシ¹³

続いて、第二高等学校についてである。

○第四章 規則

[中略]

第五款^[款] 授業料及被服

[中略]

第五十四条 生徒ハ自費ヲ以テ本校制定ノ被服ヲ調製着用スヘシ但シ新入生徒ハ九月二十日迄ニ制帽ヲ同月三十日迄ニ制服ヲ着用スヘシ

制服図

一帽	仏蘭西形	色黒	地質絨	徽章蜂
一衣	脊広形	色黒又ハ紺	地質絨若クハ小倉織	
一袴		色地質共ニ衣ニ同シ		

一外套	色黒又ハ紺	地質絨	
一略服	脊広形	色霜降	地質小倉織
一略帽	麦竿製	黒色ノ縁ニ二条ノ白線	ヲ施シ徽章ハ必ス全面
		ニ附スヘシ	

一釦 金色円形内蜂章ヲ附ス

一日覆 白薄布

一襟章 金色数字

[図版略]¹⁴

第二高等学校の規則には「釦 金色円形内蜂章ヲ附ス」とある一方、東北学院普通科の規則にはボタンの形状・色の指定はない。【写真】の鈴木 of 制服のボタンの形状・色は第二高等学校の規則にある特徴と一致するため、1912年9月から1915年7月までの間である可能性が高い。また、戦前の学生服には、淡色の霜降り生地のを夏服、濃色の黒小倉生地のを冬服として用いたことが知られている¹⁵。東北学院普通科の場合も「色合ハ冬期ハ紺色夏期ハ鼠霜降トス」と定められており、他の事例と共通することが分かる。当時の第二高等学校の制服は「色黒又ハ紺」「地質絨若クハ小倉織」の「衣」が冬服、「色霜降」「地質小倉織」の「略服」が夏服であったと考えられ、【写真】の鈴木 of 制服はその夏服の特徴と一致する。加えて、足元や背景に写っているシロツメクサ・イチジクとみられる植物が葉を付けていることから、秋や冬の時期である可能性は低く、初夏から晩夏までに撮影されたものであるといえよう。

続いて、ゾーグ夫妻の子女二人の推定年齢についてだが、当センター調査研究員・客員研究員4名にご意見を伺ったところ、デイヴィッドが4～6歳頃、ミルドレッドが2～5歳頃との結果となった¹⁶。こ

¹⁴『第二高等学校一覧 自大正元年至大正二年』第二高等学校、1912年、P73、P95～98。国立国会図書館デジタルコレクションにて2024年12月閲覧。

¹⁵難波知子『近代日本学校制服図録』図書印刷、2016年。

¹⁶いずれの調査研究員・客員研究員にも、最初はデイヴィッド、ミルドレッドの生年を伏せた状態で伺った。齋藤誠・伊藤大介両調査研究員からは、デイヴィッドが5～6歳頃、ミルドレッドが3～4歳頃（2歳ではなさそう）、藤野雄大調査研究員からは、デイヴィッドが小学校低学年頃、ミルドレッドが4歳頃、日野哲客員研究員からは、デイヴィッドが4～5歳頃、ミルドレッドが2歳になったばかりの頃に見えたとご回答いただいた。また、いずれの方も、ミルドレッドが1歳には見えないとのことであった。

¹³『私立東北学院一覧』東北学院、1911年、P36、P53～54。当センター所蔵。

これらの条件に合致するのは、1912年8月から1916年7月までの間となる。さらに、ゾーグは1914年6月25日には帰米を予定していることを公表し¹⁷、7月1日に仙台を、3日に東京をそれぞれ離れてアメリカに向けて出発した。これは鈴木第二高等学校在学期間とも符合する。したがって、【写真】の撮影年代は1912年9月から1914年6月末までの初夏～晩夏の期間であることは間違いない。

それでは、この期間に鈴木とゾーグ一家が写真を撮影する機会となる行事は、一体何であったのだろうか。ここで、もう一度鈴木とゾーグの服飾に注目すると、左腕に濃色の腕章を着けていることに気付く。この腕章は、いつ、どのような理由でつけられていたのだろうか。類似の腕章を着けた鈴木とゾーグの姿は、前掲誌12前者の写真と、以前仁昌寺・雲然両氏が紹介した写真「クラブ卒業生送別会 大正二年五月廿三日」で確認できる。当該写真は、第二高等学校の有志により結成された団体である忠愛之友倶楽部で活動する鈴木とゾーグの初期の姿を捉えたもので、現在は東北大学史料館の所蔵となっている¹⁸。東北大学史料館は、このほかの忠愛之友倶楽部関係写真についても「史料館コレクション 大学関係写真」で公開しているが、そのなかから濃色の腕章を着けている人物を確認することはできなかった¹⁹。このことから、濃色の腕章は、忠愛之友倶楽部の寮生であればいつでも、誰でもつけていたものではなく、1913年5月頃の時期に限りつけられていたという推測が成り立つ。ごく限られた期間のみ装着される濃色の腕章としては、喪章を想定することができる。しかし、この腕章を喪章だと仮定しても、当該期に鈴木とゾーグが服喪すべき人物の訃報は確認できなかった。

¹⁷「ゾウグ氏の帰米を送る」(『東北教会時報』第157号、教会時報社、1914年6月、1面)。

¹⁸仁昌寺正一・雲然祥子「鈴木義男に関する新資料(その2)」(『東北学院史資料センター年報』Vol.6、東北学院、2021年、P32掲載写真)。忠愛之友倶楽部については当該論文および前掲誌1仁昌寺著書、P52～54を参照されたい。

¹⁹『東北大学総合知デジタルアーカイブ』2024年12月閲覧、<https://touda.tohoku.ac.jp/collection/database/archives/collection/photo>。現在キーワード「忠愛之友倶楽部」と検索すると82点が該当する。

以上、【写真】の撮影年代は、1912年夏頃から1914年6月下旬までの初夏～晩夏の期間に限定することができ、鈴木が濃色の腕章を着けている時期から、1913年5月下旬前後である可能性を指摘することができるが、腕章を着けている理由までは、現段階で確定することができなかった²⁰。なお、当該期間の鈴木とゾーグは、ゾーグのもとでもヘルパーとして働いていた。次章では、この点について具体的に検討していくことにする。

第2章 ゾーグの思い出のなかの鈴木義男

第1節 ゾーグが語る鈴木義男の語学力

続いて、ゾーグの伝記²¹(以下、ゾーグ伝記と呼称)を基に、鈴木とゾーグの関係について考察する。

以下に引用するゾーグの回想録は、ゾーグの二男であるハロルド²²が著したゾーグ伝記に記述されているものである(傍註は筆者による)。

²⁰筆者は当初、濃色の腕章を喪章と仮定し、鈴木とゾーグに関連の深い人物の葬儀に参列した前後に撮影された写真ではないかと考え、1914(大正3)年6月2日に仙台基督教教会(仙台東二番丁教会。現日本基督教団仙台東一番丁教会)で行われた香味チカの葬儀(『東北教会時報』第157号、教会時報社、1914年6月)の前後に撮られたものではないかと想定したが、写真「クラブ卒業生送別会 大正二年五月廿三日」の内容を確認したこと、仁昌寺・雲然両氏から鈴木とゾーグの濃色の腕章と香味の葬儀を結び付けるのはやや早計ではないかとの指摘を受けたことから、以上のように論を修正した。

²¹Harold E. Zaugg, "Sensei The Ultra American: From Missionary Teacher to Wartime Translator" Sunflower University Press, 1995.

²²Harold Elmer Zaugg(1916-2002)は、ゾーグ夫妻の第三子としてアメリカ合衆国イリノイ州シカゴで出生。再来日する両親に従い、生後6か月の時に来日し、しばらく仙台で過ごす。時期は不明だが、のちにアメリカに帰国している(前掲誌21ゾーグ伝記、裏表紙の著者略歴。「Harold Elmer Zaugg」(前掲誌6 Webサイト、2024年12月閲覧、<https://www.findagrave.com/memorial/33923302/harold-elmer-zaugg>)。

引用原文 ²³	和 訳
A common practice among missionaries everywhere was to recruit able and willing students to assist them in conducting their personal affairs: write letters and address them in the native language; run errands, especially those requiring a specialized knowledge of the language; and serve as ongoing tutors in both the spoken and written language. Although full-time secretarial assistants were employed by a few, I liked to use the part-time help of deserving students with above average ability. Even though this meant breaking in a new young man every year or two, the slight inconvenience was more than offset by the pleasure of watching him develop his English skills, his self-confidence, and his abilities in many other areas. Besides, most students needed and appreciated the financial help.	各地の宣教師の間で一般的に行われていたことは、個人的な事柄——例えば、母国語〔である日本語〕で手紙を書いたり、それを投函したりする際に、あるいは用事、特に言語の専門知識が必要な用事を実行する際に、話し言葉と書き言葉の両方で継続的に助手を務めてくれる——を手伝う有能で意欲的な学生²⁴を募集することだった。フルタイムの秘書は何人か雇われていたが、私は平均以上の能力を持つふさわしい学生のパートタイムの助けを借りることを好んだ。これは、1～2年ごとに新しい若者を〔仕事に〕慣らす〔必要が生じる〕ことを意味したが、わずかな不便さは、^{〔有能な学生〕}彼の英語スキル、自信、その他多くの分野での能力を伸ばすのを見る喜びによって相殺されてしまった。さらに、ほとんどの学生は経済的援助を必要としており、それを感謝していた。

²³ 前掲註21ゾーグ伝記、P27～30。引用部分の和訳は筆者が行った。なお、和訳にあたっては、英語に通暁している日野哲客員研究員に校訂していただいた。

²⁴ アメリカ英語では通例「student」を学生・生徒の使い分けをしていないこと（『小学館 ランダムハウス英和大辞典』小学館、1994年、JapanKnowledge Lib、2024年12月閲覧）、原文の文意を高校生・中学生に限定できないことから、本稿ではより広範な意味を含有するとされる「学生」の表記に統一した。

引用原文	和訳
Most of my student helpers later went on to successful, if not brilliant, careers. Two became English teachers in public high schools; one became an author; another a secretary in the Tokyo YMCA; and one became a professor at the International Christian University in Tokyo. But there was one who really stood out. When Gidan Suzuki came to me, he already had a reputation as an outstanding debater, even in his high school²⁵ days. His remarkable verbal intelligence soon became clear to me. His command of English improved so rapidly that, eventually, he spoke with no trace of an accent—a feat accomplished by very few native-born Japanese. This, combined with a voice and diction that has since reminded me of Gregory Peck's, augured well for the future of this young man. ²⁵ 第1章第2節で確認したように、ゾーグのヘルパーとなった時点で、鈴木は既に第二高等学校の生徒であった。そのため、「high school」ではなくて「middle school」となっている方が正確である。	私の学生ヘルパーのほとんどは、その後、輝かしいとはいえないにしても、成功したキャリアを築いた。二人は公立高等学校の英語教師²⁶に、ある者は作家に²⁷、ほかの一人は東京YMCAのセクレタリーに、もう一人は東京の国際基督教大学の教授になった。しかし、本当に際立った人物が一人いた。 鈴木義男^{ギダン}が私の所に来た時、彼は高等学校〔東北学院普通科の誤カ〕時代から既に優れた演説者としての評判が高かった。彼の驚くべき言語的能力はすぐに私にも明らかになった。彼の英語力は急速に上達し、最終的にはなまりの痕跡もなく話すことができるようになったが、これはごく少数の生粋の日本人だけが成し遂げた偉業である。これは、それ以来〔後世の〕グレゴリー・ペック²⁸を思い出させる声と言葉遣いと相まって、この若者の将来にとって良い前兆だった。 ²⁶ このうちの一人は青木義夫とみられる。青木については、前掲註3拙稿を参照されたい。 ²⁷ この候補としては、有川治助と中村獅雄の二人を挙げることができる。 有川治助（1887–1927）は弁護士、朝鮮銀行員、伝記作家。山形県南村山郡八日町（現山形市）生まれ。1906（明治39）年東北学院普通科卒業後、暫時専門部在学中、第二高等学校に進学。この頃にゾーグのヘルパーをしていた城生義一と同居していた縁で、城生が1908年3月に東北学院専門部文科を卒業して以降、代わってゾーグのヘルパーを務める。1910年第二高等学校卒業後、東京帝国大学法科大学法律学科（英法兼修）入学。1915（大正4）年の東京帝国大学卒業後は弁護士、朝鮮銀行員を務めたのち、伝記作家として『ヘンリ・フォード』『ジョン・ワナメーカ』を著したが、『ジョン・デイ・ロックフェラー』の執筆半ばにして結核のため没した（木村久一「故有川治助君」（『東北学院時報』第102号、東北学院同窓会、1927年10月、1～2面））。 中村獅雄（1889–1953）は、キリスト教思想家、聖書研究者、仏蘭西書店経営者。東京市芝区（現東京都港区）生まれ。キリスト教への関心から明治学院普通部に転校し、1907年に富士見町教会で受洗。1909年の高等部卒業後は、伝道や論著の執筆活動を行った。これらの業績が認められ、青山学院神学科、東京女子大学などの講師として迎えられたが、過労のため没した（前掲註2事典、P996–997）。1910年3月～1911年4月の間、山形伝道に従事するゾーグの「ヘルパー」「通訳」を務めていた（成田良太「教勢 山形市伝道教会」（『東北教会時報』第107号、教会時報社、1910年4月、5面）。阿曾沼「幸之助」「教勢 山形県新庄伝道教会」（『東北教会時報』第108号、教会時報社、1910年5月、5面）。成田良太「教勢 山形伝道教会」（『東北教会時報』第119号、教会時報社、1911年4月、4面））。 ²⁸ アメリカの映画俳優。ただし、ペックは1916（大正5）年生まれなので（『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、1994年、JapanKnowledge Lib、2024年12月閲覧）、鈴木木の同時代における印象を記したものではないことに注意。

引用原文	和 訳
In short order, Suzuki taught himself the use of a typewriter, which he employed in copying my weekly submissions for a correspondence course in the New Testament that I was taking with the University of Chicago. In the process, he learned a smattering of Greek, and how to write by hand the Greek words. He actually did a neater job than I had been doing before he took over. After graduating from our North Japan College (Tohoku Gakuin), Suzuki entered law school at the prestigious Tokyo Imperial University, and later became a highly successful and able attorney in the capital city. During the 1930s, I often ran across his name in the newspapers as the defense attorney for an American or British citizen being accused of espionage. The Japanese government was becoming ever more suspicious of foreign spying, but at the same time that arrests increased, the courts did their best to avoid any charge that the accused did not have proper counsel. Suzuki's good reputation and ability undoubtedly served to assure his court appointments as defense counsel. Whether or not he gained acquittal or reduced sentences for his troubled clients, Suzuki's English fluency must have provided at least some comfort for them during the trial. After World War II, I wrote Suzuki inquiring about his welfare. His reply, dated November 5, 1951, follows:	私がシカゴ大学で受講していた新約聖書の通信講座に毎週提出する原稿を書き写すために使うタイプライターの使い方を、鈴木はすぐに独学で学んだ。その過程で、彼はギリシャ語と、ギリシャ語の単語を手書きする方法を少し学んだ。実際、彼が引き継いだ後は、私が以前やっていたよりもきちんとした仕事をしてくれた。 鈴木はノースジャパンカレッジ（東北学院〔普通科〕）を卒業後²⁹、名門東京帝国大学の法科大学〔法律学科〕に入学し、その後首都〔東京〕で有能な弁護士として成功した。1930年代、私はスパイ容疑で告発されたアメリカ人やイギリス人の弁護人として、彼の名前を新聞でよく目にした³⁰。日本政府は外国のスパイに対する疑惑をますます強めていたが、逮捕者が増加すると同時に、裁判所は被告人に適切な弁護士がついていなかったという追及を避けるために最善を尽くした。鈴木の高い評判と能力が、間違いなく弁護人としての法廷任務を確実にするのに役立った。問題を抱えた依頼人たちに無罪判決を勝ち取るか減刑を勝ち取るかは別として、鈴木の流れな英語は裁判中彼らに少なくともいくつかの慰めを与えたに違いない。 第二次世界大戦後、私は鈴木に彼の安否を尋ねる手紙を書いた。1951年11月5日付の彼の返信は次の通りである。

²⁹ 東北学院普通科卒業後の鈴木は、まず第二高等学校に入学し、その後東京帝国大学に入学しているので、事実誤認がみられる。

³⁰ 「おわりに」の部分で後述する。

引用原文	和訳
Dear Dr. Zaugg: Ten years have elapsed since the unfortunate war parted us from each other, and you can imagine how glad I was to hear from you. I owe it, I believe, entirely to your guidance and the mercy of God that I, who had been an idle helper to you 30 years ago, grew to be a professor in a university and the Minister of Justice, and now am taking the post of the president of the board of directors of the Tohoku Gakuin, my alma mater. I am now making every effort to discharge this new important task and to make the Gakuin grow well. Japan suffered from a great disaster owing to the reckless war and it will take, I believe, at least a quarter century's effort to restore it so that she will rank with the civilized nations of the world as one of their brothers. Will you please pray for our nation as we are prepared, glad to say, never to lose our courage and faith, as you said in your letter. Due to the help of our brothers and sisters in the United States and of the alumni in Japan, North Japan College has been so much enlarged that it now has about 3,000 students in the college, high school and junior high departments, and in addition we expect in the near future to build a fine memorial library in memory of Dr. Schneder, our former principal. I am very happy to hear that you and your family, including your seven grandchildren, are all in good health. I am now carrying on three jobs, that of a lawyer, that of a professor in a university, and that of a member of the House of Representatives. I am very busy, as you can imagine, but Mrs. Suzuki (a graduate of Aoyama Girls' School) and I are also in excellent health. We have two daughters and four grandsons, all residing in my house and the latter attending primary school.	親愛なるゾーグ博士へ 不幸な戦争で私たちが別れてから10年が過ぎ、私 があなたから連絡をもらえてどれほど嬉しかったか 想像できるでしょう。^{ママ}30年前、あなたの怠惰なヘル パーに過ぎなかった私が、大学教授、法務総裁に成 長し、今では私の母校である東北学院の理事長の職 に就いているのは、ひとえにあなたのご指導と神の 慈悲のおかげであると私は信じています。私は今、 この新たな重要な任務を遂行し、^{東北}学院をよ り良く成長させるために全力を尽くしています。 日本は無謀な戦争によって大きな惨禍に見舞われ ましたが、世界の文明諸国の仲間として肩を並べる まで復興するには、少なくとも四半世紀の努力が必 要だと思います。あなたが手紙で言っておられるよ うに、私たちは決して勇気と信仰を失わないように 準備ができていますので、私たちの国のために祈っ ていただけませんか。 アメリカの仲間と日本の同窓生の協力により、 ^{東北学院}ノースジャパンカレッジは大幅に拡大し、現在では 大学、高等学校、中学校の学部で約3000人の学生・ 生徒が在籍しており、さらに、近い将来、元院長で あるシュネーダー博士を記念して立派な記念図書館 を建設する予定です。 あなたと、7人の孫を含むご家族全員が健康であ ると聞いて、とてもうれしく思います。私は現在、 弁護士、大学教授、衆議院議員の3つの仕事を掛け 持ちしています。ご想像の通り、とても忙しいです が、妻^{ママ}〔の常盤〕（青山女学院の卒業生³¹）も私も元 気です。私たちには娘2人、孫4人がいますが、全 員私の家に住んでおり、孫たちは小学校に通ってい ます。 ³¹ 鈴木夫人の常盤は、青山女学院卒業後、日本女子大学を 卒業している（中西利八編『全日本業界人物大成』 坤巻、 全日本業界人物大成刊行会、1932年、P502）。国立国会 図書館デジタルコレクションにて2024年12月閲覧。

引用原文	和 訳
Praying for Heaven's abundant blessing upon you and your family, I am. Yours Faithfully, Gidan Suzuki Remembering Suzuki's superior abilities as a student, I could not be surprised to learn of his brilliantly successful legal and political career. I was gratified by the realization that I had even a small part in helping this worthy student get a good start in life. Although I believe that many—perhaps most—teachers are underpaid, part of this deficiency can be offset by the reward that comes from seeing the minds and hearts of their students broaden and grow. Surely the teacher who receives some compensation in this form is fortunate indeed.	あなたとあなたの家族の上に天の豊かな祝福がありますようお祈りいたします。 敬具 鈴木^{ギダン}義男 学生時代の鈴木 of 卓越した能力を覚えているので、私は彼が法律上および政治上輝かしい成功を収めたことを知っても驚くことはなかった。この立派な学生が人生で良いスタートを切るのに、私も少しでも貢献できたことを実感して、とてもうれしく思った。多くの——おそらくほとんどの——[アメリカ人] 教師³²の給与は十分ではなかったと思うが、その不足の一部は、学生たちの知性と心の幅が広がり、成長するのを見ることで得られる報酬によって補うことができる。間違いなく、こういった形で何らかの報酬を受け取った[アメリカ人] 教師は本当に幸運である。 ³² アメリカの教会の外国伝道局から派遣され、日本の神学校などで教員として勤務する立場にあったアメリカ人のこと。

このゾーグ伝記の著者であるハロルドによれば、ゾーグの体験記の体で書かれている部分は、ゾーグ自身が書き残したり、口述したりしていた回想録を基に書かれたものであるため³³、どこまでがゾーグ自身による記述で、どこからがハロルドによる加筆なのか分からないという問題がある。この点に留意しつつ、以下検討していく。

まずは、ゾーグからみた鈴木³⁴の語学力の程度について確認する。東京帝国大学への進学、文部省在外研究員としての欧米留学、東北帝国大学法文学部教授への就任といった経歴から、鈴木が高い語学力を有していたことは疑いようのない事実である。ところが、これまでに東北学院普通科・第二高等学校在学時代の鈴木³⁵の日本語における文才・弁才がともに優れていたことは明らかにされてきたが、外国語に対する能力の程度について、具体的なことは判明していなかった。上に引用したゾーグの回想録は、当時の鈴木³⁶の語学力を第三者の立場から評価した資料として貴重である。

結論からいえば、鈴木³⁷の語学力は、ゾーグの目には驚異的に映った。ゾーグのヘルパーとなった鈴木³⁸の英語を話す能力は急速に上達し、ネイティブスピーカーにも劣らないほどの巧みな発音を身に付けた。さらにそれだけに留まらず、当時目新しかったはずのタイプライターの使い方をすぐさま自力で習得したばかりか、ほんの少しではあるが、ギリシャ語の読み書きまでこなせるようになっていったのである。タイプライターの使い方に至っては、ゾーグ自身が作業するよりも鈴木³⁹に任せた方が効率的であったと、半ば自嘲気味に語ることで鈴木⁴⁰の能力の高さを称賛している。

第二高等学校在学中の鈴木⁴¹がヘルパーとしてゾーグとともに過ごしたのは、第1章第2節でも触れたように、ゾーグがシカゴ大学での修学を理由に一時帰米する1914（大正3）年6月末までであり、長く見積もってもおよそ1年10か月の短期間の出来事ということになる。多少称揚する目的での潤色があるかもしれないが、鈴木⁴²が日本語のみならず、外国語に対しても卓越した能力を発揮したことは間違いないだろう。

明治末期の東北学院では、英語に重点を置いたカリキュラムが組まれていたことに加え、ネイティブスピーカーであるアメリカ人教師による良質の英語教育を受けられることもあり、英語教育校として学内外から高く評価されていた⁴³。この頃の東北学院普通科の英語教育は、当時の仙台市内の他校と比較しても高い水準であり、鈴木⁴⁴はその教育をゾーグのヘルパーとなる以前から既に受けていた。しかし、その東北学院の英語教育を受けたからといっても、必ずしも全員が語学力に優れた人材となるとは限らなかった⁴⁵。だが、鈴木⁴⁶は日常的に英語を話すことを意識しており、自主学習を欠かさなかったようである。のちに鈴木⁴⁷の義弟となる鉄本総吾は、銭湯の脱衣所でたびたび居合わせた明治末期頃の東北学院普通科在学中の鈴木⁴⁸の印象について、こう回想している（旧字体は新字体に直した。傍註は筆者による）。

見るともなく見ると痩せて眼だけひどく大きい十七八才の中学生が矢張り立っている。ブツブツ英語をつぶやく。^{〔教科書〕}リーダーの暗誦らしい。汗が少しおさまり出すと猿股一つで教科書を朗々と読む。^{〔ママ〕}最初は気障な奴だ変な奴だと思ったが、折々風呂屋でこの様子を見ているうちにだんだん感心し出して来た。偉い奴だ、恐らく何百人もの若い者が風呂屋に来るだろう、ワイ談や無駄話をやる奴等ばかりで、一人もこのような真面目な生徒がいない。偉い奴だとだんだん感心するようになって来た⁴⁹。

鈴木⁵⁰がのちに発揮することになる語学力の高さは、英語教育の盛んな東北学院普通科に学び、第二高等学校在学中にヘルパーとして外国人宣教師の下で薫陶を受けただけでなく、その恵まれた環境に驕ることなく、常に向上心を持って日々自主学習を欠かさなかった、鈴木⁵¹本人の優秀な才能と努力の賜物によるものであった。

³³ 前掲註21ゾーグ伝記、P108

³⁴ 星洋和「明治後期の仙台における在仙宣教師の立場－ドイッ改革派の宣教師への評価を中心に－」（『東北学院史資料センター年報』創刊号、東北学院、2016年）。

³⁵ 既に前掲註34星論文P31で言及されているように、英語を大の苦手としていた生徒も一定数存在したとみられる。

³⁶ 鉄本総吾「兄の少年青年時代」（前掲註10鈴木義男伝記刊行会編著、P227～235）。

第2節 帰米後のゾーグに宛てられた鈴木義男の書簡

続いて、鈴木がアメリカにいるゾーグに宛てた書簡の内容について確認する。当該書簡は、第二次世界大戦後に初めてゾーグから鈴木に送られた書簡の返信である。なお、英語で書かれた鈴木の手簡はこれまで確認されてこなかった。当該書簡は、その初見資料といえる³⁷。

この手簡をしたための約半年前まで、鈴木は東北学院第6代理事長としてある問題を抱えていた。東北学院執行部の最高責任者である院長の退任・急逝が相次いだことにより、頻繁に後任を選定する必要に迫られていたのである。このような事態は、既に初代学長を務めていた小田忠夫が1951（昭和26）年5月に第6代院長を兼任するかたちで就任したことにより、ひとまずの決着をみることになる。後年の小田は、「この数次の相次ぐ新院長選定に対処して、その度毎にその選定責任者としての明を失わなかったことは、学校経営の根本に関する重大事であるだけに、理事長の最も大きな功績として称賛されるべきことでなければならない」と回想している³⁸。

小田はその後約31年にわたって院長として在任し、こんにちに至る東北学院の発展の礎を築いていくことになる。しかし、当然のことながら、この時の鈴木をはじめとした誰もがまだそれを知る由もなかった。鈴木的心境は、度重なる院長の交代・再選出を目の当たりにしてきたこともあり、いつまた院長の後任人事に憂慮する事態になるのではないかと不安が付きまとっていたのではないだろうか。

このほかにも、戦後復興と新制中学校・高等学校の設立、大学の新設、学校法人組織と施設の整備など、鈴木が理事長として対応に追われたであろう事項には枚挙にいとまがない。政治家と学校経営者という二足の草鞋を履きながら、多くの問題に直面していたはずの鈴木ではあるが、ゾーグ宛の手簡では、それらに対する自身の苦悩には一切言及せず、あくまでも日本と東北学院の戦後復興という、前向きな情報を伝えることに徹している。久々に音信があった恩師に対して、儀礼的・事務的に行った返信であるためだといってしまうまでもだが、あるいは、「勇気と信仰を失わないように」と気にかけるゾー

グを心配させまいとする、鈴木なりの配慮の表れだったのかもしれない。

おわりに

以上、鈴木の手第二高等学校在学時代を中心に、これまでの研究では知られていなかった、鈴木とゾーグの関係について明らかにすることができた。その要点をまとめれば、次のようになる。

第1章では、鈴木がゾーグ一家とともに写っている1枚の写真について検討した。第1節では、【写真】概要として、基礎情報、写っている人物、撮影場所について確認した。第2節では、主に鈴木の手制服の服飾、およびゾーグ夫妻の子女二人の推定年齢を手掛かりとして、【写真】の撮影年代を1913（大正2）年夏頃から1914年6月下旬までの間の初夏～晩夏の期間に絞り込んだ。

第2章では、ゾーグ伝記に残されていた彼の回想録に基づき、鈴木とゾーグの関係性について考察した。第1節では、ゾーグの手ヘルパーとなった鈴木が、ゾーグも驚くほどの早さで語学力を発揮するようになったことを確認した。そして、その素地は英語教育の盛んな東北学院普通科に学んだことで既に出来上がっており、何より鈴木本人が常に向上心を持って日々自主学習を欠かさなかったことが、その語学力の高さにつながっていたことを明らかにした。第2節では、帰米していたゾーグから第二次世界大戦後に初めて鈴木に送られた手簡の返信としてしたためられた、ゾーグ宛鈴木手簡の内容について確認した。当該手簡からは、多難な時期にあったにもかかわらず、自らの苦悩を示すことはなく、建設的な話題を提供することで、ゾーグに無用な心配をかけまいと気遣う鈴木の様子がみて取れるのではないだろうか。

最後に、本稿では触れることのできなかった3点に言及して今後の展望としたい。

1点目は、当時のヘルパーについてである。前稿で筆者は、ゾーグのもとで水汲みや風呂掃除のアルバイトをしたという青木徹の証言に基づき、ヘルパーとは「外国人宣教師の手身の回りの世話をこなした生徒を指す」と述べたが³⁹、本稿で既にみてきたように、これは明らかに説明不足であった。しかし、上記の青木のような肉体労働もヘルパーの仕

³⁷ 仁昌寺・雲然両氏のご教示による。

³⁸ 小田忠夫「東北学院のために尽した34年間」（前掲註10鈴木義男伝記刊行会編著、P72～75）。

³⁹ 前掲註3拙稿註23。

事であったのだろうか。残念ながら、青木はこの労働を「アルバイト」としか表現しておらず、鈴木をはじめとしたヘルパー経験者らも肉体労働を伴う仕事を行ったとの証言は残していない。また、前稿では、ヘルパーの仕事を得る過程で、労働会からの就労斡旋があった可能性についても言及したが、サイプルのヘルパーであったと考えられる杉山元治郎が労働会に所属した形跡はない⁴⁰。むしろ、本稿註27で紹介した有川治助のように、個人的な人脈を介して雇用につながる事例が多かったのではないだろうか。ヘルパーの業務内容や雇用の実態を解明しようとするならば、事例を収集し、それを比較検討することが今後必要となるだろう。

2点目は、本稿註30で後述するとした部分、つまり、鈴木が欧米人被告の裁判に弁護士として関係したか否かについてである。仁昌寺・雲然両氏のご教示によれば、1941年に発生したいわゆるゾルゲ事件、および宮澤・レーン事件を指す可能性があるものの、両事件で鈴木が外国人被告の弁護を担当した記録は現時点では発見されていないとのことであった。この場合、ゾーグの「1930年代」との証言にも食い違いがみられることから、以下の2つの可能性を指摘することができる。すなわち、ゾーグの「1930年代」とする証言に誤りがあり、かつ鈴木が両事件の外国人被告の弁護にも関与していた可能性、あるいは、ゾーグの証言が正しく、鈴木が外国人被告の弁護に関与した未知の事件が存在する可能性である。当該記述の真偽については、なおも検討を要する。

3点目は、ゾーグの人物像や神学的立場、東北学院に対して果たした役割、学生たちに与えた影響などである。『百年史』は、東北学院の100年を振り返る集大成ではあったものの、そこでゾーグ個人に関する十分な検討が行われることはなかった。本稿でも用いたゾーグ伝記は、『百年史』の執筆が完了した後の1995年に刊行されており、『百年史』執筆時には資料が不足していたということもできるが、ゾーグ個人にあまり焦点が当てられなかった理由は不明である。東北学院の創立25周年や40周年といった歴史的節目を幾度となく目の当たりにし、神学部の日本神学校（現東京神学大学）への合同という難題には神学部長として対応、その後東北学院第3代理事長と高等学部長の大任を負いながらも、最終的には日米開戦の影響で不本意ながら日本を去ることになったゾーグが果たした役割は、決して小さいものではなかったと考えられる。近年、ゾーグの神学的立場については、アメリカでの動向を注視し、1920年代にはリベラル神学を擁護する傾向にあったことが明らかになった⁴¹。ゾーグの全体像を把握する研究は、まだ始まったばかりである。

⁴⁰ 1905(明治38)年頃以降、サイプルに日本語を教えるアルバイトを行っていた杉山は、毎月8円の収入を得ていたことから、東北学院の労働会に所属し、働きながら学ぶという経験をするとはなかった。のちに教会の牧師に就任した杉山は、初任給が3円であることに衝撃を受ける。さらにその報酬は2か月分であることを後から知らされることになる(岩本由輝「杉山元治郎」(前掲註1 東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会編著、P27～41))。英語の能力を買われて外国人宣教師のもとで働き、一般的な仕事よりも高い水準の収入を得ていたことから、杉山もサイプルにヘルパーとして雇用されていたと考えられる。

⁴¹ 藤野雄大「『東北学院の神学』をめぐる一考察－20世紀前半における東北学院と日本基督教会東北中会との衝突を通して」(前掲註3『東北学院史資料センター年報』Vol.8)。

奈良輪 俊幸プロフィール NARAWA, Toshiyuki

1996(平成8)年生まれ。
東北学院大学文学部歴史学科卒業。東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程修了。
2022年4月より東北学院史資料センター嘱託職員。

2024年度公開シンポジウム 「工学部のこれまでとこれから」 開催報告

日 時：2024(令和6)年11月30日(土) 13時～

会 場：五橋キャンパス 講義棟 4階 L401教室

参加者：約60名



11月30日(土)、東北学院史資料センター主催の公開シンポジウム「工学部のこれまでとこれから」が五橋キャンパス 講義棟 L401教室を会場に開催された。

2023年4月の五橋キャンパス開学に伴い、多賀城キャンパスは1962年の工学部設置以来続いた61年の歴史に幕を閉じた。今回の企画は工学部のこれまでの歴史と当時の様子や雰囲気、そして今後の工学部の展望を伝えることを目的として、前半を基調講演、後半を卒業生による講話と座談会の二部構成で開催することとなった。

前半の基調講演は今回のシンポジウムのコーディネーターでもある当センター調査研究員の崎山俊雄工学部環境建設工学科准教授と岩谷幸雄工学部長にお願いした。最初に崎山俊雄工学部環境建設工学科准教授が「多賀城キャンパスの60年：1962-2022」と題して講演された。冒頭に1895年理科専修部についてと1944年にわずか2年間設置された航空工業専門学校に言及後、1962年に多賀城キャンパスに設置された工学部について、多賀城という場所を選定し





基調講演（崎山 俊雄）



基調講演（岩谷 幸雄）

た理由、申請と設置の経緯、設置当初進駐軍が建設した建物を再利用していたこと、その後、新たな建物の建設、改築を経て現在の姿になっていった様子を年表、文書、建築図面、当時の写真などの資料を用いて建築物の観点から詳細な研究結果を発表された。

続いて岩谷幸雄工学部長が「東北学院大学の理系学部の過去・現在・未来」と題して講演された。工学部の設置から現在に至るまでの経過とその間の学科の改廃、新設等について、年表を用いて発表された後、永井健三工学部初代専任学部長、その後を継いだ佐藤利三郎工学部長を中心に、歴代の工学部長毎にその任期中にあった主だった出来事が紹介され

た。次に工学部移転に伴い、旧多賀城キャンパスの記憶を残そうと学内若手研究者が作成したデジタルアーカイブが紹介され、続いて五橋キャンパス移転後の理工系学部の未来として、60年間東北地方の技術者を養成してきた本学工学部の役割は今後も続けとし、AIなどの技術動向の変化や劇的な少子化で元気が失われる日本、東北にあって様々な課題に向き合う志が必要と語られた。最後に理工系の新設学部（未来探求学部（仮称））設置予定の説明で締めくくられた。

※基調講演の詳細な内容は、『東北学院史資料センター年報』Vol.11（2026.3刊行予定）に掲載予定



武田 三弘



基調講演の後、「工学部の思い出」と題して工学部4学科の卒業生より学生当時と教員としての思い出話を語っていただき、その後、休憩を挟み、武田三弘工学部環境建設工学科教授をファシリテーターとして、先に講話で登壇された4名による座談会が行われた。武田教授の質問に回答するかたちで当時の様子が語られ、ジョークを交えた思い出話の内容に60名程の来場者の笑いを誘う場面もあった。

（登壇順）

工学部機械工学科卒
工学部電気工学科卒

鶴本勝夫工学部名誉教授
志子田有光
情報基盤工学科教授

工学部応用物理学科卒
工学部土木工学科卒

伊藤忠栄工学部名誉教授
中西利美氏

（前東北学院理事、現同窓会東海支部長）

※それぞれの話された内容の詳細は、『東北学院史資料センター年報』Vol.11（2026.3刊行予定）に掲載予定



鶴本 勝夫



志子田 有光



伊藤 忠栄



中西 利美

受贈資料一覧

2024年2月～2025年1月

日付	寄贈者	受贈資料
2024.03.22	明治学院歴史資料館・ 明治学院大学キリスト教研究所	井深梶之助日記 明治編
2024.03.22	日本大学広報部広報課(大学史)	学徒・校友の出征 -『日本大学新聞』出征関係記事資料集-
2024.03.18	藏中さやか	松山高吉研究 -神戸女学院所蔵聖書翻訳資料を中心に-
2024.03.26	野間教育研究所	大学沿革史編纂の手引き
2024.03.27	西南学院史資料センター	西南学院史資料センター2024年度企画展 西南学院の女性宣教師たち 学院の礎を築いた女性たち
2024.03.27	西南学院史資料センター	ウィリアム・マックスフィールド・ギャロット伝 「遣わされた方の御心を行うために」
2024.04.02	神奈川大学史料編纂室	神奈川大学百年史 資料編 I
2024.04.04	明星学苑	学校法人明星学苑 創立100周年記念誌
2024.04.23	九州大学大学文書館	九州大学大学文書館所蔵 九州帝国大学農学部附属演習林関係資料目録
2024.04.30	福澤諭吉記念慶應義塾史展示館	曾禰中條建築事務所と慶應義塾
2024.05.17	小磯清光	語り継ぐ戦争体験 第24集
2024.05.29	神戸女学院大学図書館	神戸女学院創立150周年記念展示Ⅱ 岡田山移転90周年 『神戸女学院のヴォーリス建築 -Beauty Becomes a College-』展示目録
2024.06.10	福岡女子大学	福岡女子大学百年史 通史編・資料編
2024.06.19	片瀬一男	広瀬川の岸辺 -片瀬一男・退職職記念(写真集&論文集)-
2024.07.05	北海道大学 150 年史編集室	北海道大学百五十年史 資料編一
2024.08.19	石川元也	創意 -事実と道理に即して刑事弁護六〇年余
2024.09.02	八戸市博物館	なつかしの八戸Ⅲ きらめく八戸 昭和40年代 -和井田登寄贈作品より-
2024.09.05	阿部頌栄	朝俣会全国連合 第61回 全国大会<仙台>報告書
2024.10.01	京都産業大学大学史編纂室	学校法人京都産業大学五十年の歴史(三) 充実期編 -教育基盤の整備-
2024.10.16	研究社編集部・高橋麻古	日本人の英語の発音をどう学び、教えてきたか -英語音声教育の小通史
2024.12.02	神奈川大学大学資料編纂室	神奈川大学を築いた人々人物誌 神奈川大学・短期大学部・附属学校編
2024.12.17	青山学院大学青山学院史研究所	写真に見る青山学院150年
2024.12.24	立教学院展示館	立教学院創立150周年記念展 シーズン3 立教学院展示館 第11回企画展 立教の「未来」像 -指導者たちの言葉から-

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。

東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ両名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」開設(5月)。教師2名、生徒7名で始まった。E.R.ブルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式を挙行(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年	D.B.シュネーダー	第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年		第2代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年	笹尾糸太郎	全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年		専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年	田中四郎	普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「社団法人東北学院」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		『東北学院時報』創刊(1月)。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		南町大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。
1920(大正9)年	五十嵐正	中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年		中学部寄宿舎再建(9月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1922(大正11)年		中学部校舎再建〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉(6月)。 
1923(大正12)年		東北学院教会設立(5月)。
1925(大正14)年		神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926(大正15)年		南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。 
1928(昭和3)年		専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。
1929(昭和4)年	 出村悌三郎	専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。
1930(昭和5)年		高等学部師範科に専攻科1年を置く。
1932(昭和7)年	 E.H.ゾーグ	高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。 
1933(昭和8)年		高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。
1934(昭和9)年		神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。
1936(昭和11)年	 田口泰輔	高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。 
1937(昭和12)年	 小泉要太郎	神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。
1938(昭和13)年		中学部長に田口泰輔就任(4月)。
1939(昭和14)年		中学部長に出村剛就任(4月)。
1940(昭和15)年	 宮城音五郎	南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花湍浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。
1941(昭和16)年		高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。
1942(昭和17)年		高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。
1943(昭和18)年	 杉山元治郎	高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長を出村悌三郎院長兼任(4月)。
1944(昭和19)年		航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。
1945(昭和20)年	 出村剛	中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年		高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。

年 代	歴代役職者	事 項
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	月浦利雄	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代大学長に就任。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	鈴木義男	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	月浦利雄	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年	A. E. アンケニー	中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を宮城郡多賀城町(現多賀城市)に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年		多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年	小田忠夫	創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年		中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年	五十嵐正躬	中学高等学校一本化、中学校長を月浦利雄高等学校校長兼任(1月)。中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年		短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院創立七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長を小田忠夫院長兼任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ビジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。
1964(昭和39)年		東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年	山根篤	東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舍完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舍完成。青根セミナーハウス完成。



年 代	歴代役職者	事 項
1967(昭和42)年	 二関敬	工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成（3月）。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成（5月）。中学・高等学校向山寄宿舎開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成（3月）。中学・高等学校弓道場完成（3月）。大学新研究棟68年館完成（8月）。『東北学院大学学報』第1号創刊（10月）。
1969(昭和44)年		工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。第9代理事長に月浦利雄就任（4月）。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 田口誠一	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学・高等学校長に二関敬就任（9月）。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任（9月）。大学文団連棟焼失（9月）。
1972(昭和47)年		榴ヶ岡高等学校として独立（4月）。高山セミナーハウス完成（7月）。 泉市市名坂に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転（8月） 。榴ヶ岡高等学校体育館完成（12月）。
1973(昭和48)年	 清水浩三	東北学院同窓会館完成（4月）。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任（7月）。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任（3月）。
1975(昭和50)年	 情野鉄雄	大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成（6月）。
1976(昭和51)年		創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年		中学・高等学校長に田口誠一就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長を小田忠夫院長兼任（4月）。
1978(昭和53)年	 兄玉省三	大学90周年記念館完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任（4月）。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊（6月）。TGヒュッテ焼失（8月）。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（土樋キャンパス礼拝堂）に新パイプオルガンを設置（11月）。
1979(昭和54)年	 宗方司	大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成（3月）。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式（3月）。大学78年館および部室棟完成（9月）。蔵王TGヒュッテ再建（10月）。東北学院展開催（十字屋仙台店・10月）。
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成（3月）。工学部機械工場および機械実験棟完成（3月）。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成（8月）。泉校地総合運動場および管理センター完成（9月）。中学・高等学校文化部室完成（9月）。
1981(昭和56)年	 半澤義巳	大学81年館完成（3月）。『東北学院報』発刊（『東北学院大学学報』を改称）（4月）。情報処理センター設置。総合運動場プール完成（5月）。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修（8月）。工学部体育館完成（10月）。
1982(昭和57)年		米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。 第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任（4月） 。第11代理事長に兄玉省三就任（4月）。図書館工学部分館完成（11月）。
1983(昭和58)年	 武藤俊男	高等学校第二部廃止（3月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成（3月）。工学部礼拝堂完成（10月）。
1984(昭和59)年		新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修（7月）。
1985(昭和60)年	 倉松功	大学整備計画案（教養学部泉校地移転など）公表（1月）。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装（11月）。 幼稚園新園舎完成（12月） 。

年 代	歴代役職者	事 項
1986(昭和61)年		創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成（3月）。
1987(昭和62)年	脇田睦生	中学・高等学校長に宗方司就任（4月）。榴ヶ岡高等学校長に半澤義已就任（4月）。中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。
1988(昭和63)年		大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成（3月）。幼稚園長に橋本清就任（4月）。
1989(平成元)年	出原莊三	泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（4月）。『東北学院百年史』発刊（5月）。
1990(平成2)年		大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年	杉本勇	多賀城キャンパス1号館完成（3月）。榴ヶ岡高等学校部室棟完成（3月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（4月）。中学・高等学校社会科教室完成（7月）。
1992(平成4)年		大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（4月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（6月）。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年	赤澤昭三	工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定（3月）。
1994(平成6)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年	星宮望	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任（4月）。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成（2月）。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任（4月）。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施（9月）。
1997(平成9)年	松本芳哉	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長兼任（4月）。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年	久能隆博	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（4月）。
2000(平成12)年		文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（4月）。土樋キャンパス8号館（押川記念ホール）・体育館完成（9月）。大学第1回ホームカミングデー（同窓祭）開催。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（3万1千坪）。
2001(平成13)年	永井英司	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（4月）。東北学院資料室開設（5月）。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年		工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任（4月）。
2003(平成15)年		第14代理事長に赤澤昭三、第9代院長に倉松功就任（4月）。幼稚園長に長島慎二就任（4月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。
2004(平成16)年	平河内健治	法科大学院・総合研究棟完成（2月）。第4代大学長に星宮望就任（4月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（4月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（4月）。榴ヶ岡高等学校校舎増築（4月）。



年 代	歴代役職者	事 項
2005(平成17)年	 湯本良次	中学・高等学校新校舎完成(仙台市宮城野区小鶴)(1月)。東北学院同窓会館閉館(3月)。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設(4月)。 
2006(平成18)年	 大橋邦一	工学基礎教育センター完成(3月)。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称(4月)。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任(4月)。創立120周年記念式典挙行(5月)。
2007(平成19)年	 松本宣郎	中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成(3月)。第10代院長に星宮望就任(4月)。中学校・高等学校長に永井英司就任(4月)。秋田オープンキャンパス開催(7月)。多賀城市と連携協定締結(11月)。
2008(平成20)年	 佐々木哲夫	第15代理事長に平河内健治就任(6月)。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成(9月)。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。
2009(平成21)年	 大西晴樹	経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部部に共生社会経済学科を新設(4月)。大学院経営学研究科(修士課程)を設置(4月)。幼稚園長を平河内健治兼任(4月)。榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典挙行(11月)。東北学院大学博物館開設(11月)。
2010(平成22)年	 阿部恒幸	バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設(3月)。東北学院発祥の地に記念碑建立(10月)。
2011(平成23)年	 河本和文	中学校・高等学校跡地に記念碑建立(3月)。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組(4月)。幼稚園長に佐々木勝彦就任(4月)。
2012(平成24)年	 帆足直治	榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任(4月)。工学部設置50周年記念式典挙行(11月)。
2013(平成25)年	 帆足直治	第5代大学長に松本宣郎就任(4月)。中学校・高等学校長に大橋邦一就任(4月)。幼稚園長に阿部正子就任(4月)。文学部史学科・歴史学科創設50周年記念式典挙行(11月)。
2014(平成26)年	 帆足直治	第16代理事長に松本宣郎就任(4月)。 東北学院資料室を改称し東北学院史資料センターを設置(4月)。
2015(平成27)年	 帆足直治	第11代院長に佐々木哲夫就任(4月)。 法学部法律学科創設50周年記念式典挙行(5月)。
2016(平成28)年	 帆足直治	ホーイ記念館完成(3月)。創立130周年記念式典挙行(5月)。東北学院旧宣教師館(デフォレスト館)が国の重要文化財に指定(7月)。
2017(平成29)年	 帆足直治	工学部電気情報工学科を電気電子工学科に改称し、情報基盤工学科を新設(4月)。 『東北学院の歴史』刊行(10月)。
2018(平成30)年	 帆足直治	文学部に教育学科を新設(4月)。 米国ランカスター神学校と国際交流協定締結(7月)。
2019(令和元年)	 帆足直治	教養学部創設30周年記念式典挙行(3月)。 第12代院長に松本宣郎就任(4月)。 第6代大学長に大西晴樹就任(4月)。 中学校・高等学校長に阿部恒幸就任(4月)。 榴ヶ岡高等学校創立60周年記念式典挙行(11月)。 
2020(令和2)年	 河本和文	記念映画「東北学院の40年」完成(3月)。 第13代院長に大西晴樹就任(4月)。 第17代理事長に原田善教就任(4月)。 幼稚園長に島内久美子就任(4月)。
2021(令和3)年	 河本和文	榴ヶ岡高等学校長に河本和文就任(4月)。
2022(令和4)年	 河本和文	工学部設置60周年記念式典挙行(11月)。
2023(令和5)年	 帆足直治	大学五橋キャンパス完成、大学工学部・教養学部を移転(4月)。 五橋キャンパスに地域総合学部(地域コミュニティ学科・政策デザイン学科)・情報学部(データサイエンス学科)・人間科学部(心理行動学科)・国際学部(国際教養学科)を設置(4月)。 中学校・高等学校校長に帆足直治就任(4月)。
2024(令和6)年	 帆足直治	東北学院史資料センター事務室設置(6月)。



利用案内

東北学院史資料センターは、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

月～金 9:00～17:00

(土・日・祝祭日および大学の定める休業日は閉室)



学校法人 東北学院

発行日 2025 (令和7) 年3月1日
 編集 東北学院史資料センター年報編集委員会
 発行 学校法人 東北学院
 〒980-8511
 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
 TEL.022-264-6538
<http://www.tohoku-gakuin.jp/>
 印刷 株式会社 東北プリント

ISSN 2434-6314



表紙の写真

「星窓」閉校記念特集号掲載の
「明り輝く全景」(左)と1997年度
東北学院大学卒業記念アルバムより

東北学院の夜間教育の始まりは1942（昭和17）年まで遡る。高等学部商科第二部・中学部第二部が設置され、その後、時代の要請に従い名称・形・役割を変えながら、東北学院は長く夜間教育を実施してきたが、1983（昭和58）年の高校二部の廃止と2015（平成27）年の大学文学部昼夜開講制廃止で東北学院の夜間教育の歴史が幕を閉じることとなった。写真は「星窓」閉校記念特集号（東北学院高校第二部 昭和58年3月）掲載の「明り輝く全景」と1997年度東北学院大学卒業記念アルバムより。